

Ⅱ. 評定尺度調査の分析結果

【評定尺度調査の分析にあたって】

今回用いた評定尺度は、「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」による4段階評価である。本報告書においては、データの理解や分析のしやすさを考慮し、便宜的に4段階のカテゴリーに4～1の点数を振り、その平均値を算出することによって、データの代表値とした。ただし評定尺度の各カテゴリーに振られた「数字」を「数値」として加減乗除の演算をすることは、厳密に言えば統計処理として適切でない。3が2よりもあてはまる程度が大きいことは言えても、4と3の間と3と2の間が等距離（つまり1の間隔）だという保証はどこにもないからである。しかし4つのカテゴリーごとの相対度数（パーセント）から何らかの傾向を掴み取ることは容易ではないため、平均値を回答の傾向を推察する目安の1つとして用いたい。

また、ここでの平均値は何らかの単位を持つものではないので、データ同士の相対比較でのみ、その傾向を読み取ることになる。仮にある項目の平均値が、他の項目より低かったとしても、大部分の回答者がその項目に対して肯定的な評価をしていれば、その項目の評価は低いと簡単に断言できるものではないからである。つまり絶対的な評価が把握しにくいと言える。そこで、「あてはまる」もしくは「ややあてはまる」と回答した対象者の割合を同時に提示した。これによって、その評価項目に対し肯定的評価をしている学生がいかほどの割合で存在するかを推測する目安とする。

さらに回答者の属性ごとの回答者数を提示する。本来ならば、グラフ等のデータごとに回答者数を示すべきであるが、データの構造上、全てのデータに回答者数を掲載すると極めて煩雑になるため、ここに一括して掲載することにした（次頁表2-1）。以下、本章においては、常に次頁の回答者数に基づいてデータを見る必要がある。特に回答者数の少ない層ほど誤差も大きく出る可能性があるため、注意が必要である。たとえば、学部の職業別「他大学等の学生」（13人）や年齢階層別「19歳以下」（17人）、大学院の職業別「農業等」（6人）、「他大学等の学生」（3人）、年齢階層別「20～29歳」（11人）等の場合である。（参考値として、記載している。）

表 2 - 1 回答者数一覧

【学部】

全体		(単位:人)	
メディア		年齢階層	
テレビ科目(TV)	2,791	19歳以下	17
ラジオ科目(R)	1,732	20～29歳	306
職業		30～39歳	501
公務員等	240	40～49歳	927
教員	138	50～59歳	862
会社員	888	60～69歳	1,221
個人営業・自営業	317	70歳以上	663
農業等	38	コース	
看護師等	532	基盤科目	189
家事専業	348	基盤科目(外国語)	286
パート・アルバイト	538	生活と福祉	831
他大学等の学生	13	心理と教育	958
無職	1,182	社会と産業	1,010
その他	239	人間と文化	441
		情報	219
		自然と環境	528
		夏季集中科目(司書)	62
		夏季集中科目(看護)	-

【大学院】

全体		(単位:人)	
メディア		年齢階層	
テレビ科目(TV)	-	20～29歳	11
ラジオ科目(R)	705	30～39歳	65
職業		40～49歳	121
公務員等	83	50～59歳	212
教員	74	60～69歳	217
会社員	120	70歳以上	75
個人営業・自営業	73	プログラム	
農業等	6	生活健康科学	65
看護師等	40	人間発達科学	133
家事専業	37	人文学	148
パート・アルバイト	69	情報学	25
他大学等の学生	3	社会経営科学	154
無職	145	臨床心理学	180
その他	46		

※職業及び年齢には無回答があるため、職業及び年齢階層の回答者数をそれぞれ合計しても、全体の回答者数とは一致しない。

Ⅱ－1. 学部の分析結果

Ⅱ－1－1. 項目平均から見た全体的傾向

評価項目の内容ごとに回答者全体の平均値と肯定的評価を A-1～A-3 等の項目平均を算出したのが（図 2－1）である。

個々の平均値の算出方法は、評価項目の選択肢である「あてまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」に対して順に 4 点、3 点、2 点、1 点の得点を与え、項目ごとに得られた得点合計を回答者数で割った値である。

全員が「あてはまる」とした場合、平均値は 4.00 で最も高くなり、全員が「あてはまらない」とすると最低の 1.00 となる。

肯定的評価は「あてはまる」と「ややあてはまる」の比率の合計である。

肯定的な評価（百分率）の方が（例えば回答者の 80% [8 割] と）イメージしやすく、平均値と肯定的評価に食い違いが出た場合、どちらを採用するか迷うことになるため、コメントについては肯定的評価を用いて、平均値は参考値として扱っていきたい。

また、2015 年からの開設年度比較の箇所は比率の差の検定結果から、学部はサンプルサイズが大きいため（2017 年度 4524 人、2016 年度 5108 人、2015 年度 5901 人）、概ね 2 ポイントの差で有意となり、1 ポイントでは有意差がなかったため 2 ポイント以上で差があることとした。

図 2－1 の全体的な傾向では、『放送授業』と『学習への取組み姿勢』は 76% と 78% で 8 割を下回ったが、『全体評価』までの他の 4 項目は 80% 以上の評価を得ていた。

中でも『全体評価』は 84% と項目間で最も高かった。

『授業評価に関わる項目平均』と『全項目平均』は共に 80% であった。

図 2－1 【学部】項目平均による全体的傾向

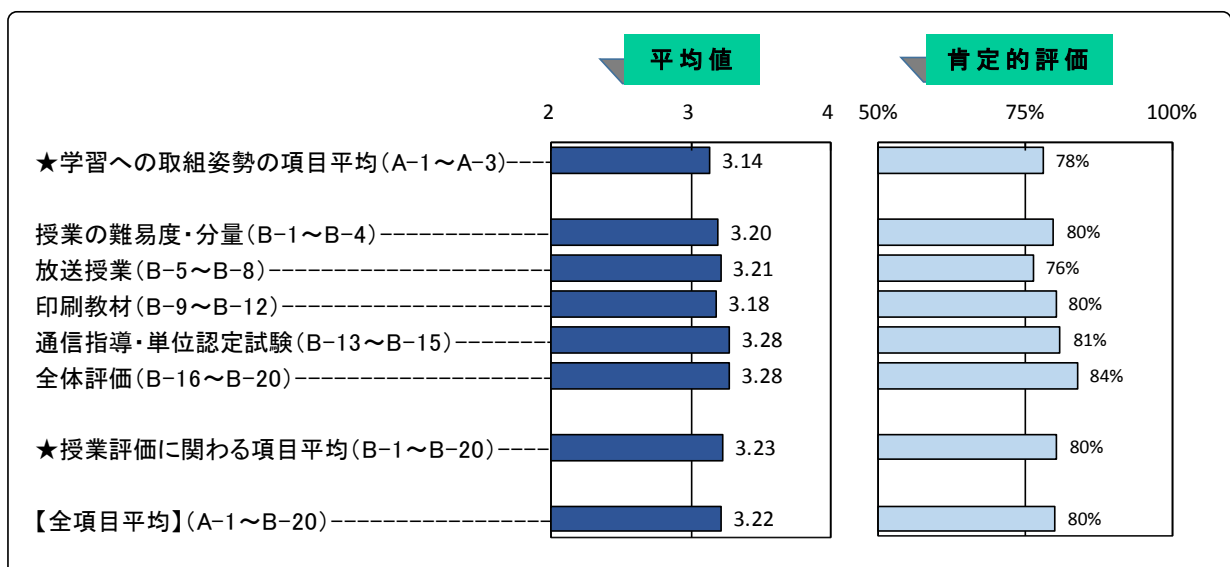
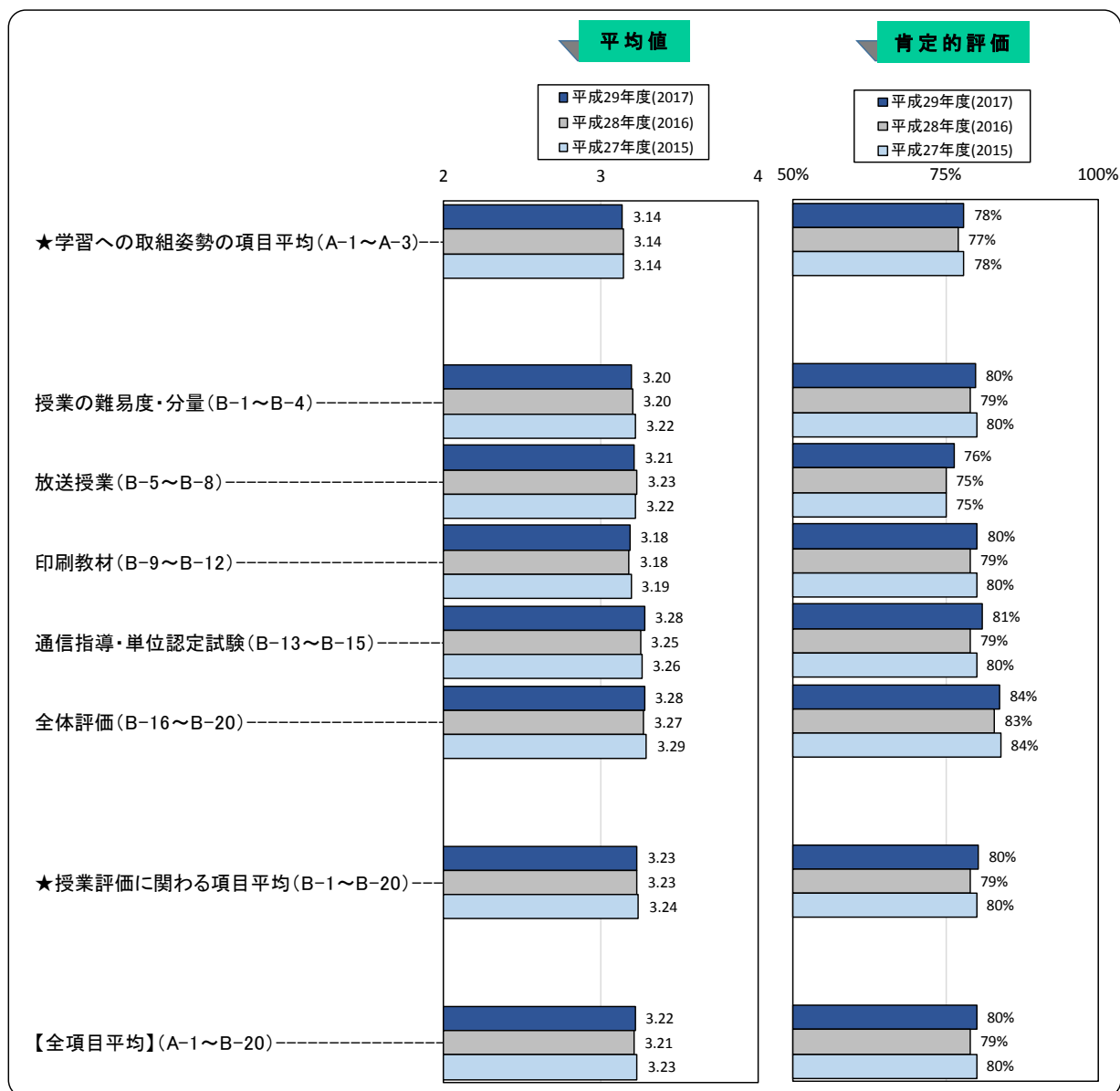


図2-2で過去2年度と2017年度を比較すると肯定的評価では『通信指導・単位認定試験』を除く全の項目で1ポイント以内の差でほとんど変わらなかった。

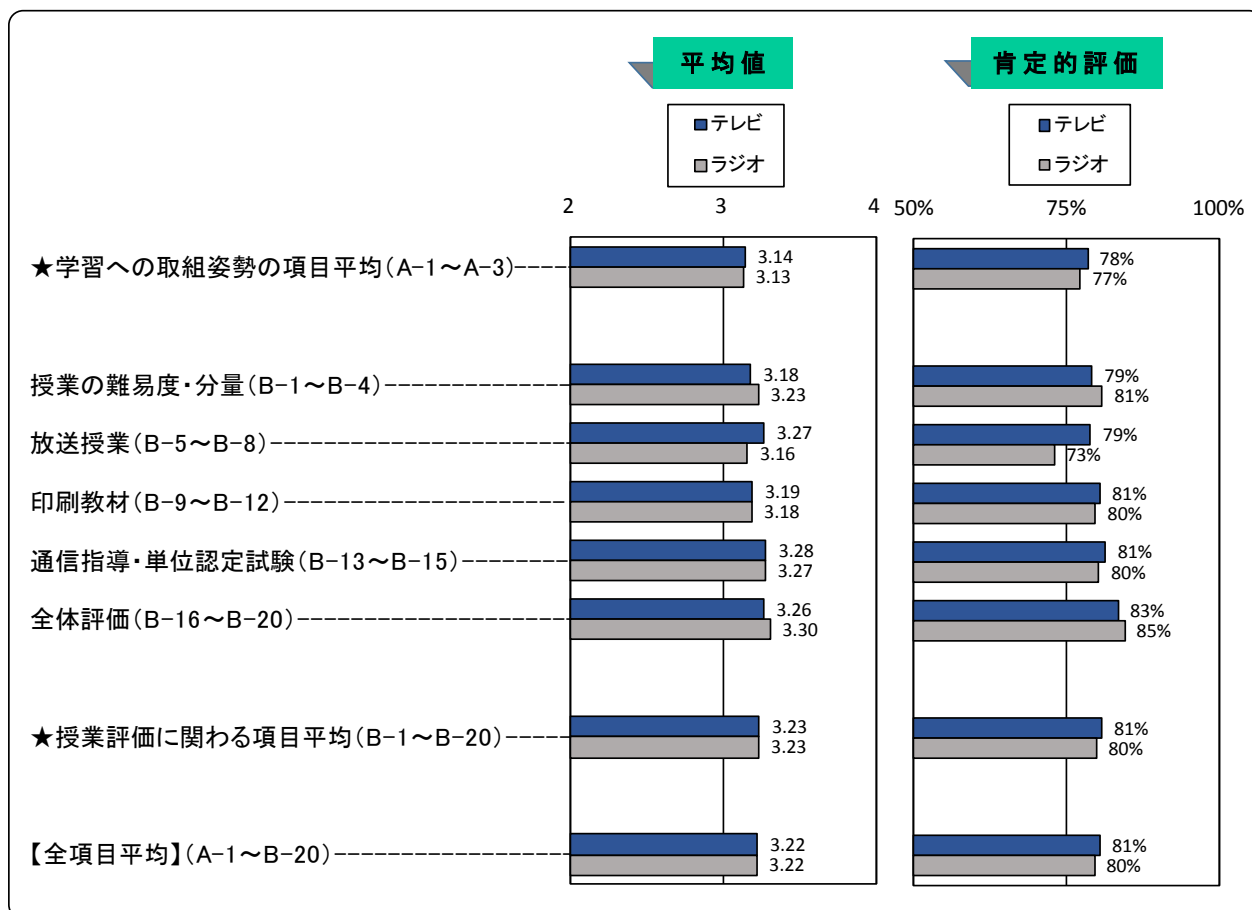
『通信指導・単位認定試験』だけは2017年度は2016年度に比べ2ポイントと僅かな上昇がみられた。

図2-2 【学部】項目平均による全体的傾向（開設年度比較）



メディア別に2017年度新規開設科目の『学習への取組み姿勢』から『全体評価』までをみると(図2-3)、『放送授業』以外はテレビ科目(n=2791)とラジオ科目(n=1732)に差はほとんどみられなかった。評価に差のあった『放送授業』はテレビの方が、ラジオを6ポイントと大きく上回っていた。

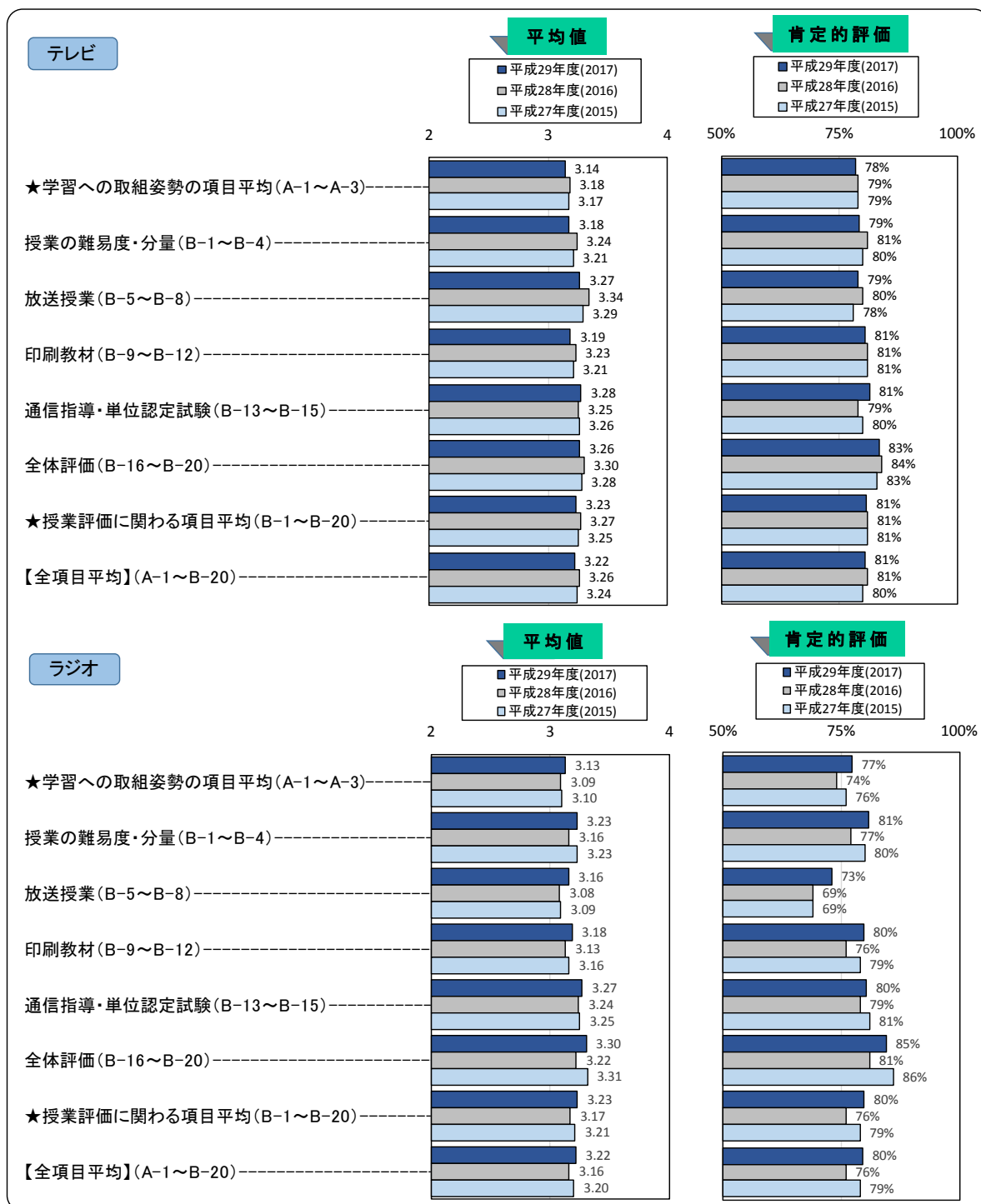
図2-3 【学部】項目平均によるメディア別全体的傾向



次にメディア別の項目平均を科目の開設年度で比較してみると（図2-4）、肯定的評価でテレビ科目は、2017年度は2015年度とほとんど変わらなかった。だが、2016年度との比較では『授業の難易度・分量』で減少傾向、『通信指導・単位認定試験』では増加傾向であった。

ラジオ科目では『通信指導・単位認定試験』を除く全てで2016年度から3～4ポイントの上昇がみられた。

図2-4 【学部】項目平均によるメディア別全体的傾向（開設年度比較）



回答者の年齢階層別に 2017 年度新規開設科目の項目平均をみると（図 2-5）、肯定的評価で『印刷教材』と『通信指導・単位認定試験』を除く項目で 19 歳以下の評価が低かった。

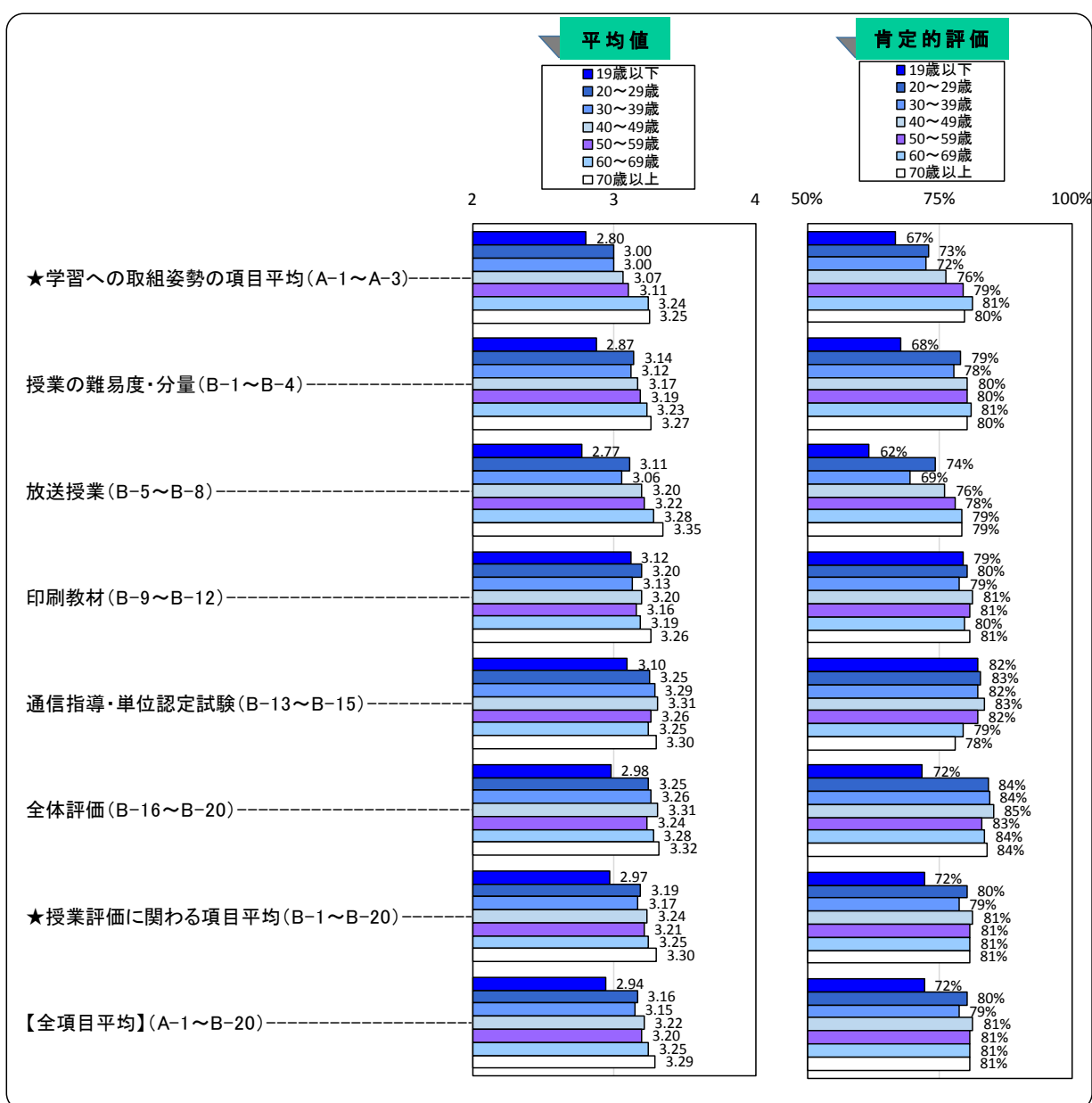
ただし、19 歳以下の標本数が 17 と小サンプルで誤差が大きくなるため、これ以降参考値として考えたい。

『学習への取組み姿勢』は概ね年代の上がるにつれ、評価の上昇がみられ 60 歳代、70 歳以上で 80% 前後に達していた。

『放送授業』は 30 歳代の評価の低さが目立っている。

『通信指導・単位認定試験』は 60 歳代と 70 歳以上の評価が低かった。

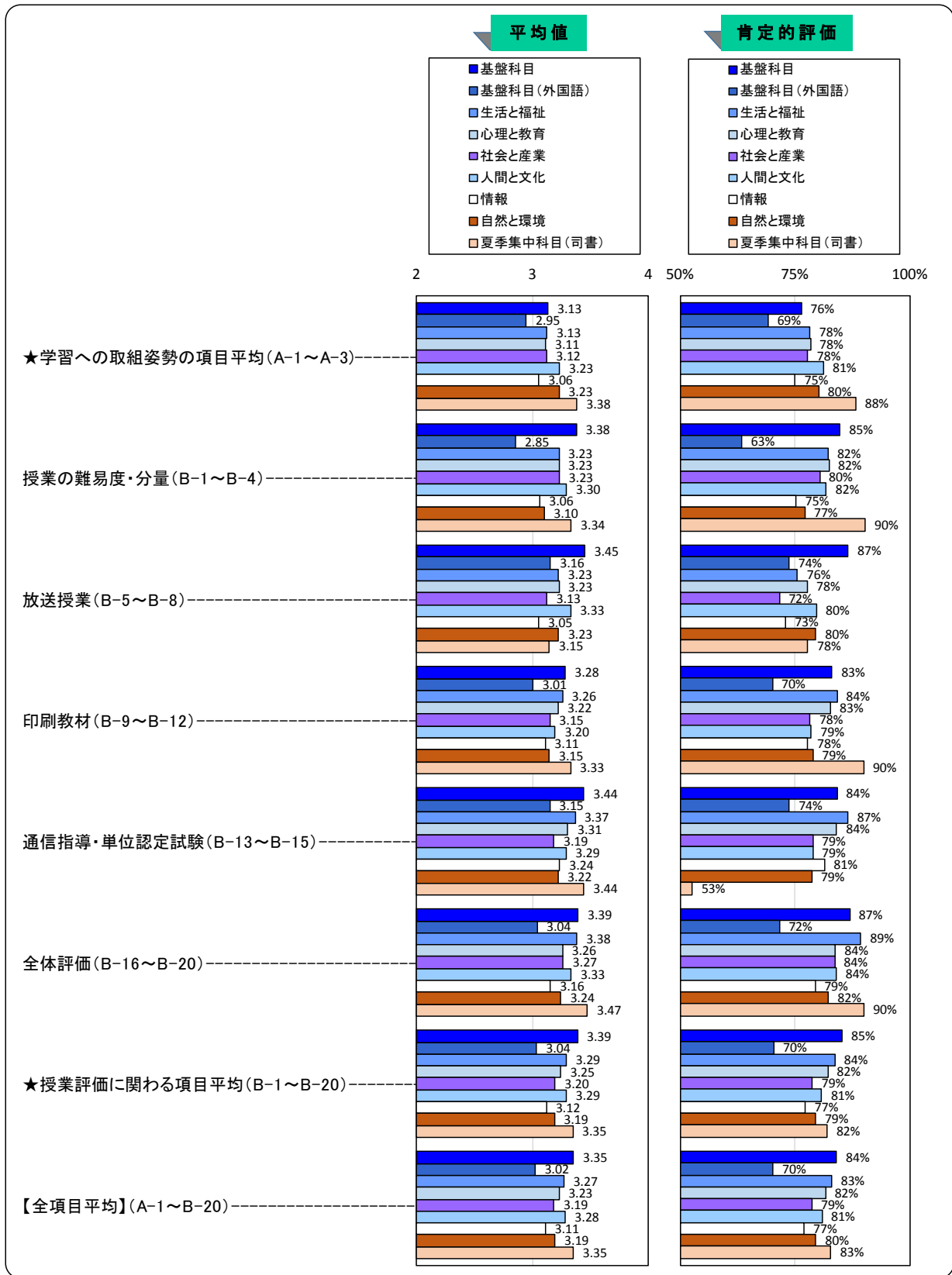
図 2-5 【学部】項目平均による年齢階層別全体的傾向



科目の所属コース等別に項目平均をみると（次頁図 2 - 6）、「基盤科目（外国語）」は『放送授業』を除く全項目にわたって他の科目に比べ評価が低かった。

反対に夏季集中科目（司書は）『全体評価』までの 6 項目中『学習への取組み姿勢』『授業の難易度・分量』『印刷教材』『全体評価』の 4 項目で最も評価が高く、88%～90%の支持率であった。ただ、『通信指導・単位認定試験』（53%）については他の科目より 20 ポイント以上低く、固有の傾向がみられた。

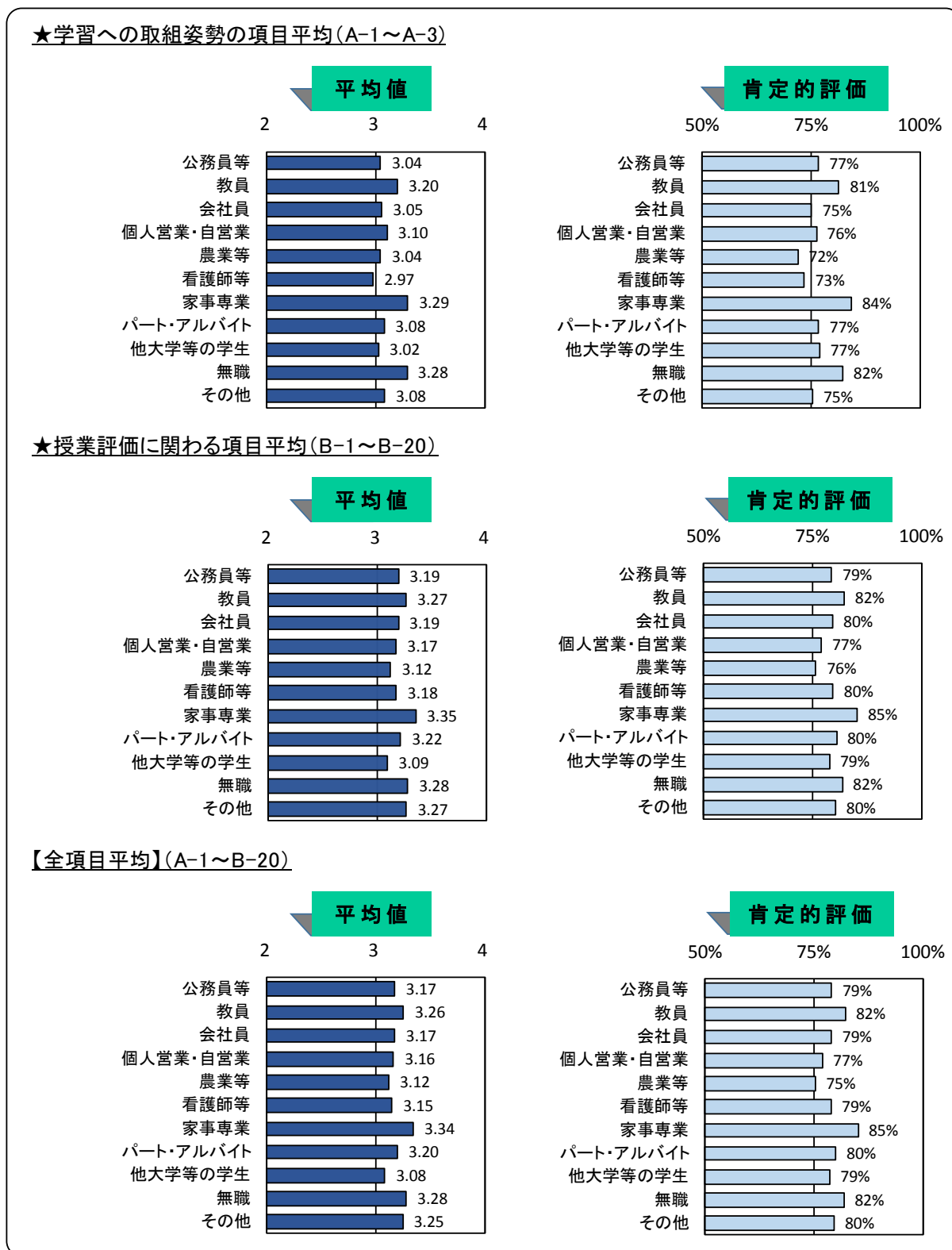
図 2-6 【学部】項目平均による所属コース別全体的傾向



職業別では（図2-7）『学習への取組み姿勢』『授業評価に関わる項目平均』『全項目平均』共に「家事専業」の評価が最も高く、「教員」「無職」がこれに続く。

反対に最も評価が低かったのは「農業等」で、「家事専業」よりも10ポイント前後の差があった。

図2-7 【学部】項目平均による職業別全体的傾向

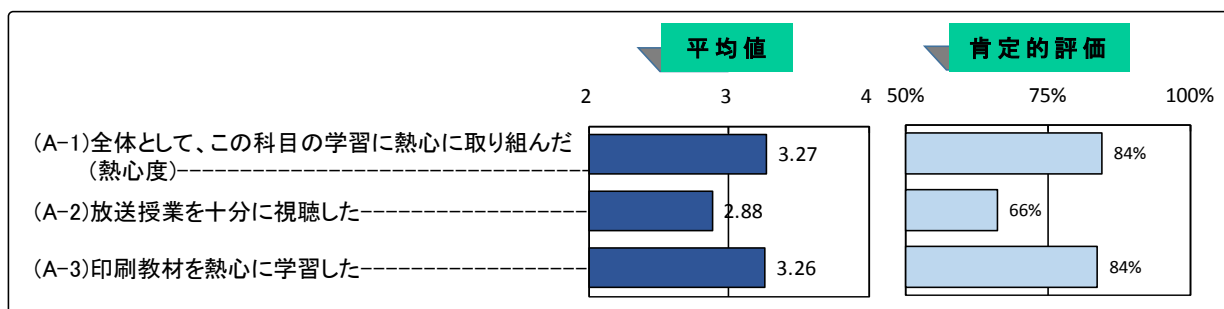


Ⅱ-1-2. 学習への取組み姿勢

ここからはそれぞれ評価項目ごとに調査結果をみていく。

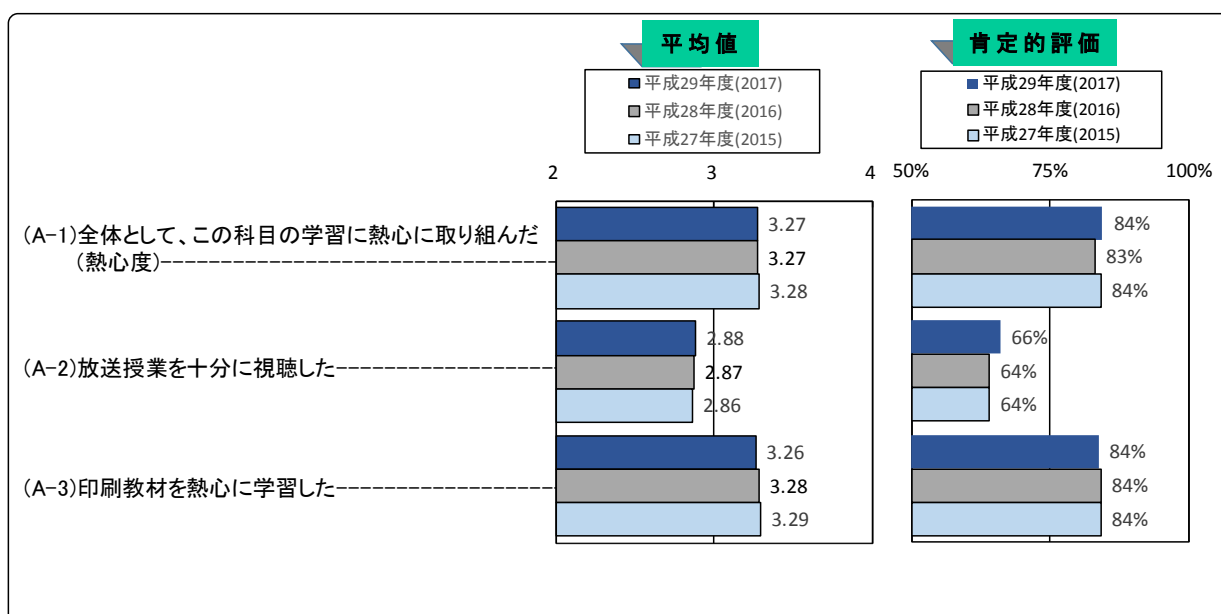
学習への取組み姿勢（図2-8）では、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」の肯定的評価は84%と、8割以上の履修生は熱心に学習していた。同様に(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」も肯定的評価が84%であった。しかし、(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は66%と前述の項目に比べ低く、学習は印刷教材のウエイトが高かった。

図2-8 【学部】回答者全体の取組姿勢



取組姿勢を時系列でみると（図2-9）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」と(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」の肯定的評価は過去2年度と同じ水準であった。ただ、2017年度の(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は過去2年度と比べわずかに上昇していた。

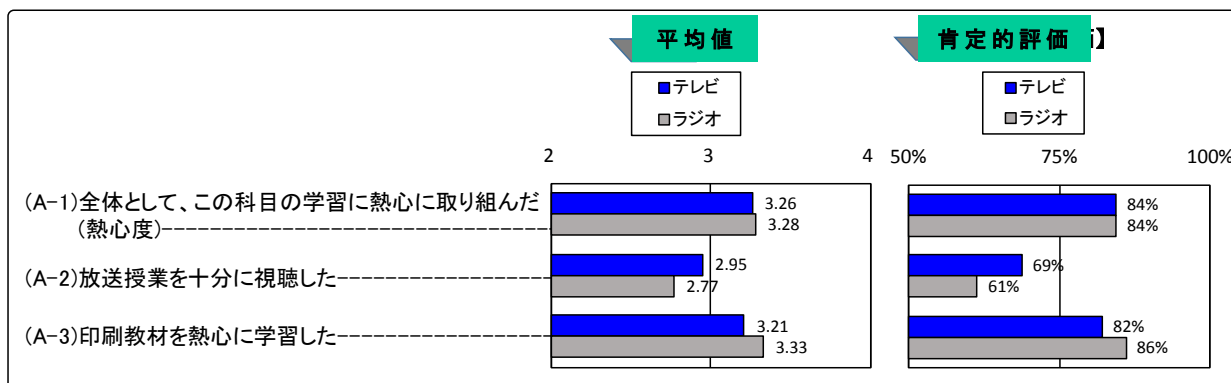
図2-9 【学部】回答者全体の取組姿勢（時系列）



次にメディア別の取組姿勢では（図 2 - 1 0）、(A-1)「全体として、この科目の学習に取り組んだ」の項目ではテレビ科目、ラジオ科目とも同水準であった。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」はテレビ科目の方がラジオ科目を大きく上回り、逆に (A-3)「印刷教材を熱心に学習した」はラジオ科目の方がテレビ科目より支持率は高かった。

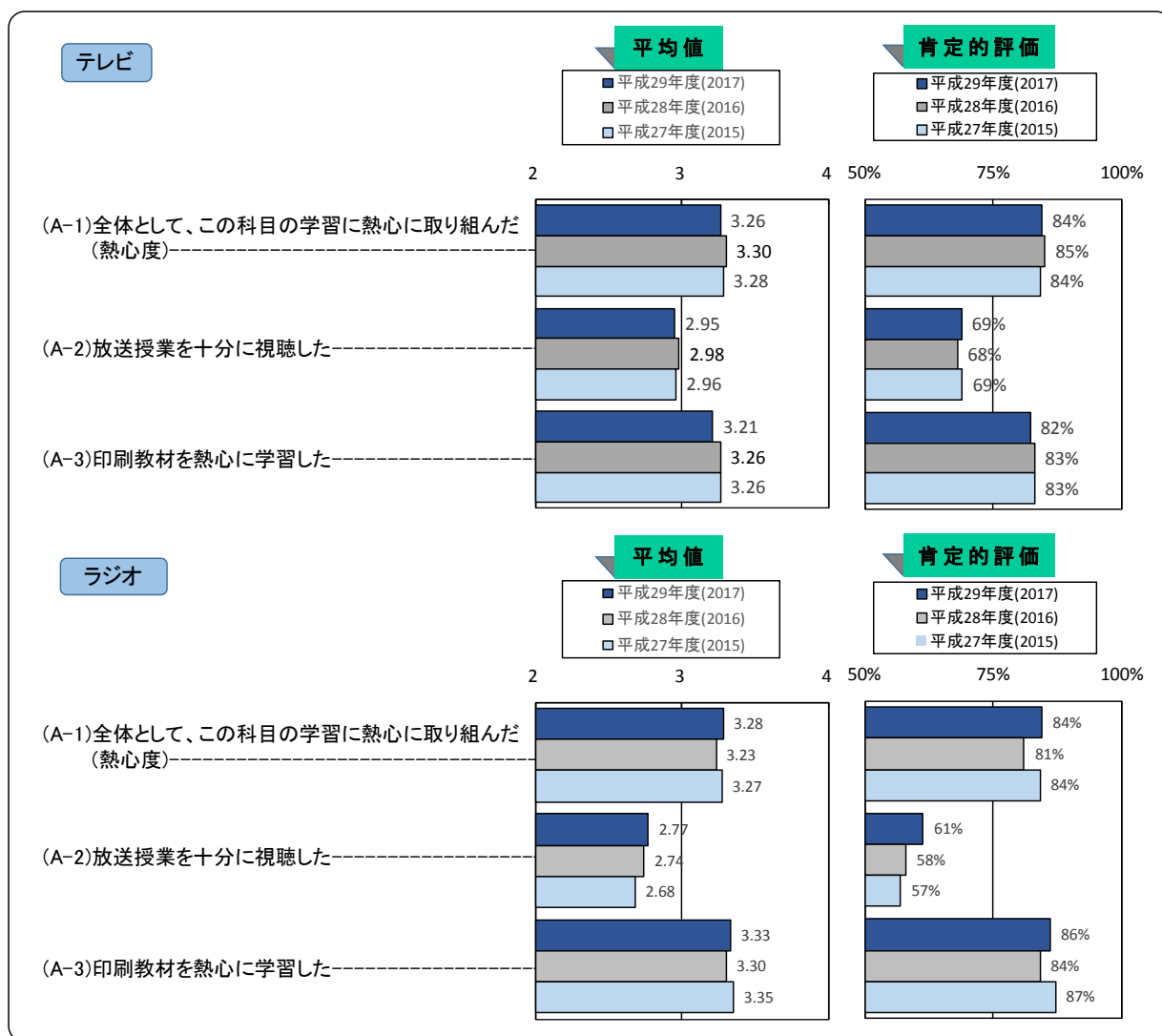
図 2 - 1 0 【学部】メディア別の取組姿勢



メディア別の取組姿勢を時系列でみると（図2-11）、テレビ科目は、過去2年度と『学習への取組み姿勢』の3項目で、ほとんど変化は見られなかった。

ラジオ科目については3項目とも、2016年度から2～3ポイントの上昇がみられた。

図2-11 【学部】メディア別の取組姿勢（時系列）



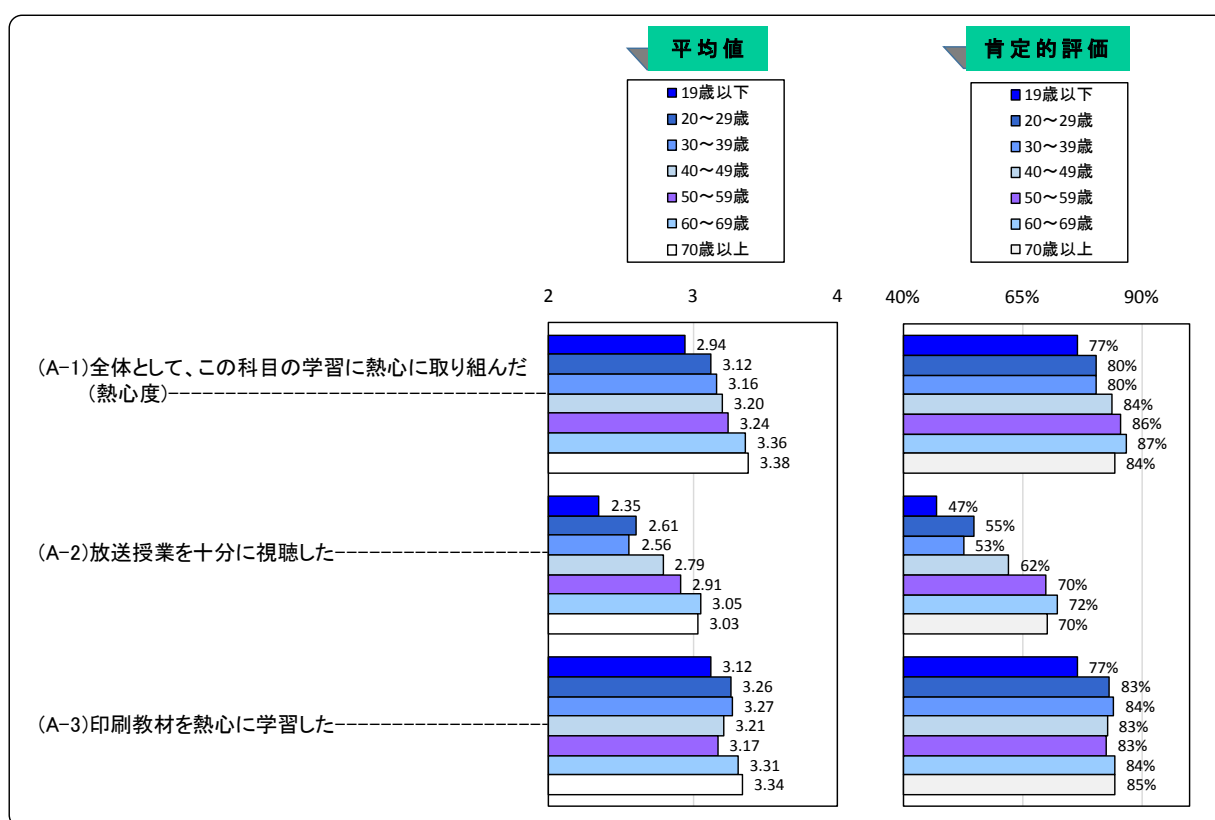
年齢階層別に取り組姿勢をみると（図2-12）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」は40歳代以上で熱心度が高く、特に60歳代は87%と高率であった。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」では50歳代以上で取り組み姿勢が良く、いずれも70%以上であった。

(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」では19歳以下を除く、20歳代以上は83%～85%と一様に高い値であった。

(19歳以下は先の3項目で熱心度が最も低い傾向であったが、サンプルサイズが17と小さいため参考値と扱っていく。)

図2-12 【学部】年齢階層別に取り組姿勢



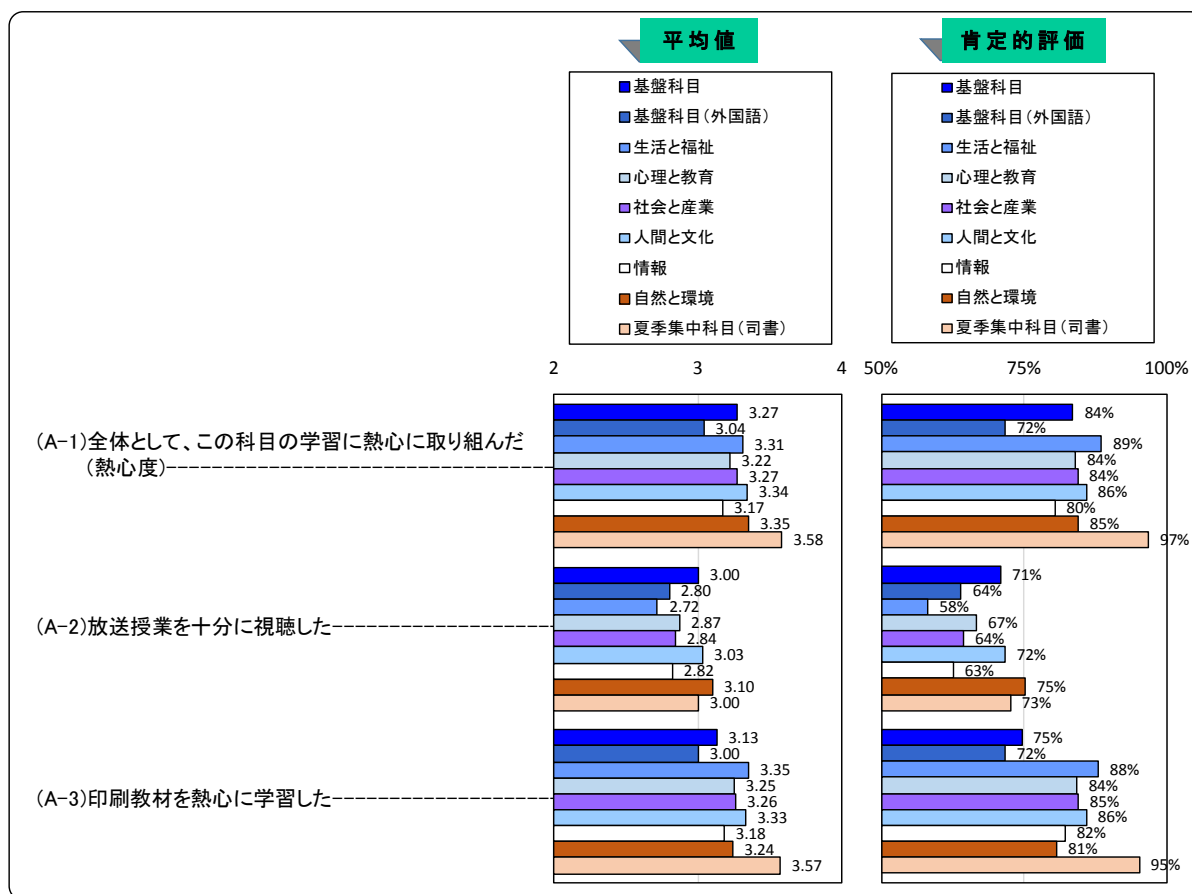
所属コース別に取り組姿勢をみると（図2-13）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」は「基盤科目（外国語）」が他の科目と比べ極端に低く、それ以外の科目は80%以上で、特に「夏季集中科目(司書)」は97%と群を抜いていた。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」については「基盤科目」「人間と文化」「自然と環境」「夏季集中科目(司書)」がともに70%越えて、他の科目より支持率が高かった。

(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」では「夏季集中科目(司書)」が95%で際立っていた。

反対に、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」と(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」では、基盤科目（外国語）の評価はともに72%と他のコースと対比すると支持率は低かった。

図2-13 【学部】所属コース別の取組姿勢



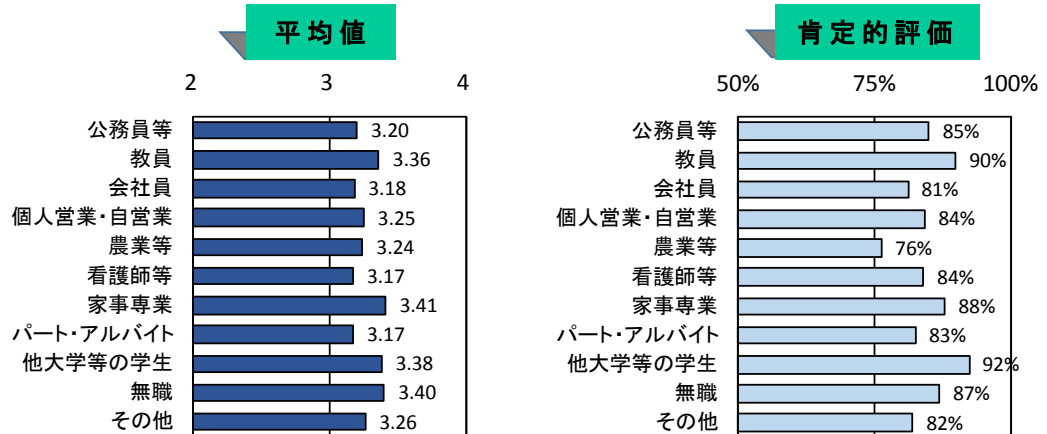
職業別に取り組姿勢をみると（次頁図 2-14）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」は、「農業等」の値が他の職業と比べ 76%と低く、それ以外の職業は 80%以上で、特に「教員」と「他大学等の学生」は 90%以上と高かった。ただ、「他大学等の学生」の標本数が 13 と少なく、誤差が大きくなるため、これ以降参考値として扱っていく。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は「家事専業」と「無職」が 70%を超えて他の職業より高く、反対に「看護師等」は 50%と極端に低かった。

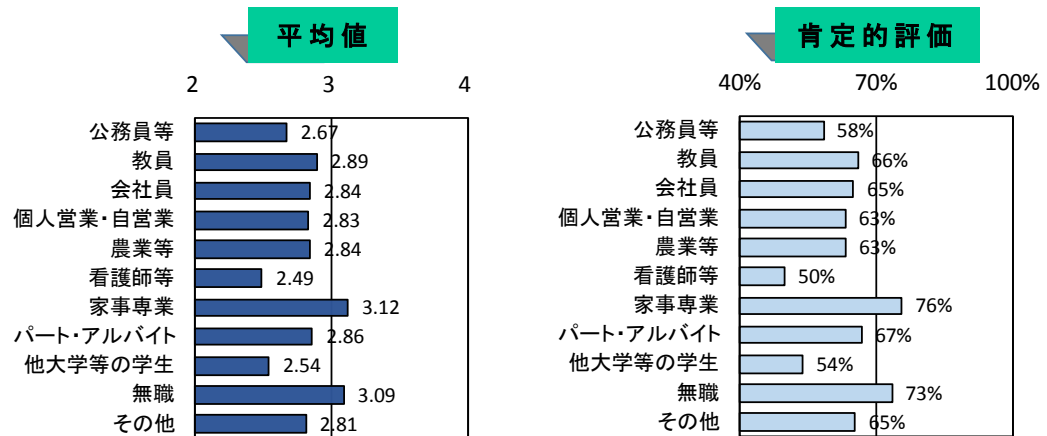
(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」では「公務員等」や「教員」「看護師等」「家事専業」が 80%台の後半で特に高かった。

図 2 - 1 4 【学部】職業別の取組姿勢

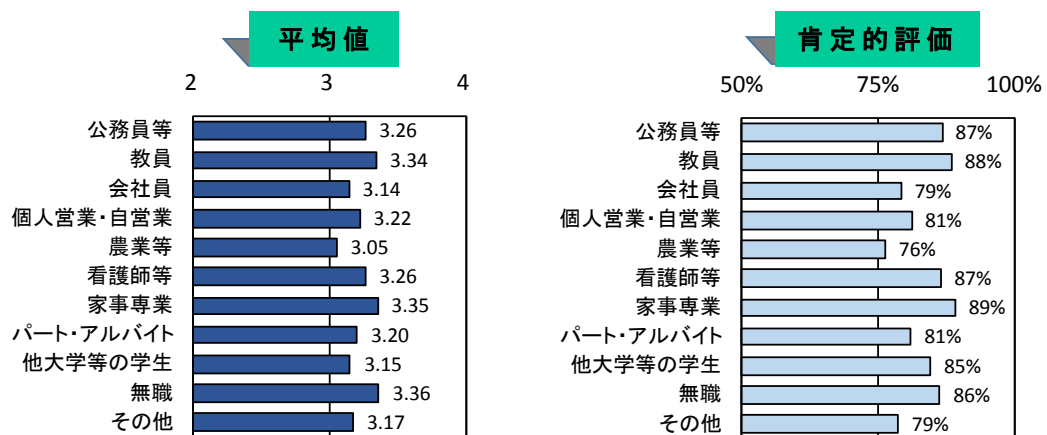
(A-1)全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ(熱心度)



(A-2)放送授業を十分に視聴した



(A-3)印刷教材を熱心に学習した



単位認定のための学習方法（次頁図 2-15）は、全体では『放送教材と印刷教材の両方の学習で臨んだ』が 60% を占め最も高く、次いで『ほとんど印刷教材の学習だけで臨んだ』が 29%、『ほとんど放送教材の学習だけで臨んだ』はわずか 5% であった。

メディア別では「テレビ科目」は全体に比べ『放送教材と印刷教材の両方の学習で臨んだ』がやや多く、その分『ほとんど印刷教材の学習だけ』がやや少なくなっていた。

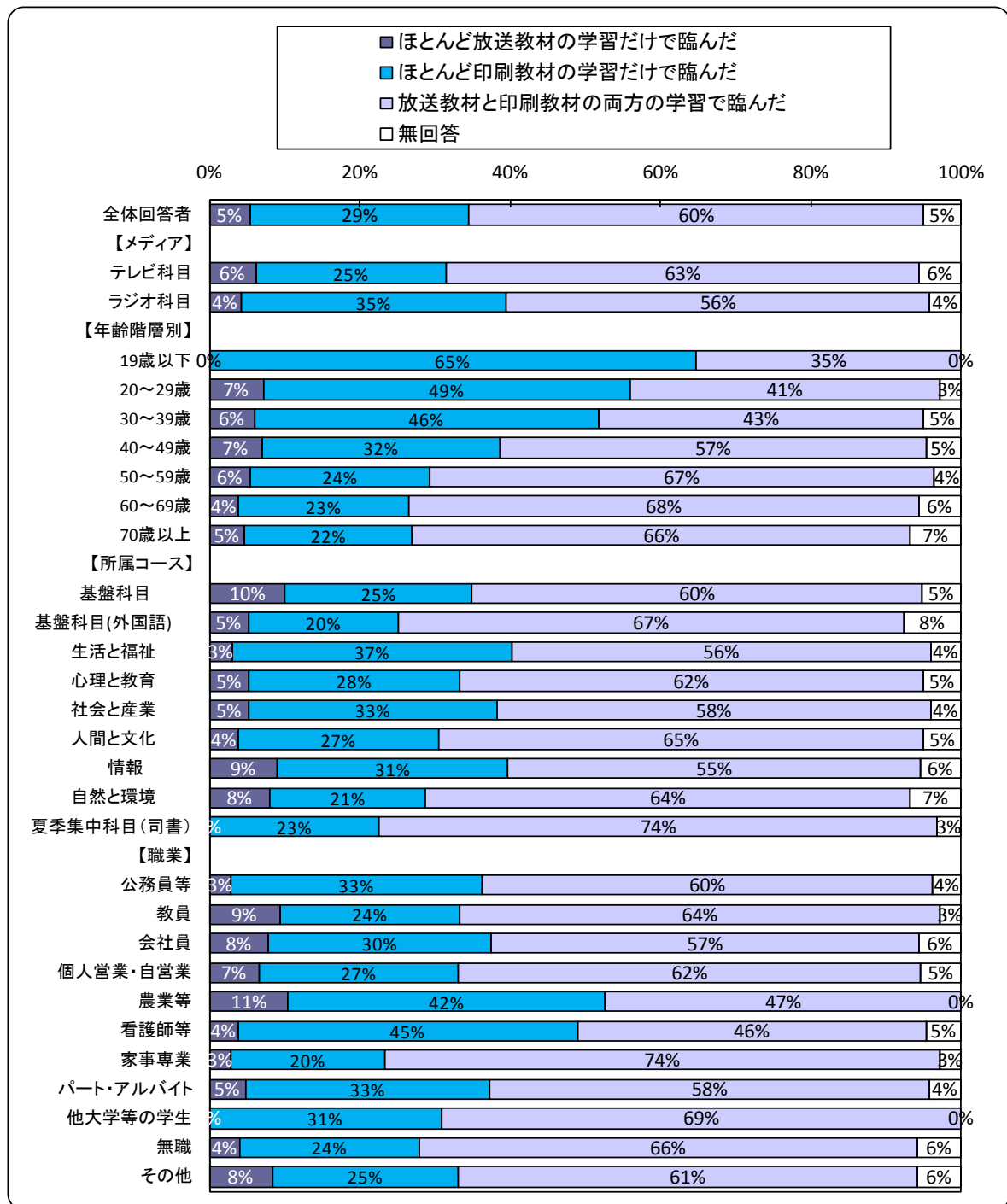
「ラジオ学科」は「テレビ科目」と傾向が逆で『両方の学習で臨んだ』が全体より少なく、『ほとんど印刷教材の学習だけ』が多くなっている。

「年齢階層別」では年代の上昇と共に『ほとんど印刷教材の学習だけ』が減少し、『両方の学習で臨んだ』が増加するという特徴的な傾向で、30 歳代までは『ほとんど印刷教材の学習だけ』が多く、それ以降は『両方の学習で臨んだ』が増加傾向となっている。

「所属コース別」では『ほとんど印刷教材の学習だけ』が最も多かったのは「生活と福祉」の 37%、『両方の学習で臨んだ』が最も多かったのは「夏季集中科目（司書）」の 74% であった。

「職業別」では「農業等」と「看護師等」の『ほとんど放送教材の学習だけ』が 40% 越えで突出していた。

図 2 - 1 5 【学部】 単位認定のための学習方法



Ⅱ－1－3. 学部の授業評価

(1) 全体評価

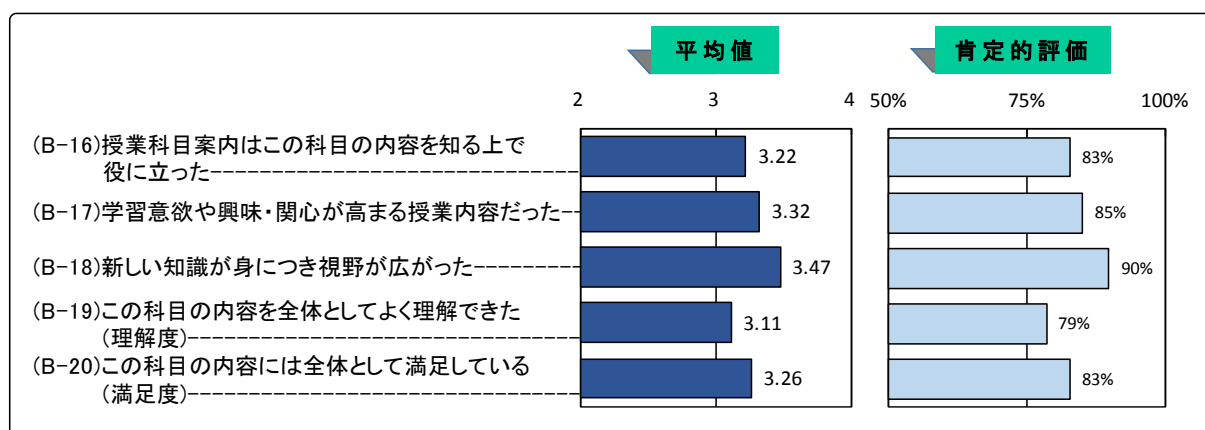
次に学部の授業評価について、評価項目ごとにみていくこととする。

まず全体評価の各項目では(図2-16)、(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」は90%と高い評価を得ていた。

また(B-17)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」も85%と高い。

さらに(B-16)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」と(B-20)「この科目の内容には全体として満足している(満足度)」も共に83%と8割以上であった。

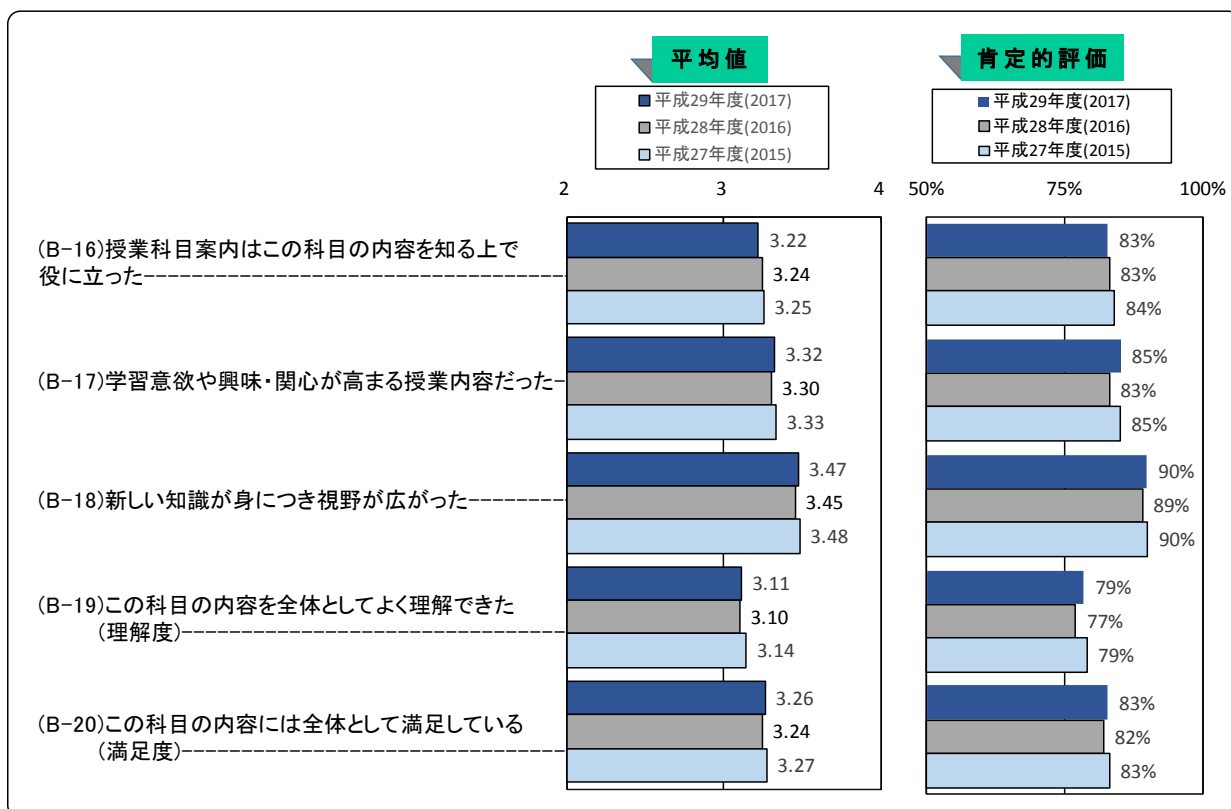
図2-16 【学部】回答者全体の全体評価



全体評価を時系列でみると（図2-17）、2017年度はどの項目も2015年度と同水準で、最も高かったのが（B-18）「新しい知識が身につく視野が広がった」（各90%）で、反対に最も低かったのが（B-19）「この科目の内容を全体として理解できた（理解度）」（各79%）であった。

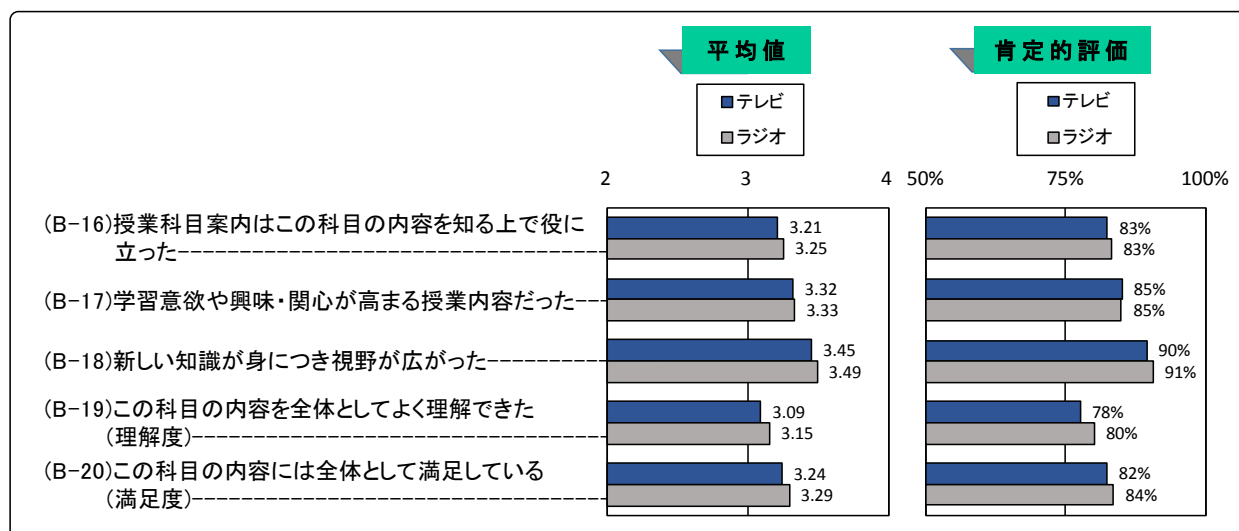
2017年度は（B-17）「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」と（B-19）「この科目の内容を全体として理解できた（理解度）」が2016年度から、わずかであるが比率の上昇が見られた。

図2-17 【学部】回答者全体の全体評価（時系列）



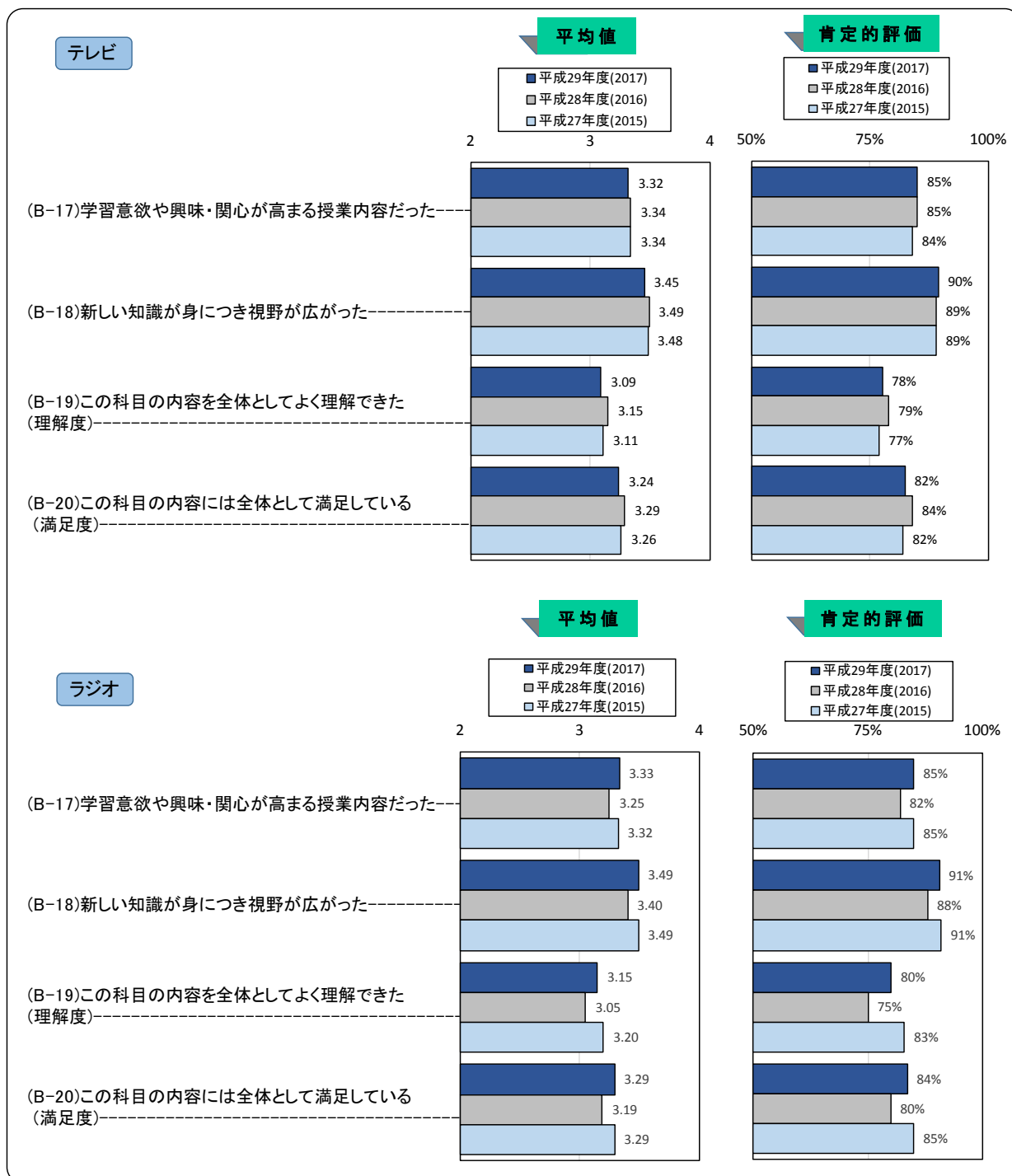
メディア別に全体評価をみると（図 2 - 1 8）、(B-16)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」から(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」まではほぼ変わりはないが、(B-19)「この科目の内容を全体として理解できた（理解度）」と(B-20)「この科目の内容には全体として満足している（満足度）」でラジオ科目の方がテレビ科目をわずかに上回っていた。

図 2 - 1 8 【学部】メディア別の全体評価



メディア別の全体評価を時系列でみると（図2-19）、テレビ科目では2017年度は2015年度と差はなかったが、2016年度との比較で唯一、(B-20)「この科目の内容には全体として満足している（満足度）」で2017年度の減少が（2ポイント）見られたが、82%と「満足度」は高かった。

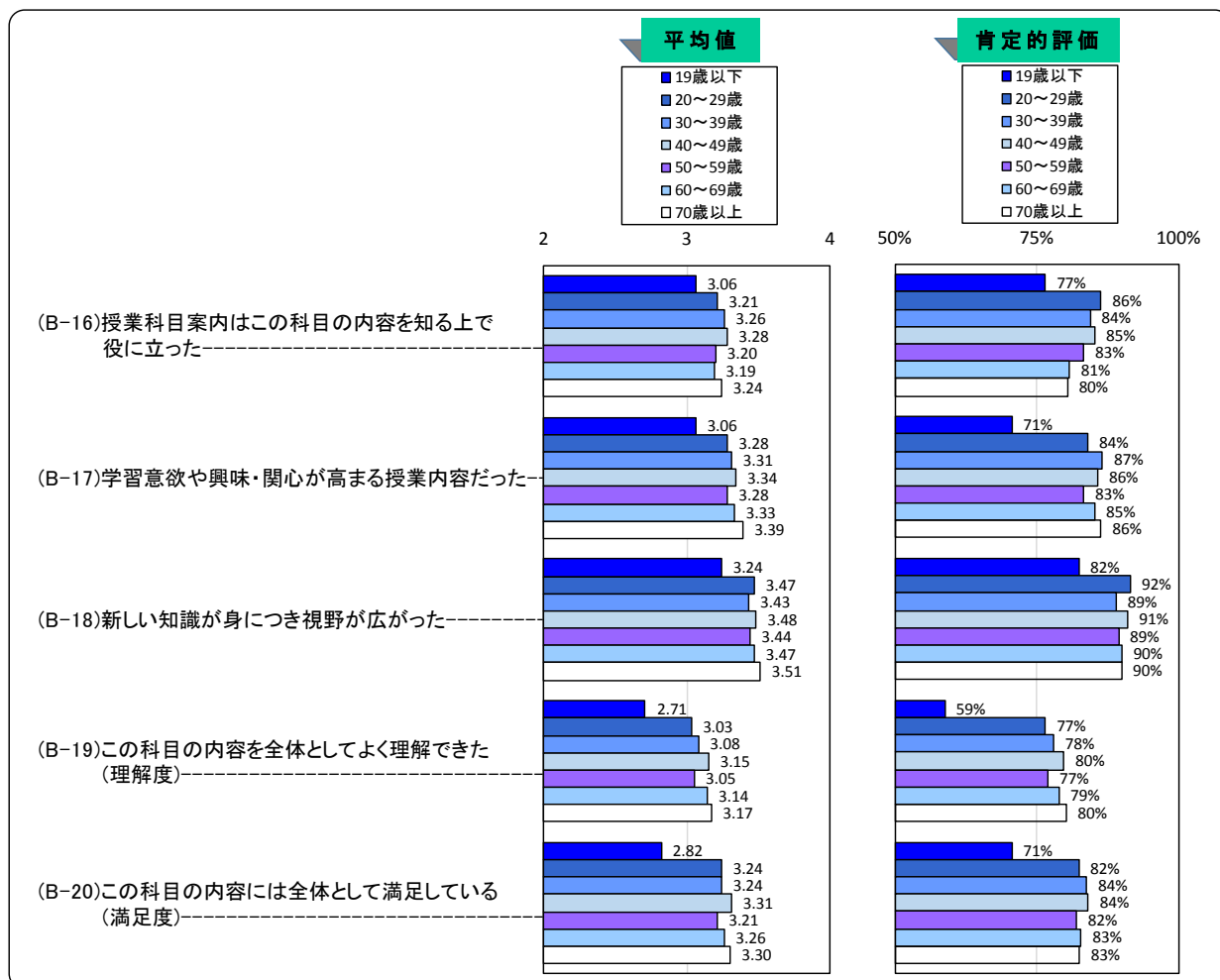
ラジオ科目の過去2年度との比較では、全項目にわたって2016年度の比率が2015年度で3～8ポイント落ち込んでいたが、2017年度はそこからV字回復を達成していた。



年齢階層別に全体評価をみると項目ごとでは(B-16)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」は20歳代の86%をピークに年代の上昇と共に漸減傾向で、70歳以上で80%となっていた。

それ以外では前述の19歳以下、以外は見立った差は見られなかった。

図 2 - 2 0 【学部】 年齢階層別の全体評価

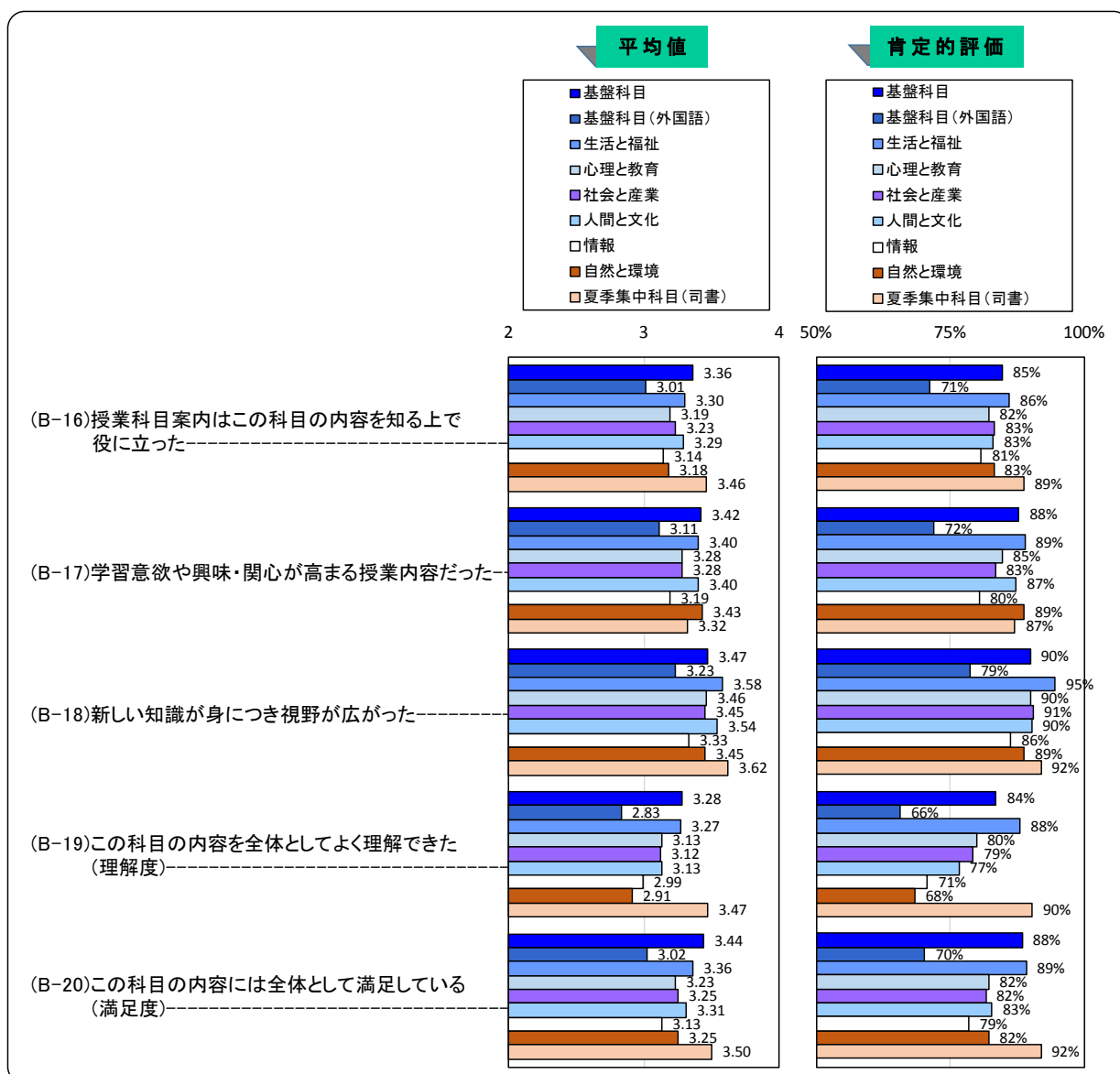


所属コース別の全体評価では（図2-21）、「基盤科目（外国語）」に特異な傾向がみられ、全項目で最も低い支持率となっていた。（B-19）『この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）』では「自然と環境」も低かった。

項目別に見ると（B-16）「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」では「夏季集中科目（司書）」が89%と最も高かった。

その他、（B-17）「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」では「生活と福祉」「自然と環境」（各89%）が、（B-18）「新しい知識が身につく視野が広がった」は「生活と福祉」（95%）が、（B-19）「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」では「夏季集中科目（司書）」（90%）が、（B-20）「この科目の内容には全体として満足している（満足度）」も「夏季集中科目（司書）」（92%）が最も高かった。

図2-21 【学部】所属コース別の全体評価



職業別に全体評価をみると（次頁図 2 - 2 2）（B-17）「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」では「家事専業」（90％）が最も高く、「個人営業・自営業」（80％）で最も低かった。

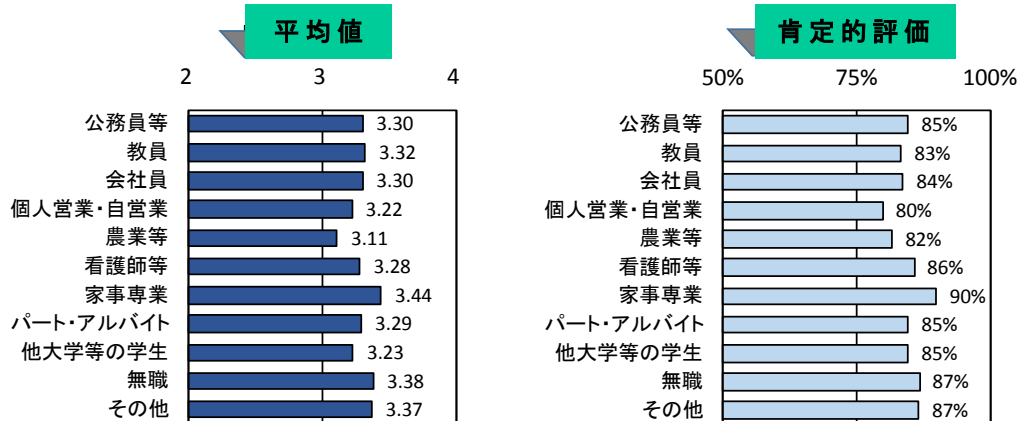
（B-19）「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」については「他大学等の学生」を除けば、「家事専業」（83％）が最も高く、最も低かったのは「農業等」（68％）であった

（B-20）「この科目の内容には全体として満足している（満足度）」で最も高かったのは「家事専業」（87％）、最も低かったのは「他大学等の学生」を除けば「農業等」（79％）であった。

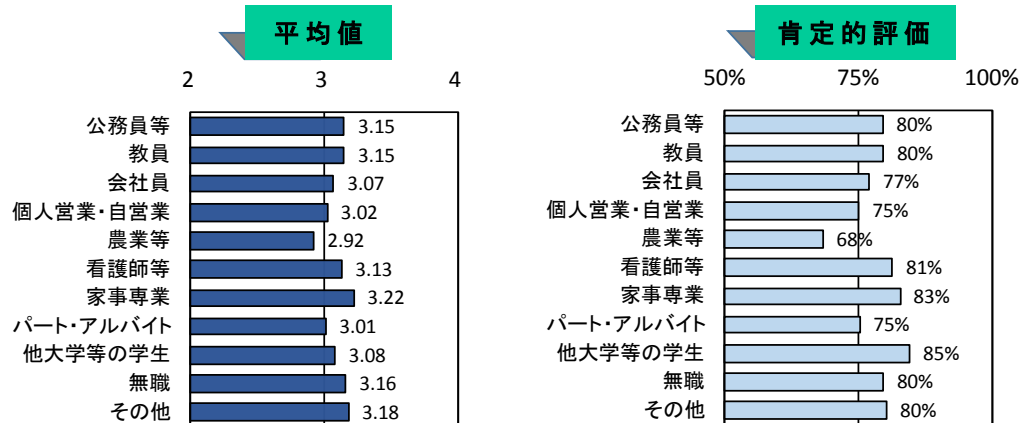
「家事専業」は前述の 3 項目の評価が総じて高かった。

図 2 - 2 2 【学部】職業別の全体評価

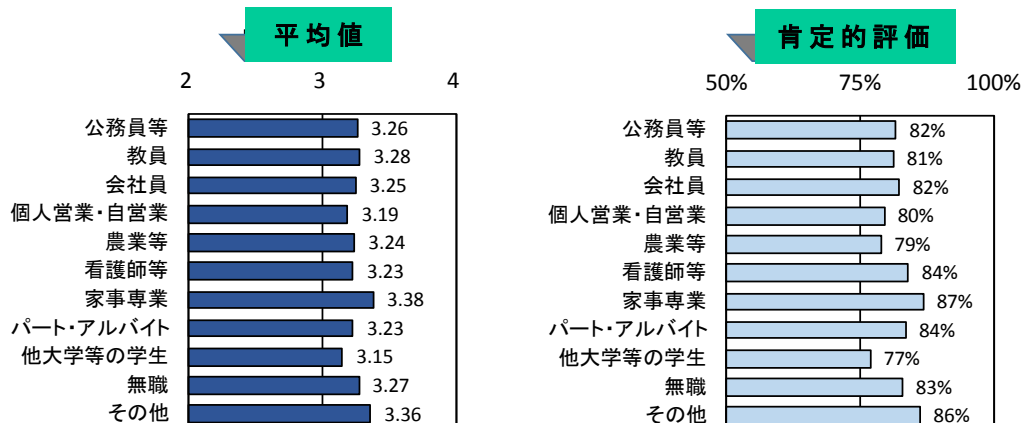
(B-17)学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった



(B-19)この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)



(B-20)この科目の内容には全体として満足している(満足度)

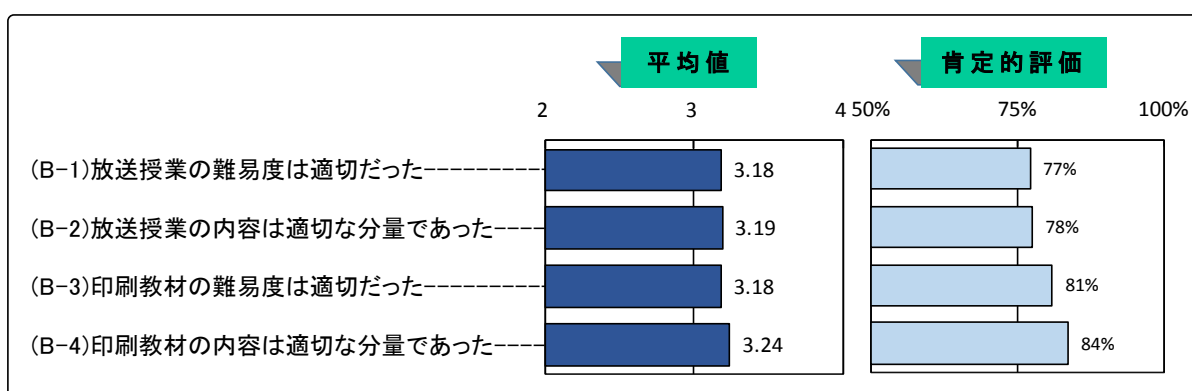


(2) 授業の難易度・分量

次に授業の難易度・分量（図2-23）について、評価項目ごとにみていくこととする。

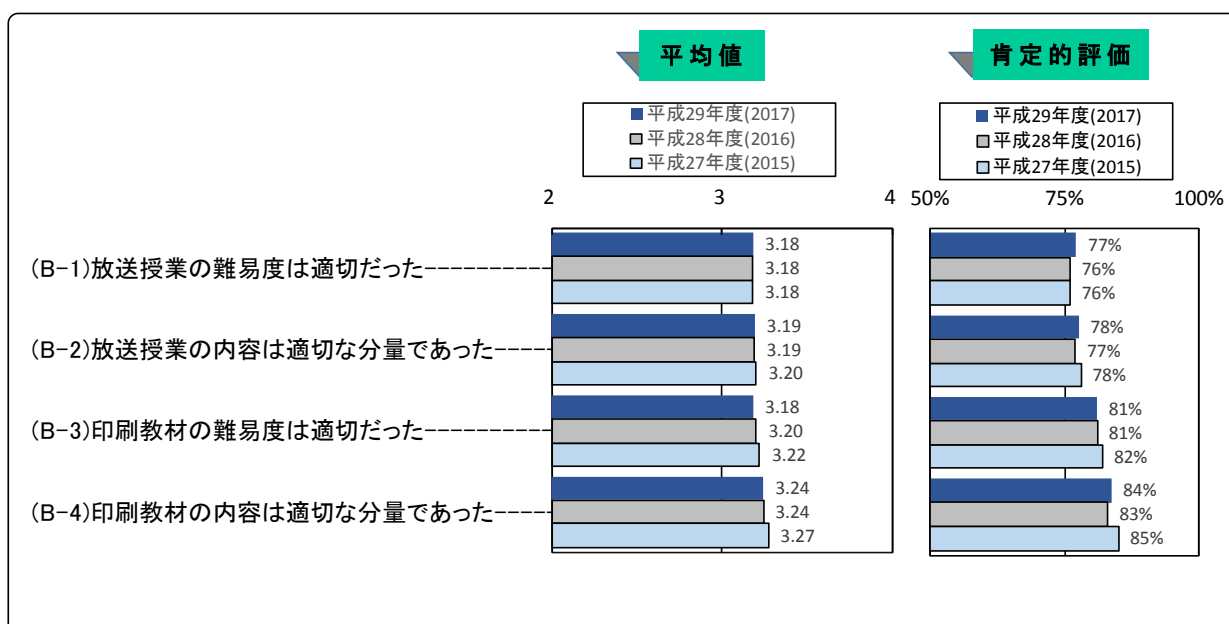
肯定的評価では放送授業よりも印刷教材についての評価が高く、(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」と(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」はともに80%を超えていた。

図2-23 【学部】回答者全体の授業難易度・分量の評価



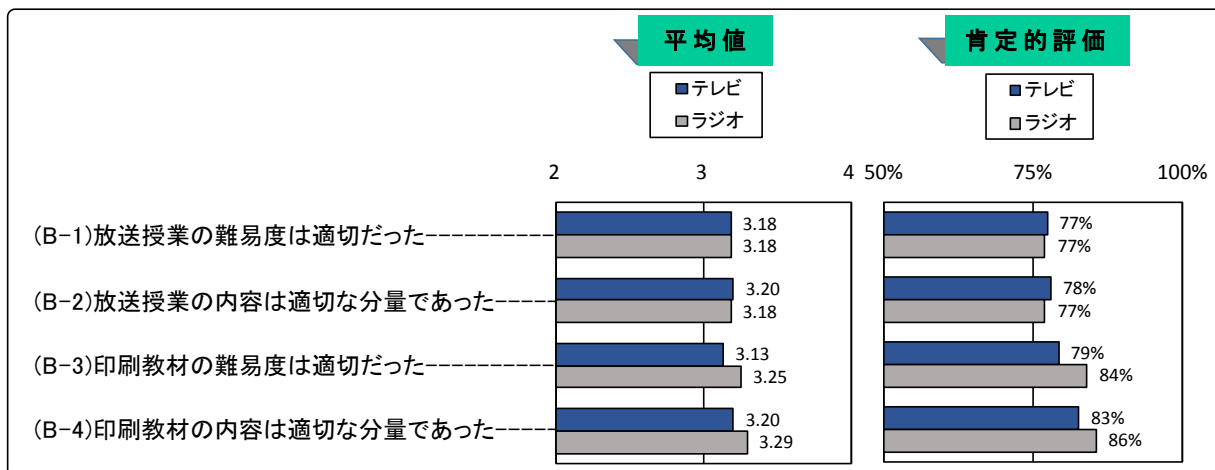
開設年度で比較すると（図2-24）、放送授業と印刷教材の難易度・分量とも同水準であった。

図2-24 【学部】回答者全体の授業難易度・分量の評価（開設年度比較）



メディア別に授業の難易度・分量をみると（図2-25）放送授業の難易度、分量についてはテレビ科目とラジオ科目の評価は同水準であったが、印刷教材の難易度、分量はラジオ科目の評価の方が高かった。

図2-25 【学部】メディア別の授業難易度・分量の評価



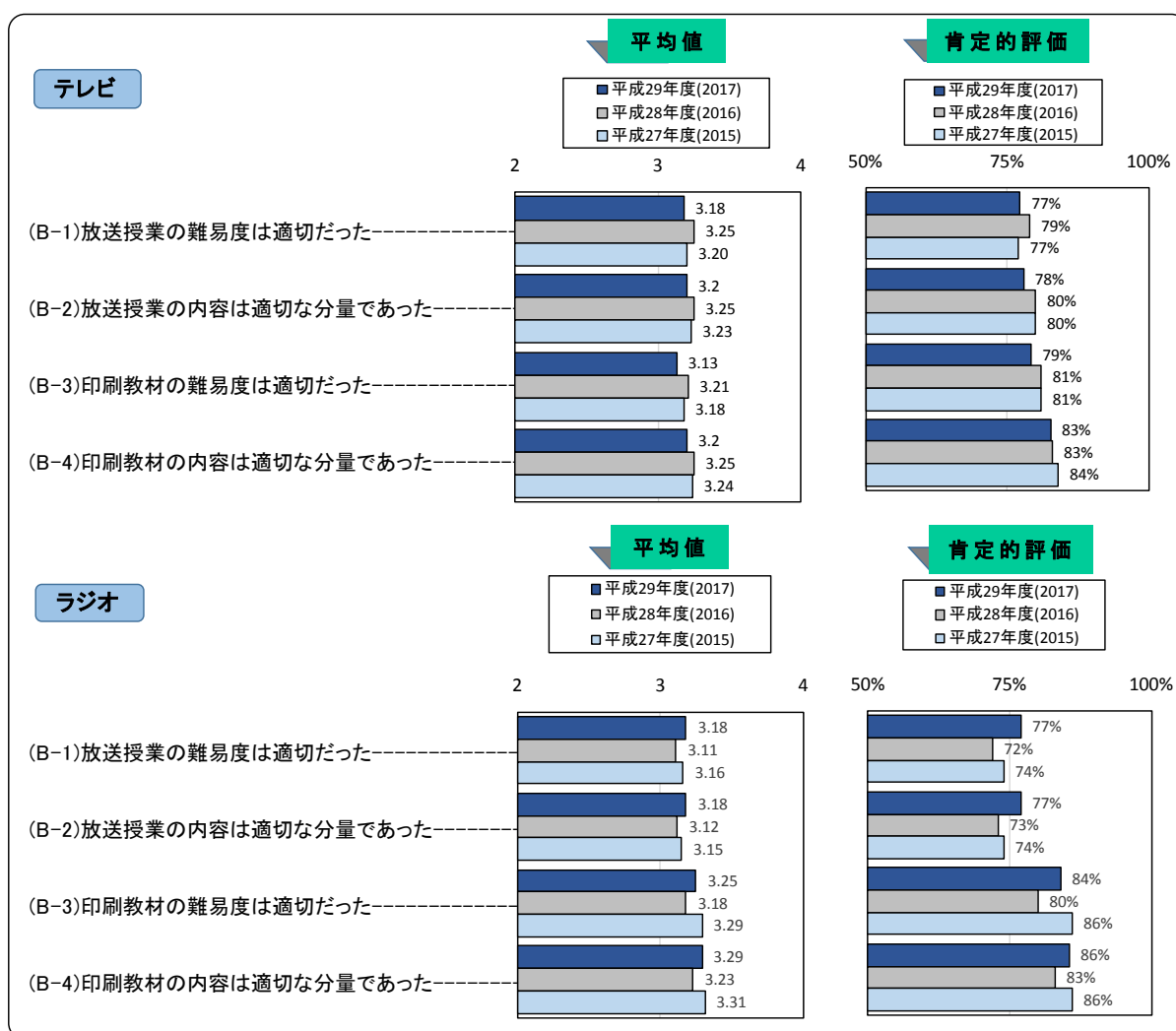
メディア別の授業の難易度・分量を開設年度で比較すると（図2-26）テレビ科目では、2017年度は(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」について、2016年度に比べ評価が下がっていた。

(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」と(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」についても2015年度及び2016年度に比べ低い。

(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」については過去2年度と同水準。

ラジオ科目では2016年度との比較では、全項目で3～5ポイントの上昇が見られた。

図2-26 【学部】メディア別の授業難易度・分量の評価（開設年度比較）

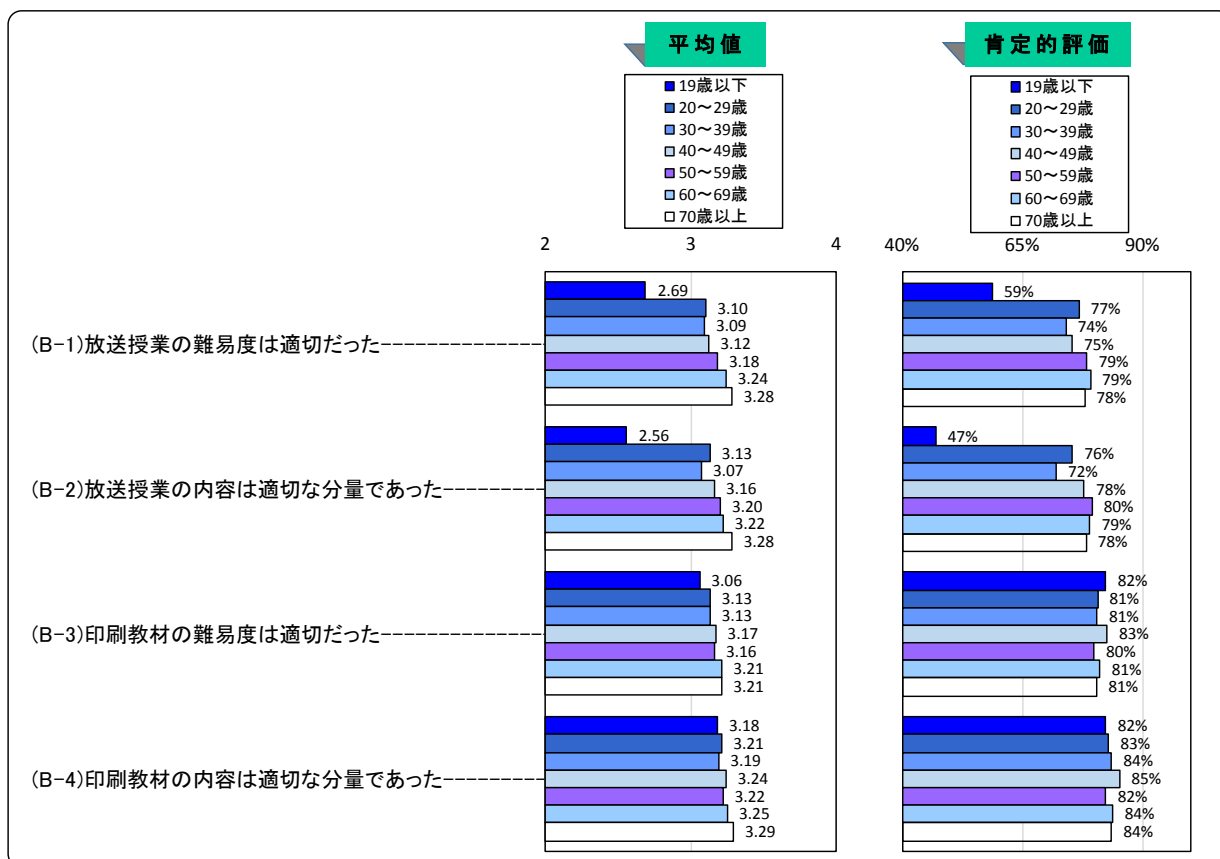


年齢階層別に授業の難易度・分量をみると（図 2 - 2 7）（B-1）「放送授業の難易度は適切だった」は 50 歳代以上で評価が高かった。

（B-2）「放送授業の内容は適切な分量であった」については 30 歳代の評価が低かった。

（B-3）「印刷教材の難易度は適切だった」と（B-4）「印刷教材の内容は適切な分量であった」については年齢階層別で大きな違いはみられなかった。

図 2 - 2 7 【学部】 年齢階層別の授業難易度・分量の評価

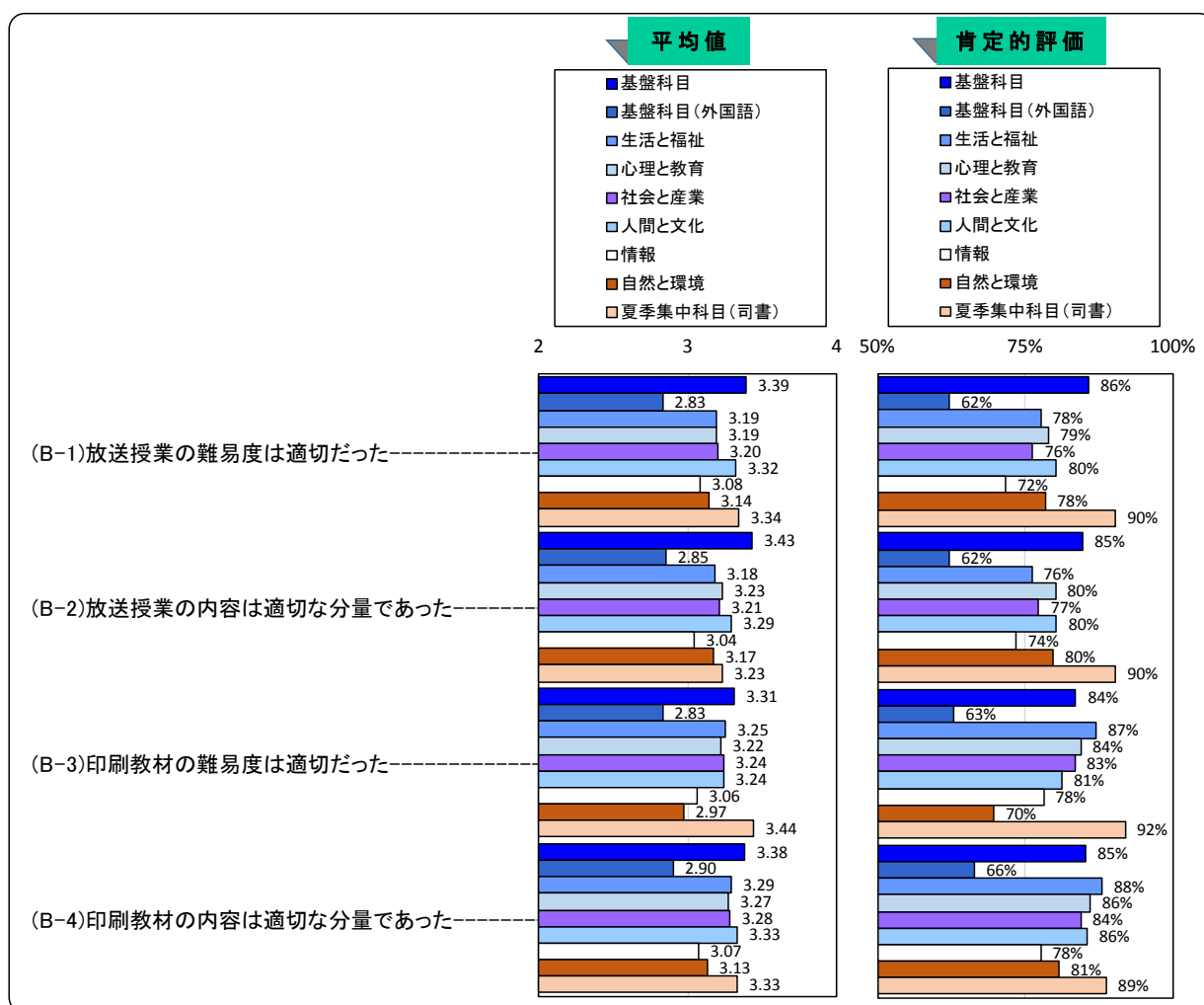


所属コース別に授業の難易度・分量をみると（図 2 - 2 8）、放送授業は両方とも「基盤科目」と「夏季集中科目（司書）」の支持率が高く目立っていた。

印刷教材については難易度、分量ともに「生活と福祉」「夏季集中科目（司書）」の支持率が上位であった。

下図の 4 項目全てで「基盤科目（外国語）」の評価が 60% 台と他の科目に比べ極端に低く特徴的な傾向がみられた。

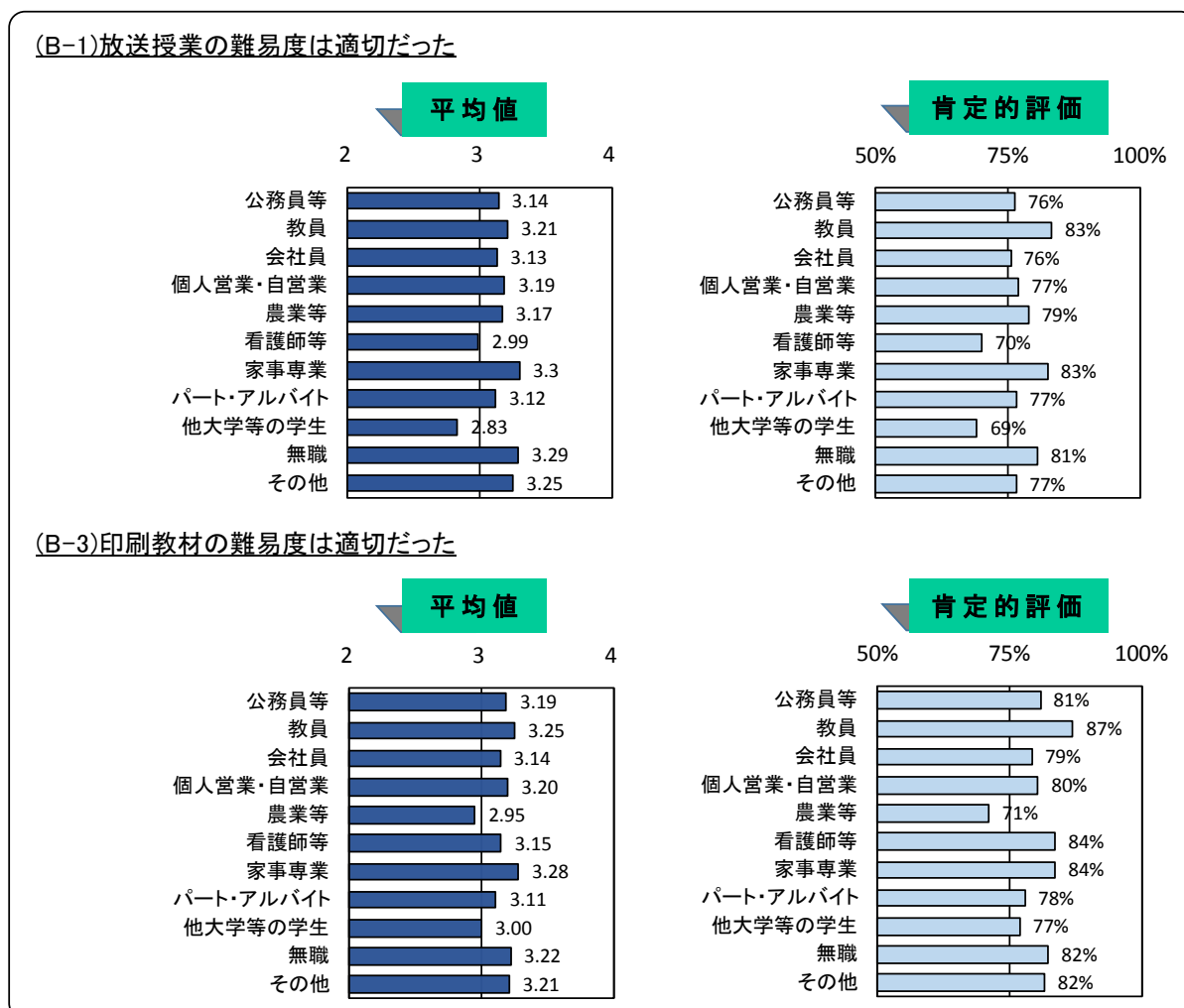
図 2 - 2 8 【学部】所属コース別の授業難易度・分量の評価



職業別に授業の難易度をみると（図2-29）、放送授業については「教員」「家事専業」「無職」で8割を超え評価が高く、反対に「看護師等」で評価が低かった。

印刷教材については「教員」「看護師等」「家事専業」で評価が高く、「農業等」で低かった。

図2-29【学部】職業別の授業難易度の評価



(3) 放送授業

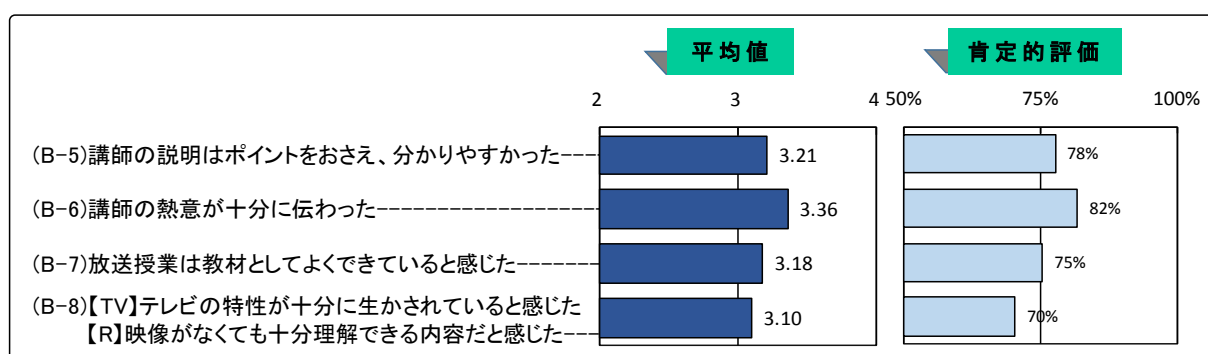
ここからは放送授業について、評価項目ごとにみていくことにする。

放送授業に関する評価項目で最も評価が高かったのは（図2-30）、(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」で、肯定的評価が82%となっている。

だが、放送授業そのものの評価である(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」は75%と8割を下回った。

(B-8)「テレビの特性が十分に生かされていると感じた／(ラジオ)映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」も70%と4項目中で最も低かった。

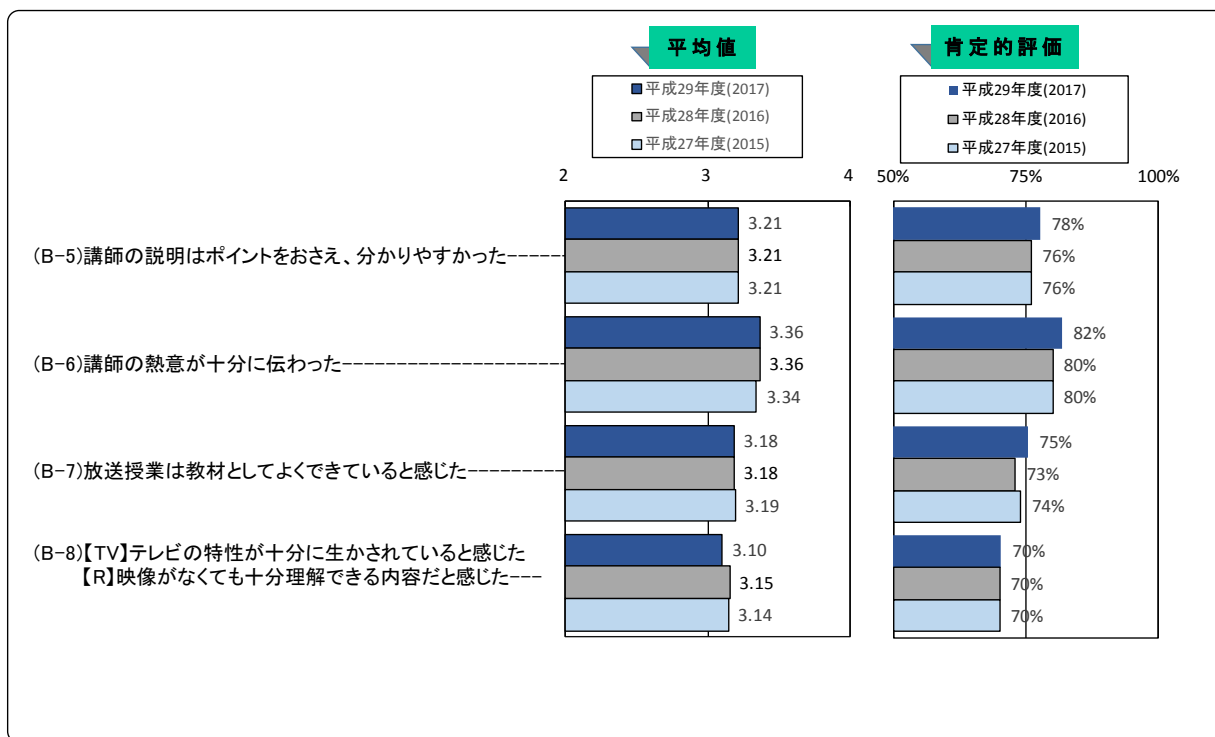
図2-30【学部】回答者全体の放送授業の評価



放送授業の評価を時系列でみると（図2-31）、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」と(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」は過去2年度から2ポイント増、(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」は2016年度から2ポイント増であった。

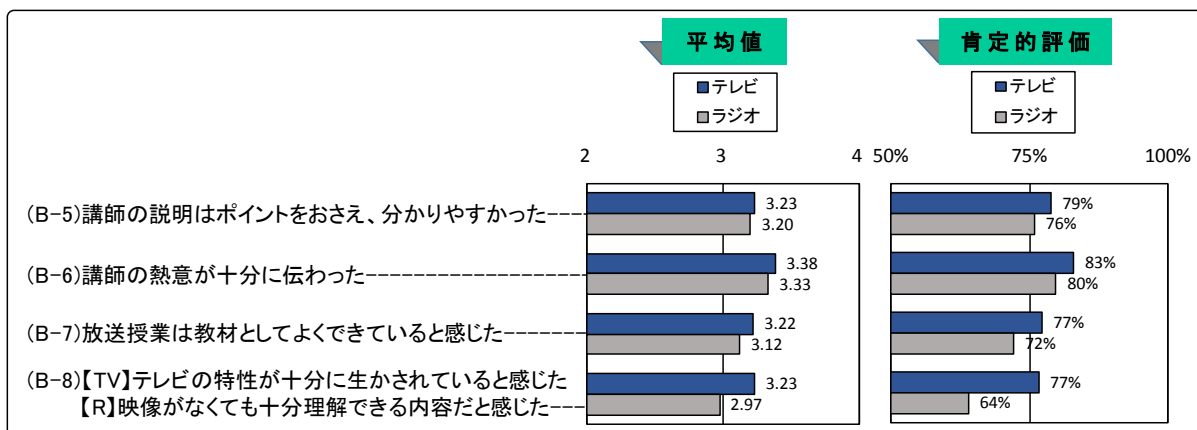
ただ、(B-8)「テレビの特性が十分に生かされていると感じた」／「(ラジオ)映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」についてはこの3年間では全く変化がなかった。

図2-31 【学部】回答者全体の放送授業の評価（時系列）



メディア別に放送授業の肯定的評価をみると（図 2 - 3 2）、いずれの項目もテレビ科目がラジオ科目を上回っており、(B-8)「テレビの特性が十分に生かされていると感じた / (ラジオ) 映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」の差が 13 ポイント特に大きい。

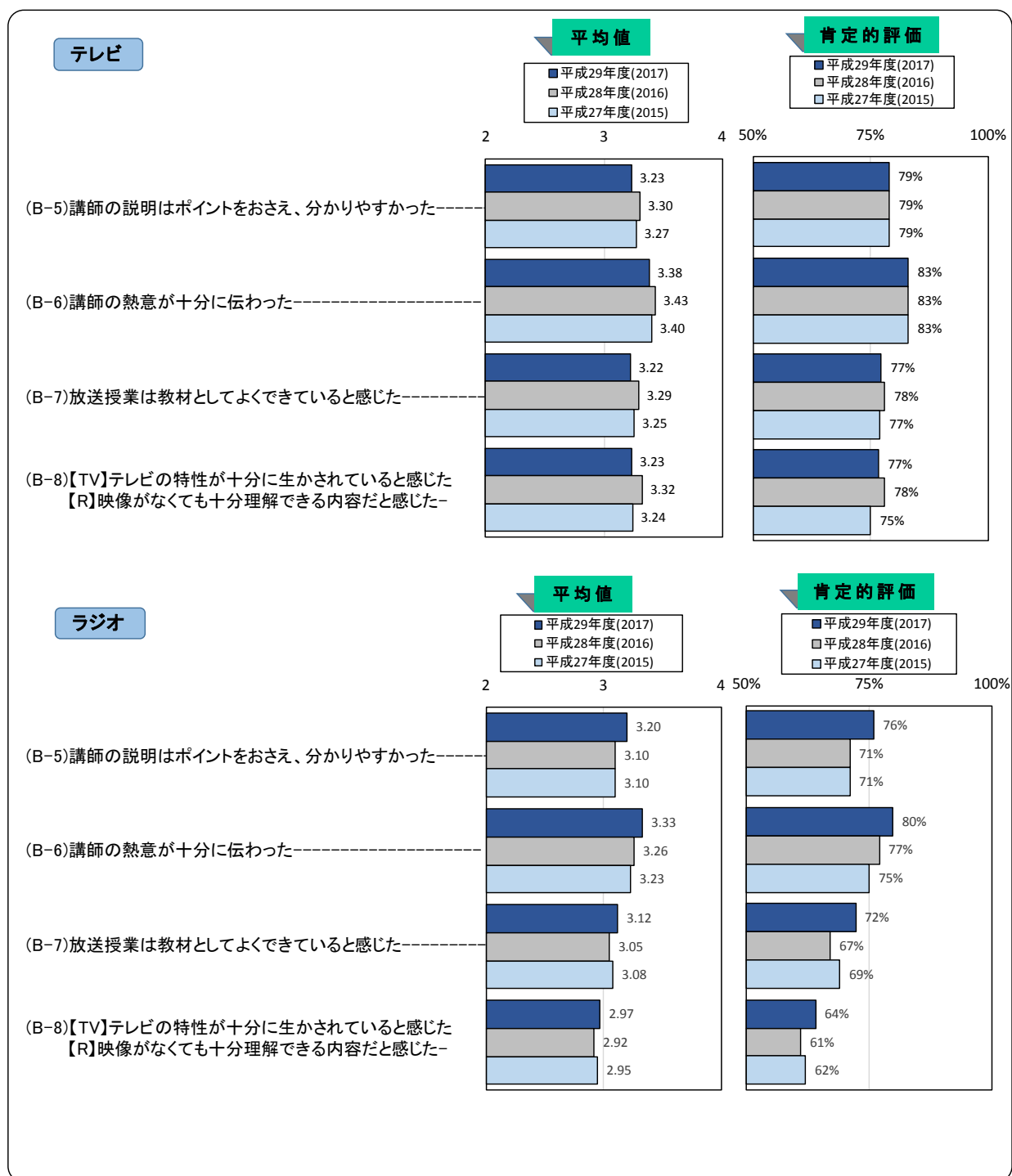
図 2 - 3 2 【学部】メディア別の放送授業の評価



また、メディア別の放送授業の評価を時系列でみると（図2-33）、過去3年間でいずれの項目もほとんど変わりはない。

ラジオ科目については、2017年度は全ての項目で過去2年度より増加傾向で、特に(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」と(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」は増加の幅が大きかった。

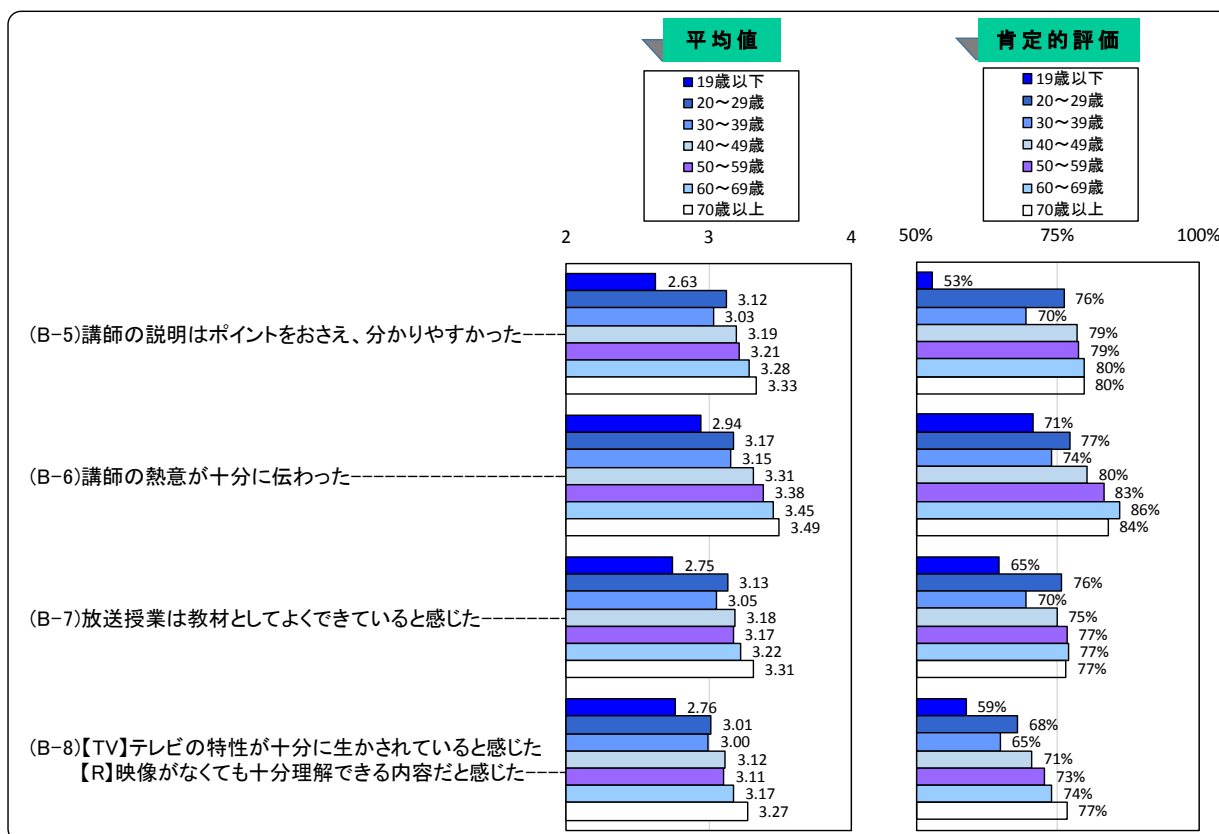
図2-33 【学部】メディア別の放送授業の評価（時系列）



年齢階層別に放送授業の評価をみると（図2-34）全項目で30歳代の評価が低かった。

また、全項目についてみられた傾向で、60歳代と70歳以上は好評価の上位2位までを占めていた。

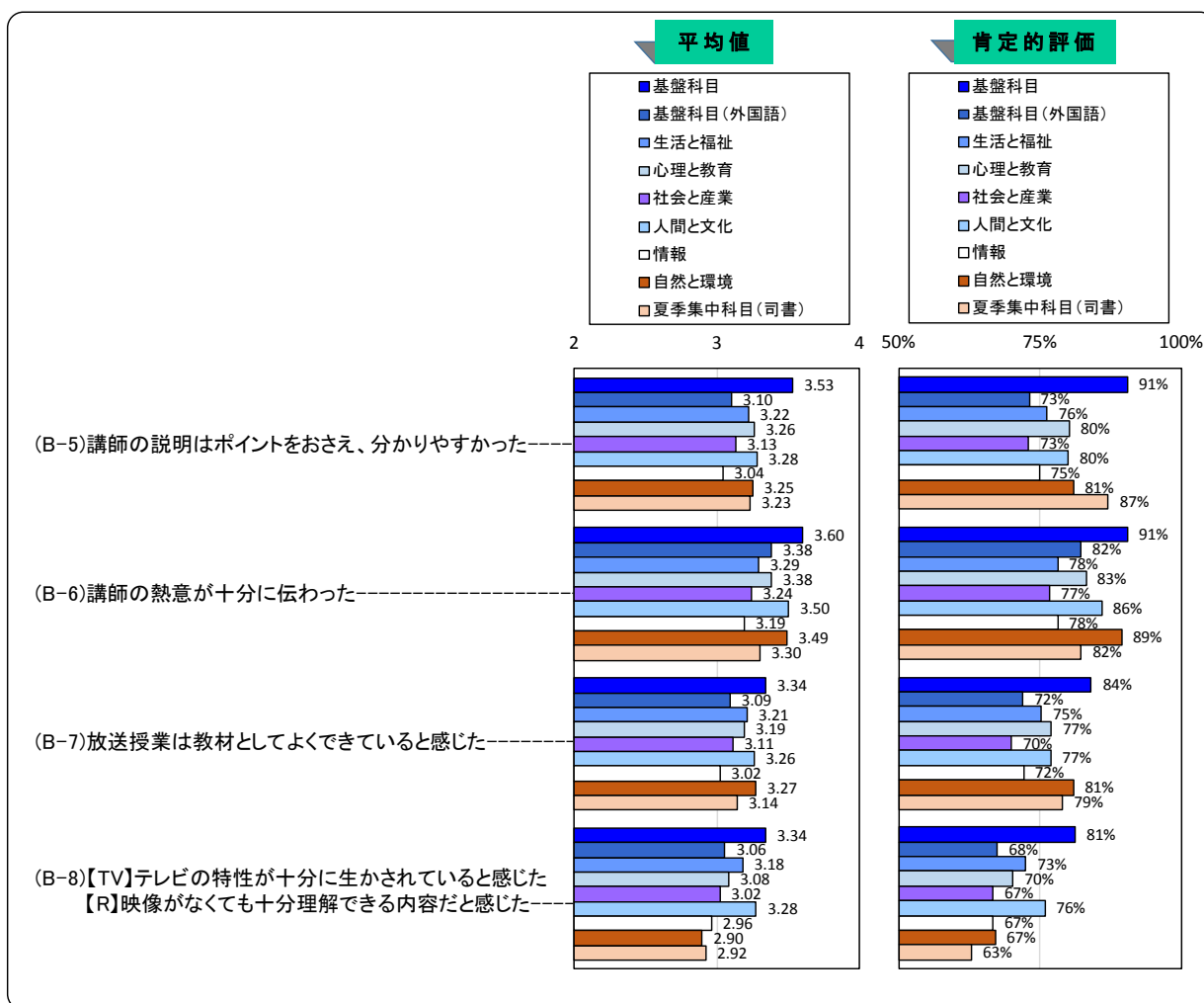
図2-34【学部】年齢階層別の放送授業の評価



所属コース別に放送授業の評価をみると(図2-35)、いずれの項目でも「基盤科目」の評価が最も高かった。

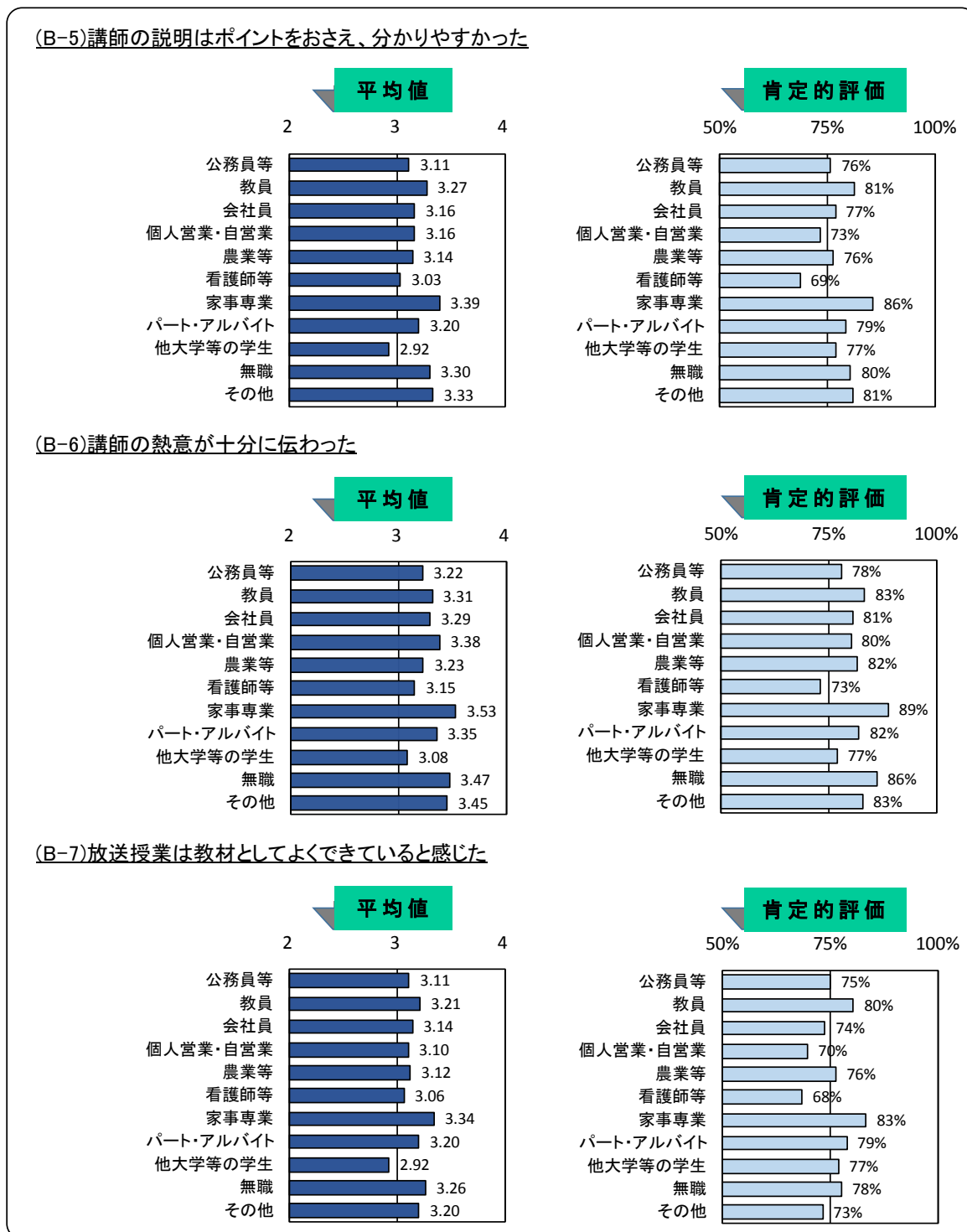
その他、上位となったのは(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」では「夏季集中科目(司書)」、「(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」は「自然と環境」、(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」では「自然と環境」と「夏季集中科目(司書)」が、(B-8)「テレビの特性が十分に活かされていると感じた」/「(ラジオ)映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」は「人間と文化」であった。

図2-35 【学部】所属コース別の放送授業の評価



職業別に放送授業の評価をみると（図2-36）いずれの項目でも「家事専業」の評価が高く、反対に「看護師等」の評価は低く、下図の3項目で両者の差は15～17ポイントと大差がみられた。

図2-36 【学部】職業別の放送授業の評価

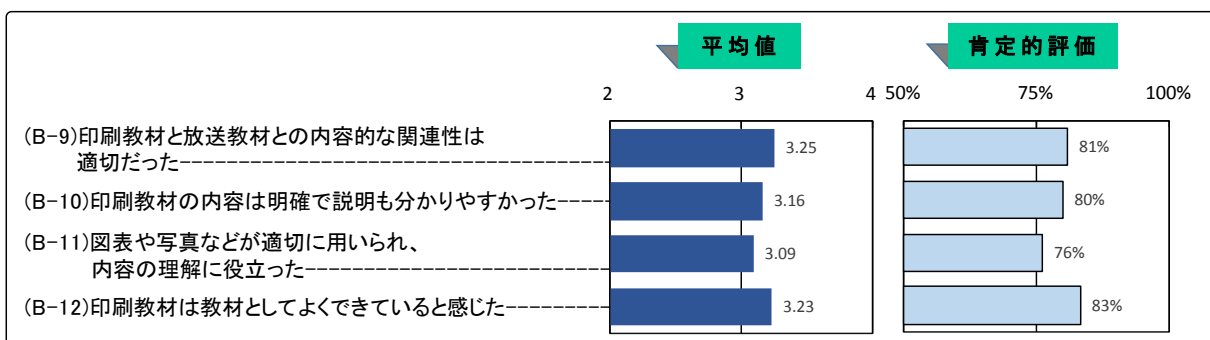


(4) 印刷教材

ここからは印刷教材について、評価項目ごとにみていくことにする。

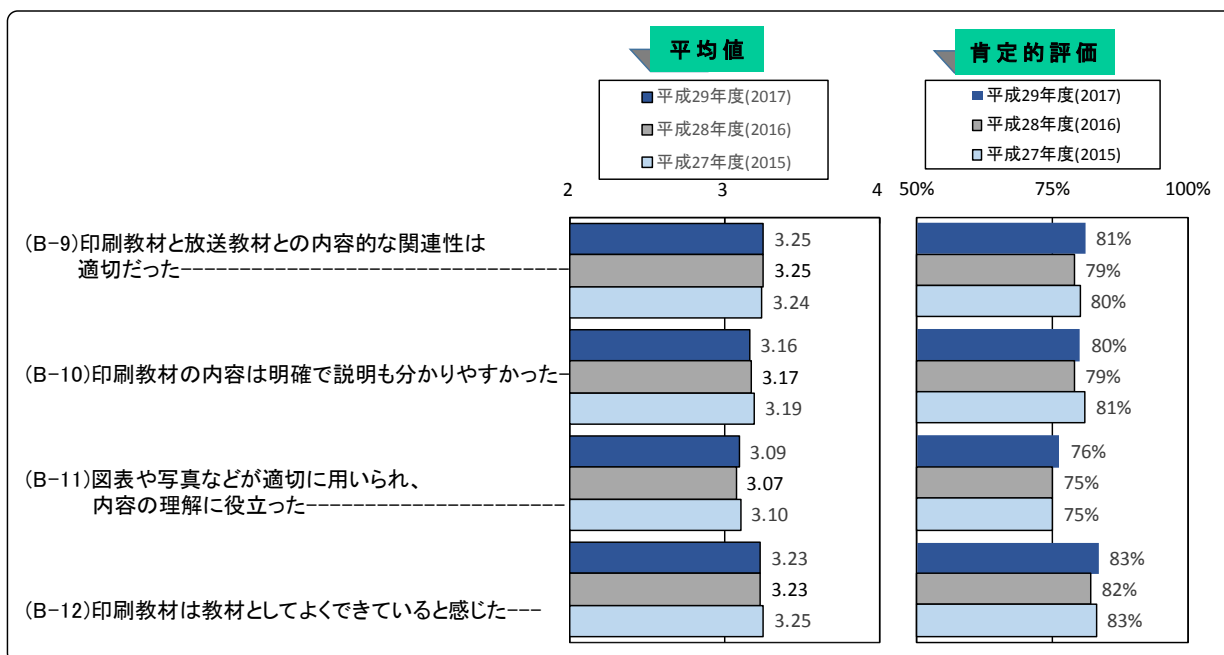
印刷教材の評価項目では(図2-37)(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」、(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」、(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」はいずれも80%以上の支持を得ていたが、それに比べ(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」は76%と他の項目に比べ低い評価であった。

図2-37【学部】回答者全体の印刷教材の評価



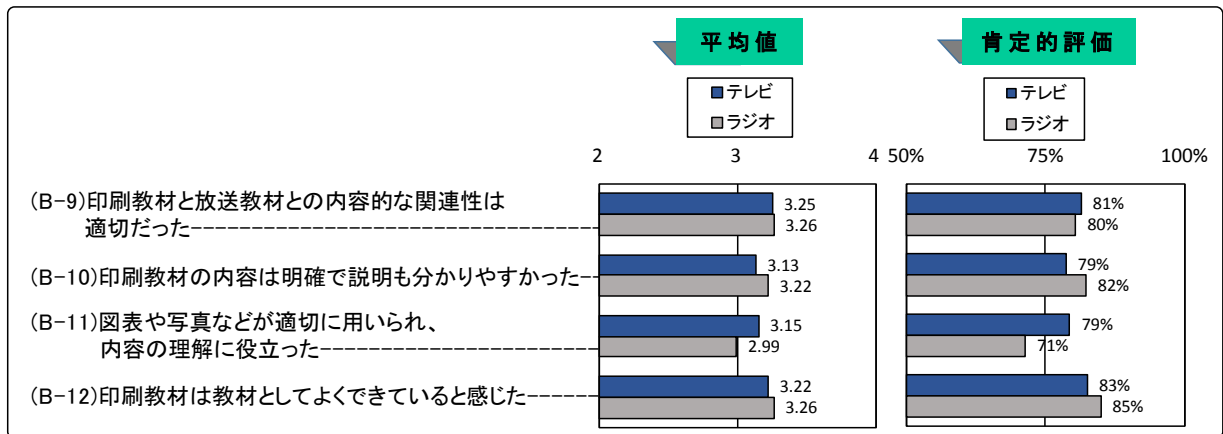
印刷教材の評価を時系列でみると(図2-38)(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」だけ2017年度は2016年度に比べ微増がみられたが、それ以外の項目では過去3年間は同水準であった。

図2-38【学部】回答者全体の印刷教材の評価(時系列)



メディア別に印刷教材の評価をみると（図2-39）、(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」はテレビ科目とラジオ科目にはほとんど差はなかったが、(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」と(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」はラジオの評価が高く、反対に(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」はテレビが大きく上回っていた。

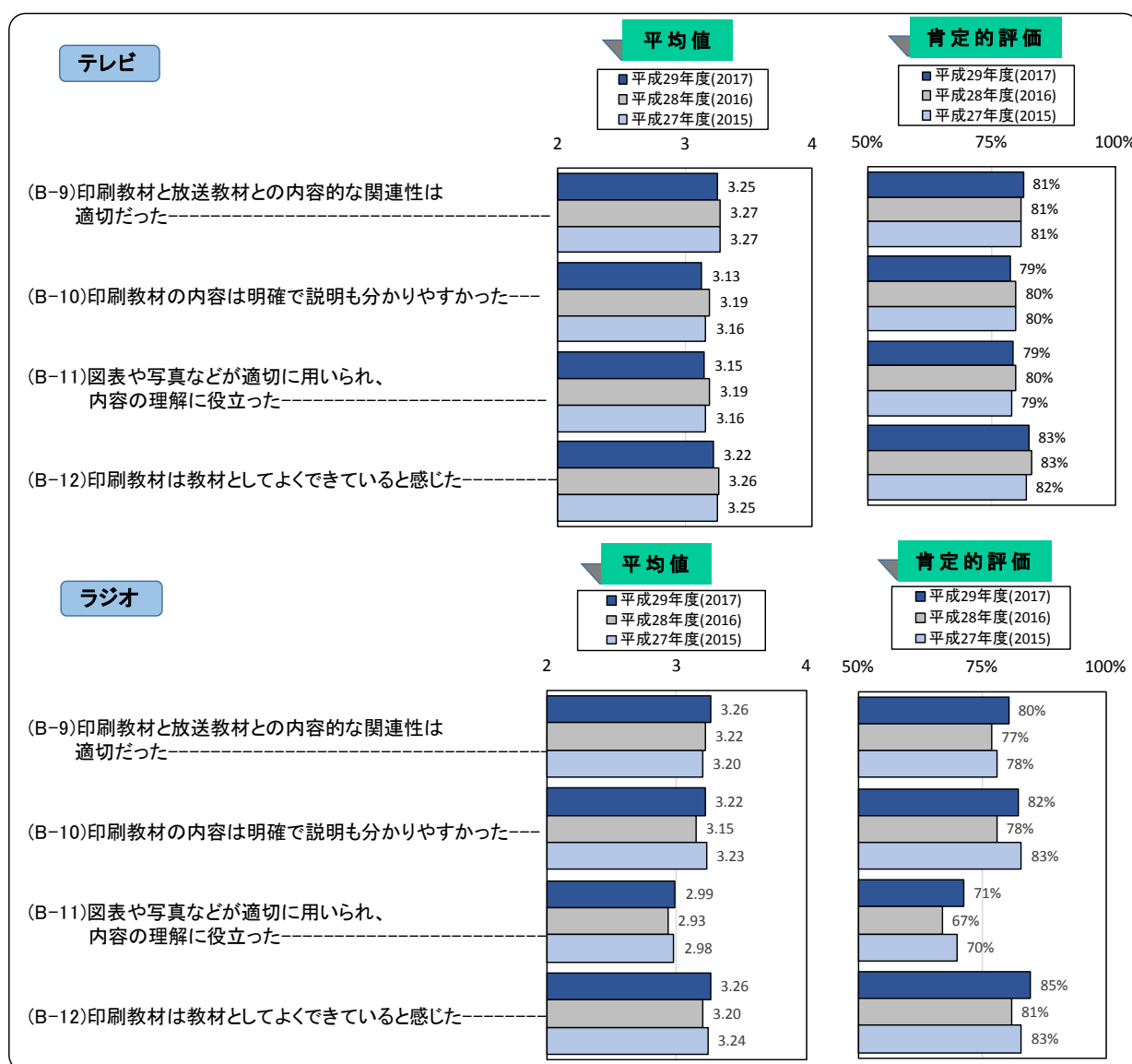
図2-39 【学部】メディア別の印刷教材の評価



メディア別の印刷教材の結果を時系列でみると（図 2 - 4 0）、テレビ科目についてはこの3年間ほとんど変化なく同水準の値であった。

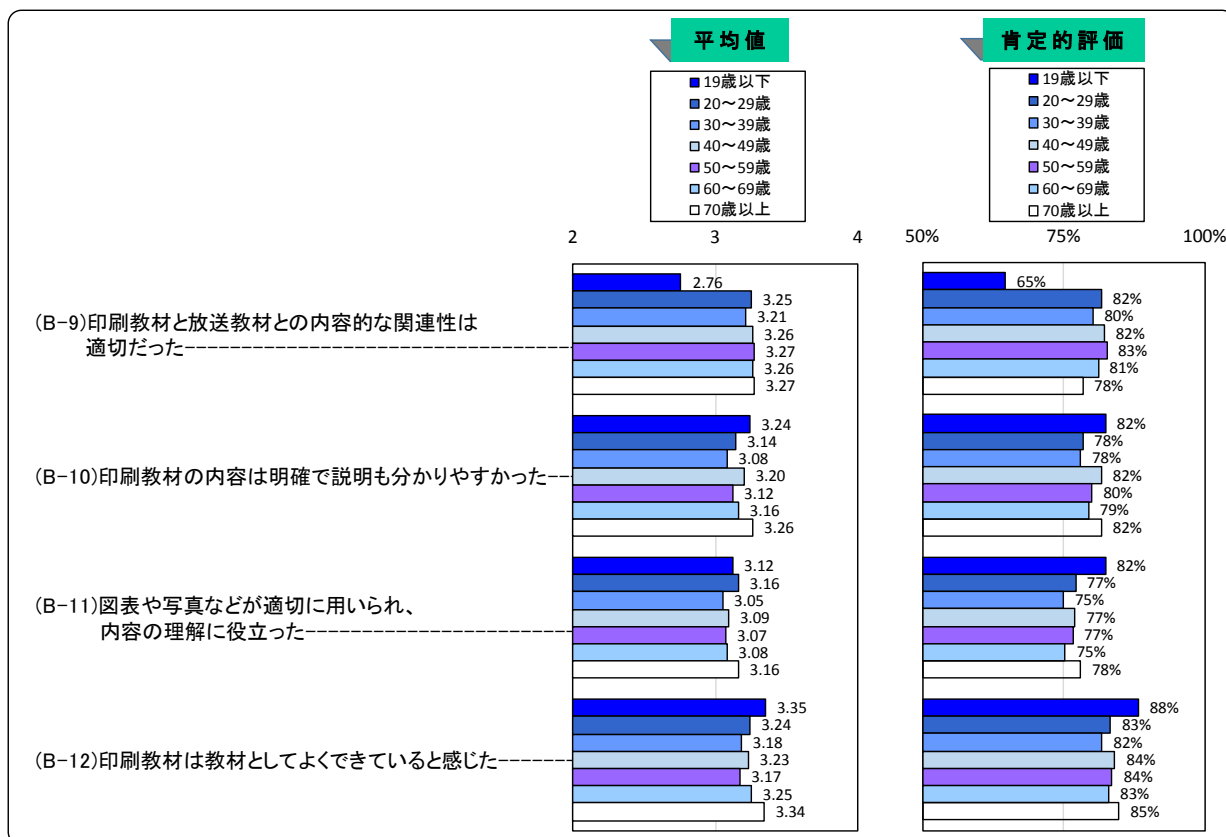
ラジオ科目については全ての項目で2016年度から3~4ポイントの上昇がみられた。

図 2 - 4 0 【学部】メディア別の印刷教材の評価（時系列）



年齢階層別に印刷教材の評価をみると（図2-41）（B-9）「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」については20歳代～60歳代の評価が8割越えと高かった。残りの3項目については70歳以上の評価が高かった。

図2-41 【学部】年齢階層別の印刷教材の評価

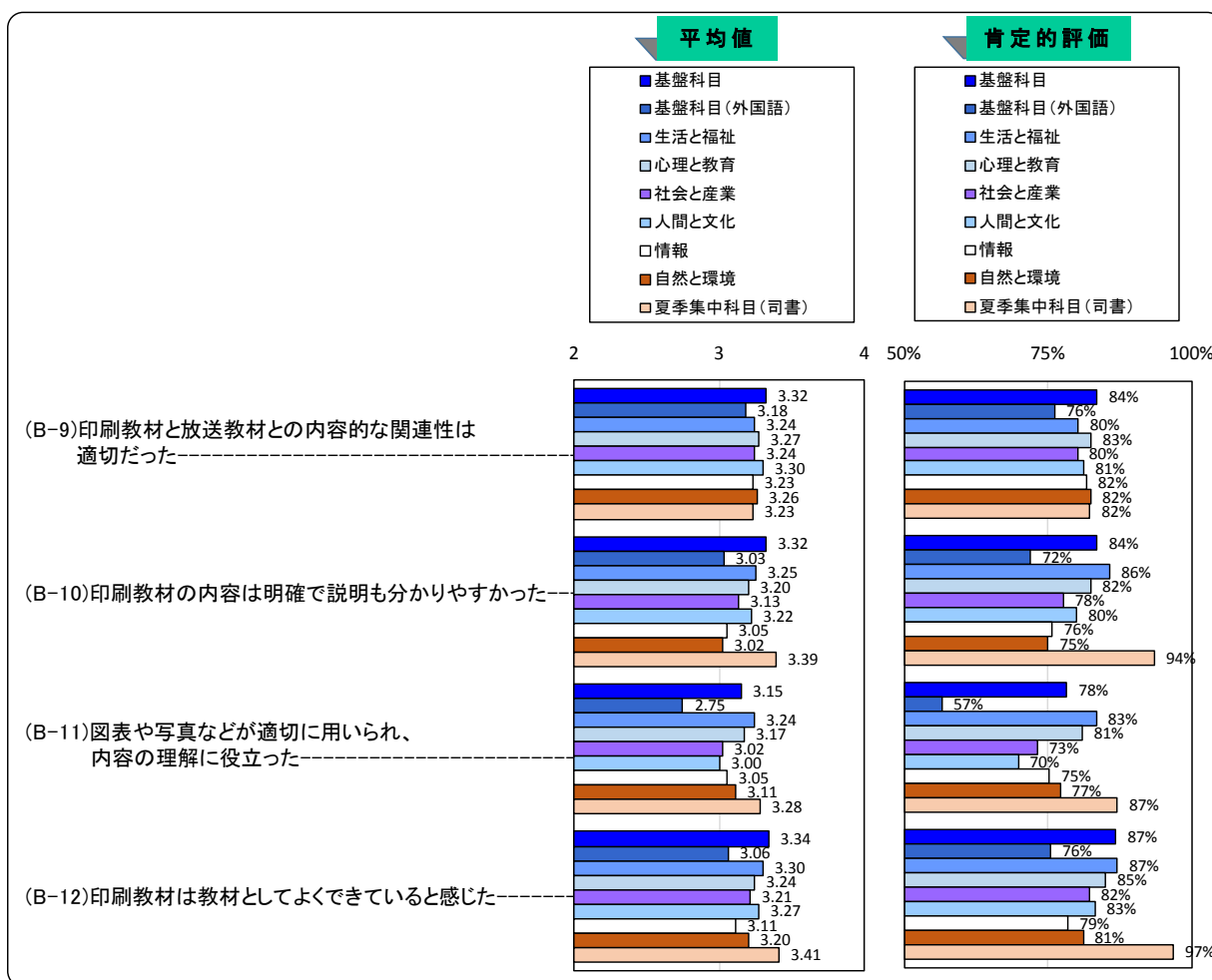


所属コース別に印刷教材の評価をみると（図 2-4 2）（B-9）「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」については「基盤科目」の評価が最も高く、反対に「基盤科目（外国語）」の評価が最も低かった。

「基盤科目（外国語）」はそれ以外の 3 項目でも評価がもっと低く、特に（B-11）「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」では 57% と他の科目と比べ大きく下回っていた。

（B-10）「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」から（B-12）「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」の 3 項目については「夏季集中科目（司書）」と「生活と福祉」が上位を占め、「基盤科目」も（B-12）「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」で同率 2 位となっている。

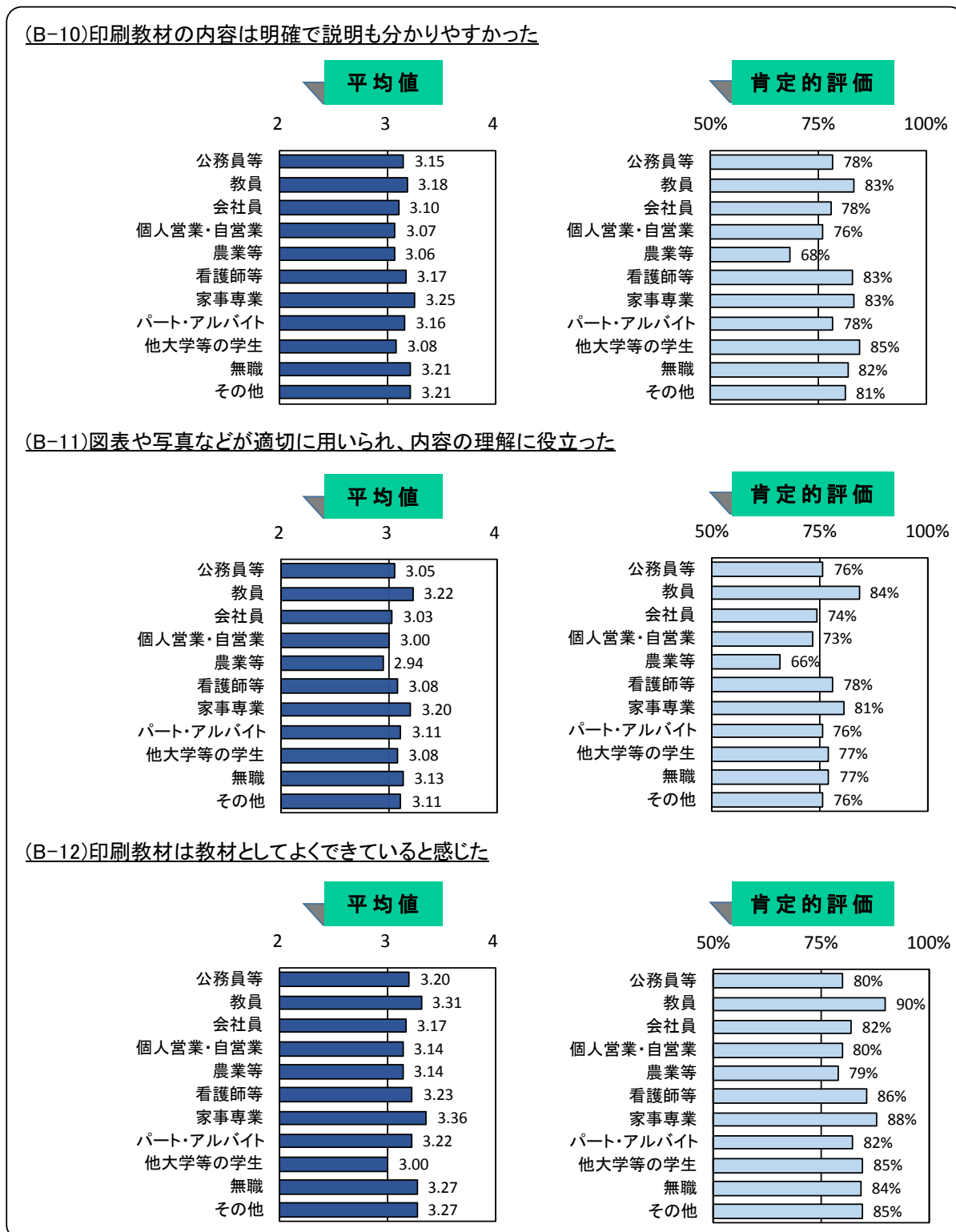
図 2-4 2 【学部】所属コース別の印刷教材の評価



職業別の印刷教材の評価では（図2-43）（B-10）「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」は「他大学等の学生」以外では「教員」「看護師等」「家事専業」の評価が高かった。

残りの2項目でも「教員」と「家事専業」が上位を占めていた。

図2-43 【学部】職業別の印刷教材の評価



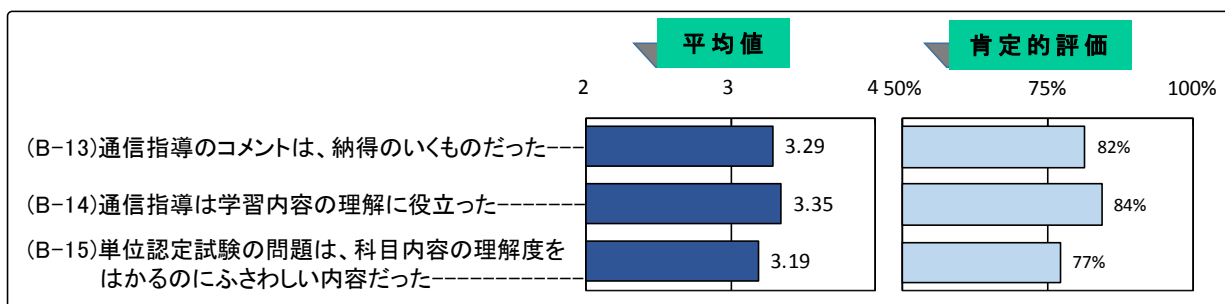
(5) 通信指導・単位認定試験

最後に通信指導・単位認定試験の評価について項目ごとにみていくことにする。

通信指導については（図2-44）（B-13）「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」と（B-14）「通信指導は学習内容の理解に役立った」がそれぞれ82%と84%と8割を超えていた。

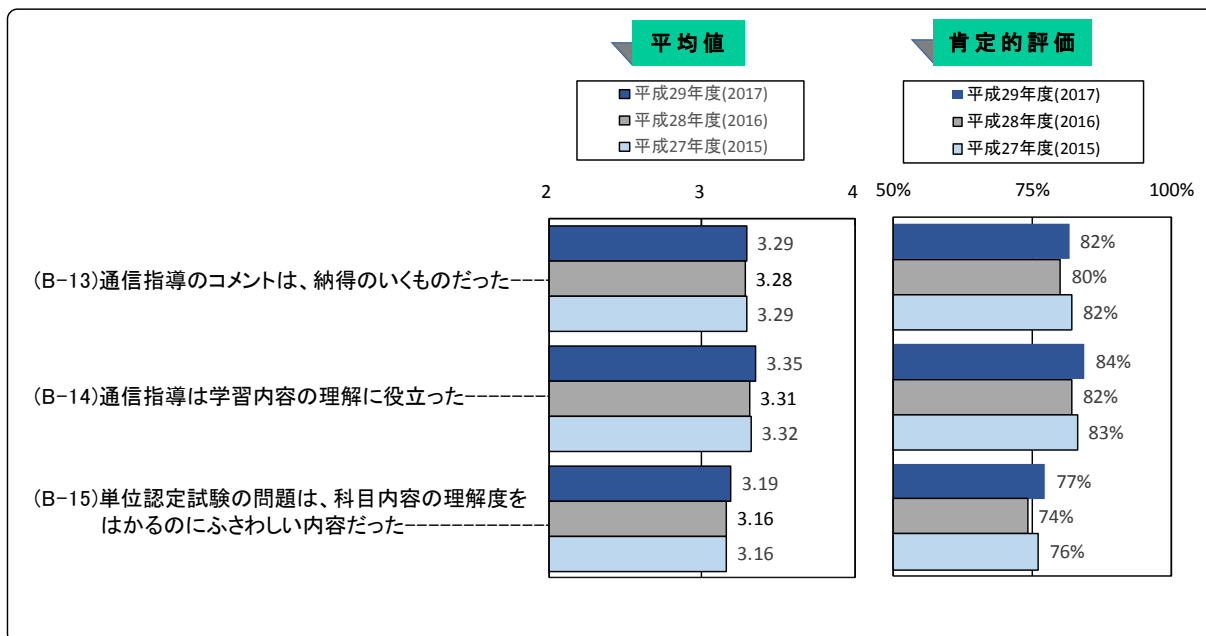
ただ、単位認定試験については、（B-15）「単位認定試験の問題は科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」は77%と先の2項目を大きく下回っていた。

図2-44 【学部】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価



通信指導・単位認定試験の評価を時系列でみると（図2-45）2017年度は全ての項目で2016年度から上昇がみられた。

図2-45 【学部】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価（時系列）

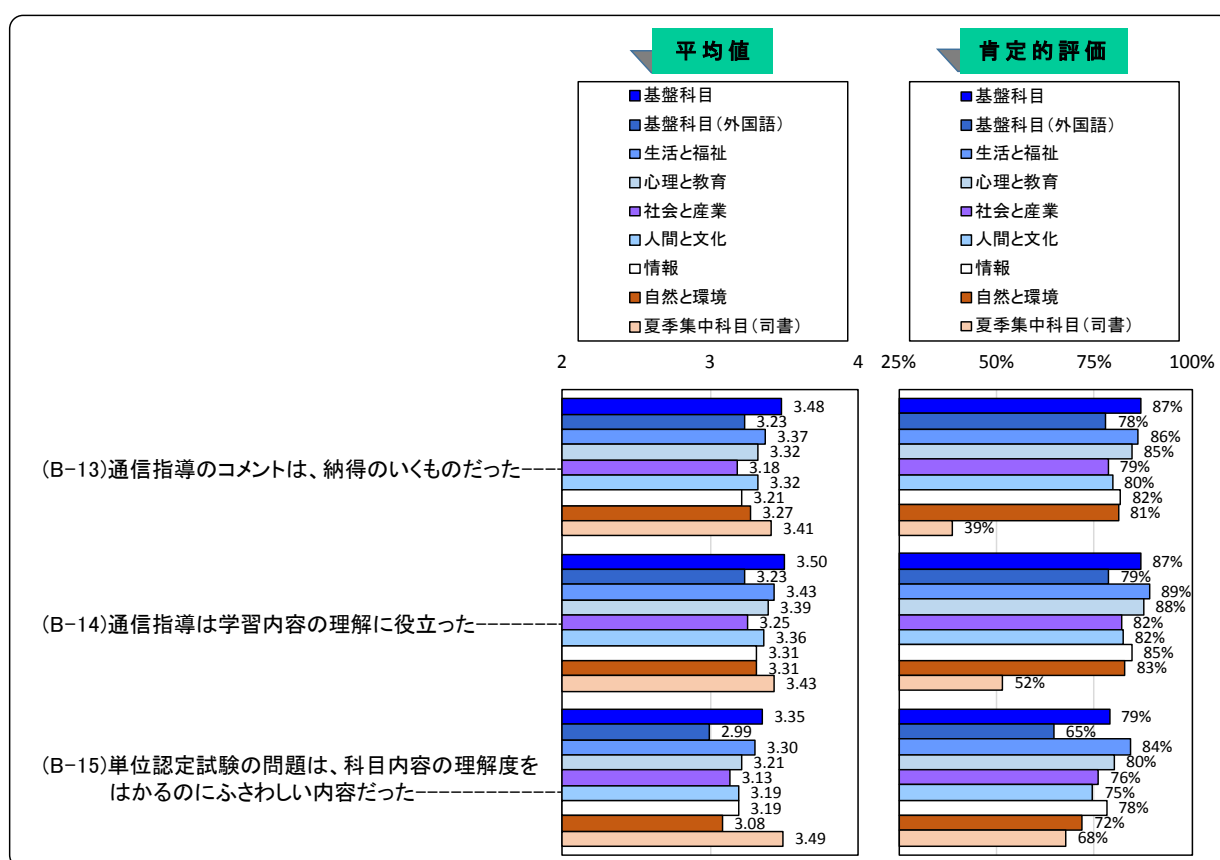


所属コース別に通信指導・単位認定試験の評価をみると（図2-46）評価が高かったのは全ての項目で「生活と福祉」と「心理と教育」で、「基盤科目」も(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」と(B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」で上位を占めていた。

反対に全ての項目で「夏季集中科目（司書）」の評価が低く、特に(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」と(B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」で他の科目と比べ極端に低かった。

他に「基盤科目（外国語）」も全項目で80%を下回り評価が低かった。

図2-46 【学部】所属コース別の通信指導・単位認定試験の評価



Ⅱ－１－４．学部の重回帰分析

重回帰分析とは、数量データである目的変数と説明変数の関係を調べ、重回帰式（モデル式）を導き出す解析手法である。

今回の調査では＜全体評価＞の満足度 B-(20)「この科目の内容には全体として満足している」を目的変数とし、それ以外の各項目を説明変数として分析を試みる。

当調査の回答肢は数量データではなくカテゴリーデータであるが、平均値の算出と同様『あてはまる→4』のように数値ポイント化することで数量データに変換し、重回帰分析を適用する。

最終的には「全体の満足度」に寄与する項目を明らかにすると共に、その影響力の強さを知ることを目的としている。

項目名	変数	対象
目的変数	y	全体の満足度 B-(20)
説明変数	x_1, x_2, \dots	各項目A①～③、B(1)～(19)：全 22 問
係数	a_1, a_2, \dots	重回帰分析によって得られる偏回帰係数

重回帰式 $y = a_0 + a_1x_1 + a_2x_2 + \dots + a_{22}x_{22}$ (説明変数が全 22 問の場合)

説明変数が多すぎると全体の満足度を表すために適した重回帰式を得られないことが経験的に分かっているため、今回は重回帰分析の中で、目的変数との相関関係が強い説明変数を自動的に選択することができる「変数減少法」を用いて解析を行うことにする。

使用するデータは調査票の表面の I. の A と B、全設問を全て回答した 3,521 人のローデータを使用する。

■学部の重回帰分析

決定係数は目的変数のばらつきのうち、これらの説明変数で説明できる割合を表し、1 に近いほど当てはまりがよいとされ、当該重回帰式の決定係数は 0.748 であった。

前述したように変数減少法で分析を試みたが、全体評価と A-②「放送授業を十分に視聴した」、A-③「印刷教材を熱心に学習した」の単相関係数の符号は+であったが、得られた A-②と A-③の標準偏回帰係数は-となったため、またそれぞれの単相関係数が 0.282 と 0.327 で他の項目の中で最下位とその次だったためこの 2 項目を除外して分析を行った。

◆分析精度

重相関係数 R	0.865
決定係数	0.748
自由度修正済み決定係数	0.747
説明変数の数	11
ダーヴィンワトソン比	1.999

ダーヴィンワトソン比とは、残差同士の系列相関（自己相関）を示す指標で 0～4 までの値を示し、1 以下や 3 以上だと残差（誤差）に規則性があり、解析自体あるいはデータ自体に問題があり、「2」近辺の値ならよいとされ、その値は 1.999 となった。

今回の重回帰分析では分散分析表が示すとおり、有意水準 0.01 の判定で、かなりの精度で式の当てはまりの良さが確認できた。

(有意水準とは危険率と同義で 0.01 の場合、判定を誤る確率が 1%ある事を表している。)

◆分散分析表

変動	偏差平方和	自由度	不偏分散	分散比	p 値	判定
全体変動	2192.8	3520				
回帰による変動	1639.7	44	149.1	945.8	0.000	[**]
回帰からの残差変動	553.0	3509	0.157			

凡例	有意水準
[**]	0.01
[*]	0.05

標準偏回帰係数とは偏回帰係数間の相互比較を可能にするためのものである。各説明変数の目的変数に対する影響力の度合い(寄与率)がこれで分かる。

下表は「B-20. 全体評価」の説明変数として「標準偏回帰係数」の高い順に並べたものである。

最も高かったのは B-19 の理解度で標準偏回帰係数が 0.345、次いで B-17 の 0.224、他に B-18 (0.127)、B-12 (0.078)、B-15 (0.066) と続いた。

判定結果で有意となったのは B-16「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」までの 9 項目である。

(表最下段の定数項とは説明しきれない残りの部分である。)

標準偏回帰係数の四則演算が許されるなら、B-4 までの合計が 1.073 で、上位 4 項目の B-19 から B-12 の合計が 0.773 となり、この 4 項目の全体の満足度への寄与率は 72%となる。

また、B-19 (理解度) の全体評価に対する寄与率は 0.345 で、B-18 の 2.7 倍、B-17 の 1.5 倍となっている。つまり、全体評価(肯定的評価:83%)を上げるためには B-19 の理解度(同 79%)を上げる事が最も効果的である。

同時に B-17 の学習意欲や興味・関心度(同 85%)と B-12 の印刷教材の質・評価(同 83%)の向上に努めることで全体評価が上昇するものと考えられる。

(※「B-18 新しい知識が身につく視野が広がった」については個人的な評価に依るところが大きく、施策として具体的な方法を見つけにくいため、割愛した。)

表 2 - 2 【学部】重回帰分析結果

目的変数	標準偏回帰係数	説明変数	判定
B-20.全体評価	0.345	B-19 この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)	[**]
	0.224	B-17 学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった	[**]
	0.127	B-18 新しい知識が身につく視野が広がった	[**]
	0.078	B-12 印刷教材は教材としてよくできていると感じた	[**]
	0.066	B-15 単位認定試験の問題は、科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった	[**]
	0.062	B-7 放送授業は教材としてよくできていると感じた	[**]
	0.057	B-5 講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった	[**]
	0.042	B-3 印刷教材の難易度は適切だった	[**]
	0.031	B-16 授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った	[**]
	0.021	B-14 通信指導は学習内容の理解に役立った	[]
	0.022	B-4 印刷教材の内容は適切な分量であった	[]
定数項			[**]

学部の重回帰分析の最後に施策を進めていく上で、役に立つと思われる、B-19 の理解度と相関の高い項目を上位 13 位までを挙げることにする。

ただ、2017 年度は下記の理由により偏相関係数を採用する。

※ X, Y の 2 つの関係に他の変数が影響を持っているときにその効果を差し引かないと X, Y の関係の強さを正しく評価できない。この場合、単相関係数ではなく偏相関係数を使う。

表 2-3 【学部】 B-19 の理解度と相関の高い上位 13 項目

順位	項目名	B-19との 偏相関係数	判定
1	B-(10)印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった	0.101	[**]
2	B-(18) 新しい知識が身につく視野が広がった	0.096	[**]
3	A-(1)全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ	0.083	[**]
4	B-(3) 印刷教材の難易度は適切だった	0.081	[**]
5	A-(3)印刷教材を熱心に学習した	0.075	[**]
6	B-(15) 単位認定試験の問題は、科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった	0.065	[**]
6	A-(2)放送授業を十分に視聴した	0.065	[**]
8	B-(16) 授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った	0.057	[**]
9	B-(5) 講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった	0.052	[**]
10	B-(1) 放送授業の難易度は適切だった	0.052	[**]
11	B-(11)図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った	0.031	[]
12	B-(17) 学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった	0.015	[]
13	B-(8)TVの特性が十分に生かされていると感じた／ 映像がなくても十分理解できる内容だと感じた	0.011	[]
参考	B-(20) 全体評価	0.336	[**]

凡例	有意水準
[**]	0.01
[*]	0.05

Ⅱ－２．大学院の分析結果

Ⅱ－２－１．項目平均から見た全体的傾向

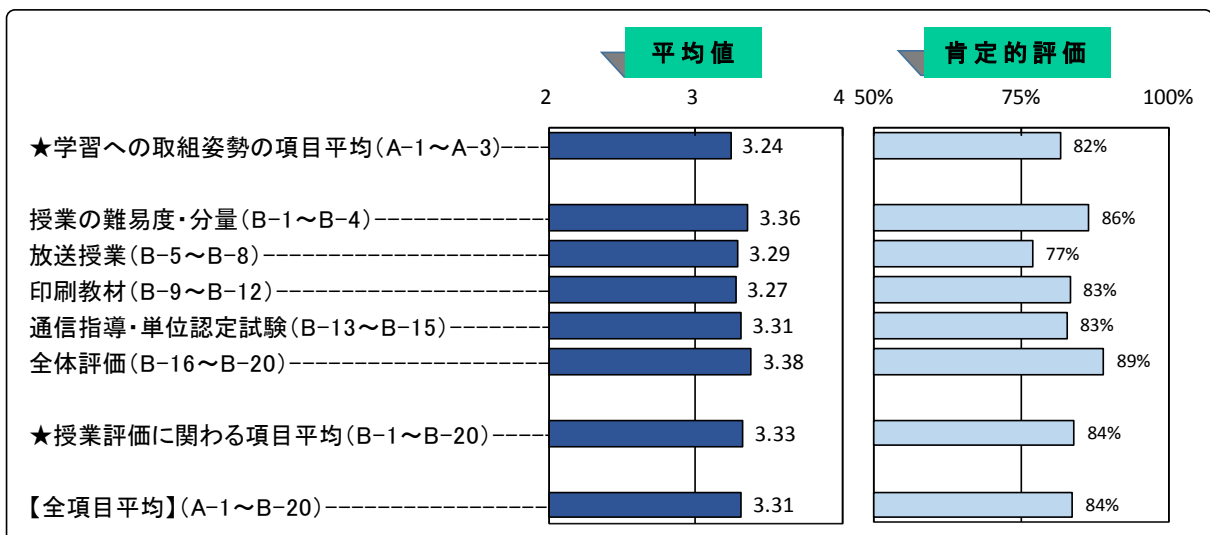
評価項目の内容ごとに回答者全体の平均値と肯定的評価を A-1～A-3 等の項目平均を算出したのが（図 2－47）である。

学部同様、肯定的な評価（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）の方が（例えば回答者の 80%と）イメージしやすく、下図左側の平均値と肯定的評価に齟齬が生じた場合、どちらを採用するか迷うことになるため、コメントについては肯定的評価を用いて、平均値は参考値として扱っていきたい。

また、新規開設科目の年度比較は比率の差の検定結果から、大学院は学部ほどサンプルサイズが大きくないため（2017 年度 705 人、2016 年度 453 人、2015 年度 1148 人）、概ね 5 ポイントの差で有意となり 4 ポイント以下では有意差はなかった。そのため比較対象の差が 5 ポイント以上で「差がある」と扱う事にする。

『学習への取組み姿勢』から『全体評価』までは、『全体評価』が 89%と最も高く、他に『授業の難易度・分量』『印刷教材』『通信指導・単位認定試験』が 80%以上の評価を得ていた。『放送授業』が 77%と唯一 8 割を下回った。

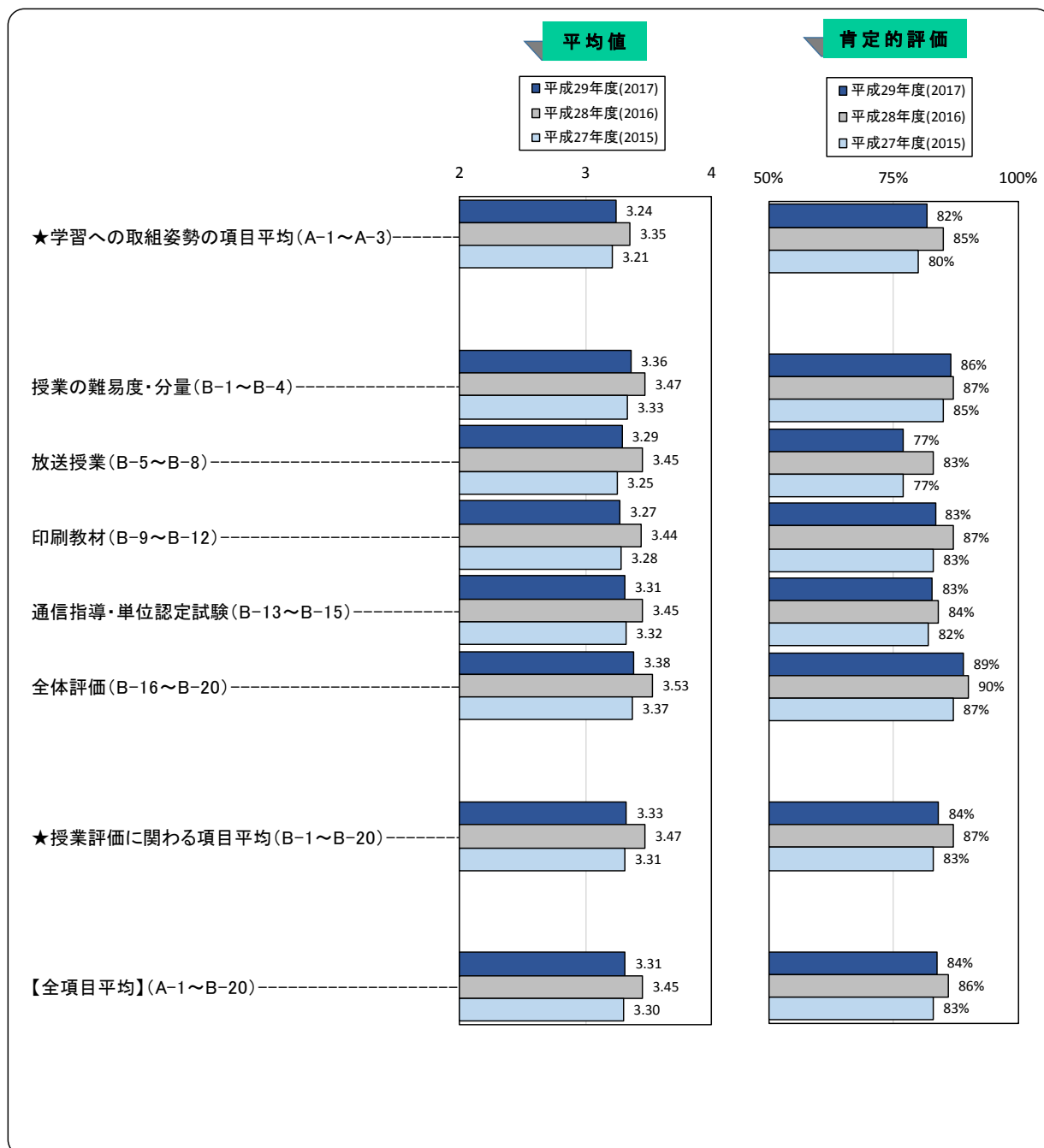
図 2－47 【大学院】項目平均による全体的傾向



項目平均を科目の開設年度で比較してみると（図2-48）、2017年度新規開設科目は、『全体評価』までは、2016年度に比べ『学習への取組み姿勢』『放送授業』『印刷教材』で3～6ポイントの減少がみられた。

その他の『授業の難易度・分量』『通信指導・単位認定試験』『全体評価』ではそれほど変化はみられなかった。

図2-48 【大学院】項目平均による全体的傾向（開設年度比較）



年齢階層別では（図2-49）全ての項目において20歳代の評価が低かったが、20歳代の回答者は11人と小サンプルだったため参考値とし、以下同様とする。

『学習への取組み姿勢の項目平均』は30歳代から年代の上昇と共に比率の増加がみられた。

『授業の難易度・分量』は全ての年代で80%を超え、特に30歳代から50歳代で高かった。

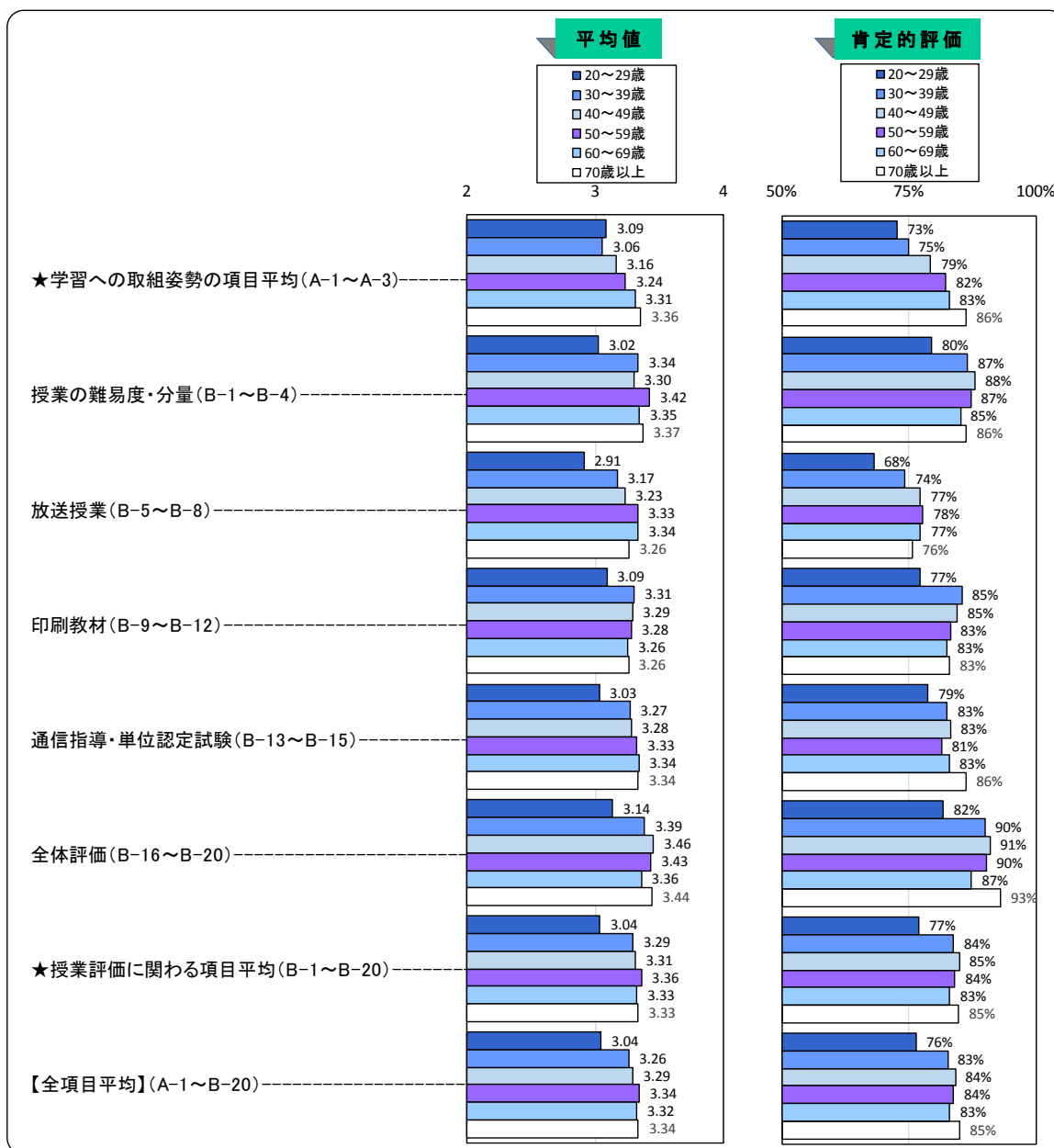
『放送授業』は全年代で80%を下回り年代間に差はみられなかった。

『印刷教材』と『通信指導・単位認定試験』は20歳代を除けば全て80%越えて評価は高かった。

『全体評価』は9割前後の評価で前述の5項目より評価が高かった。

前述の結果『授業評価に関わる項目平均（B-1～B-20）』『全項目平均（A-1～B-20）』ともに20歳代を除く各年代で83%～85%に達していた。

図2-49 【大学院】項目平均による年齢階層別全体的傾向

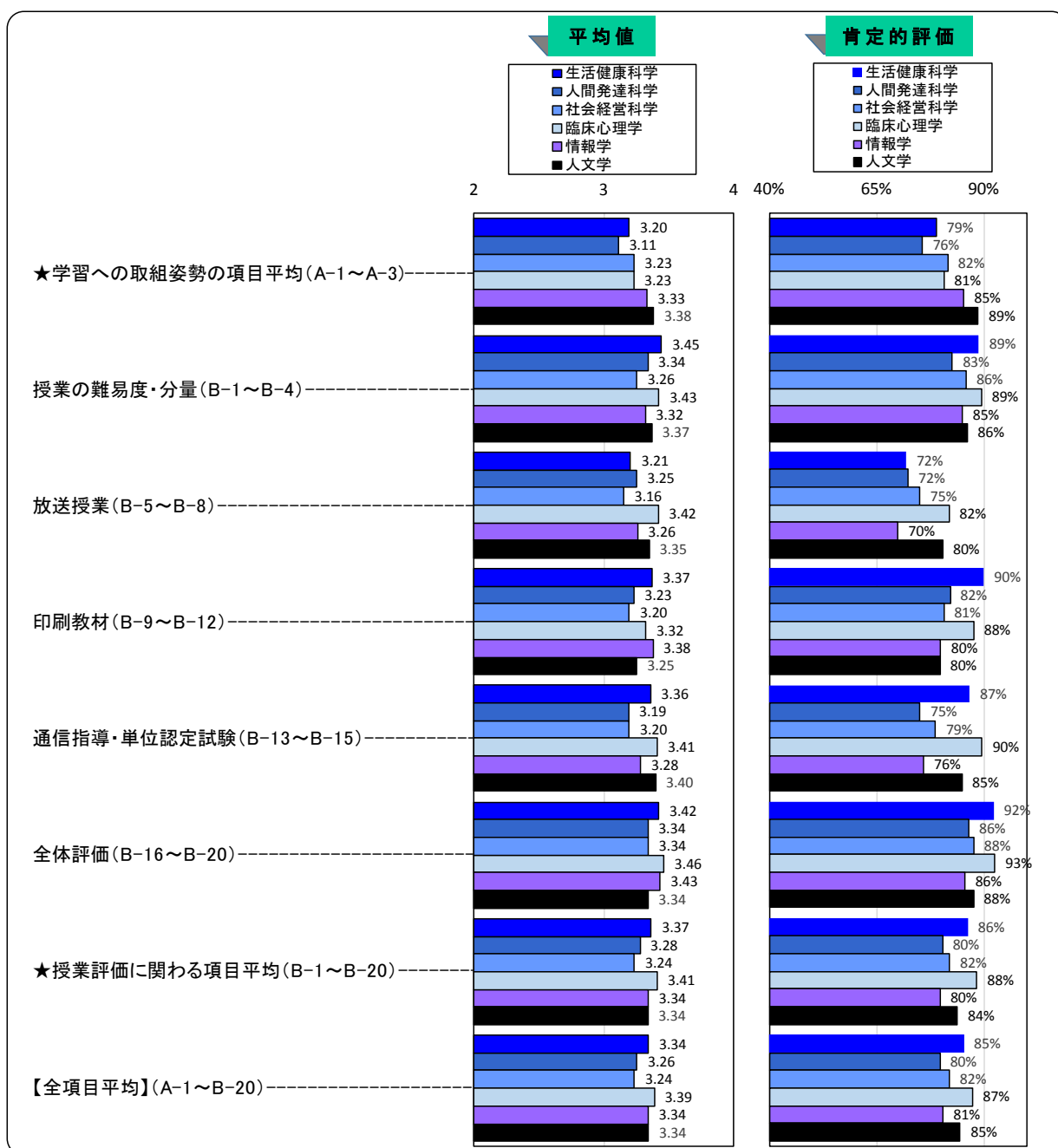


科目の所属プログラム別に項目平均をみると（図2-50）、『学習への取組み姿勢』では「人文学」が89%と他を圧倒していた。

『授業の難易度・分量』『印刷教材』『通信指導・単位認定試験』『全体評価』の4項目では「生活健康科学」と「臨床心理学」が上位2位を占め、特に『全体評価』でそれぞれ92%と93%と際立っていた。

『放送授業』は「臨床心理学」と「人文学」が上位で、それ以外のプログラムは他の項目に比べても低率であった。

図2-50 【大学院】項目平均による所属プログラム別全体的傾向



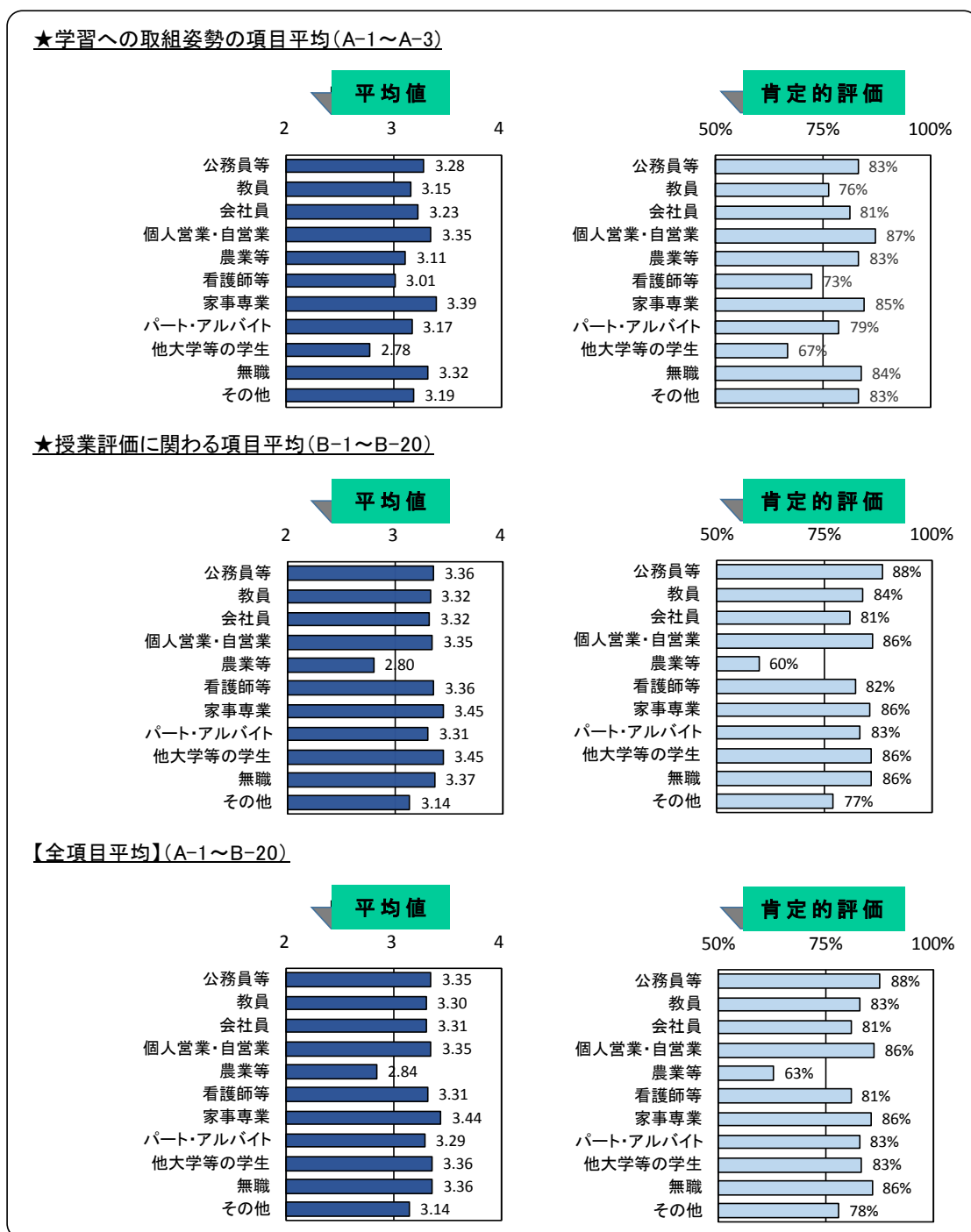
職業別では（図2-51）『学習への取組み姿勢』は「個人営業・自営業」「家事専業」「無職」で評価が高く、「看護師等」で低かった。

『授業評価に関わる項目平均』は各職業で評価が高く、中でも「公務員等」は88%に達していた。

（「農業等」（6人）と「他大学等の学生」（3人）は標本数が少ないため%表記はそぐわず、これ以降言及の対象としないこととする。）

『全項目平均』をみるといずれも「その他」以外では80%を越え、特に「公務員等」は88%と高率であった。

図2-51 【大学院】項目平均による職業別全体的傾向



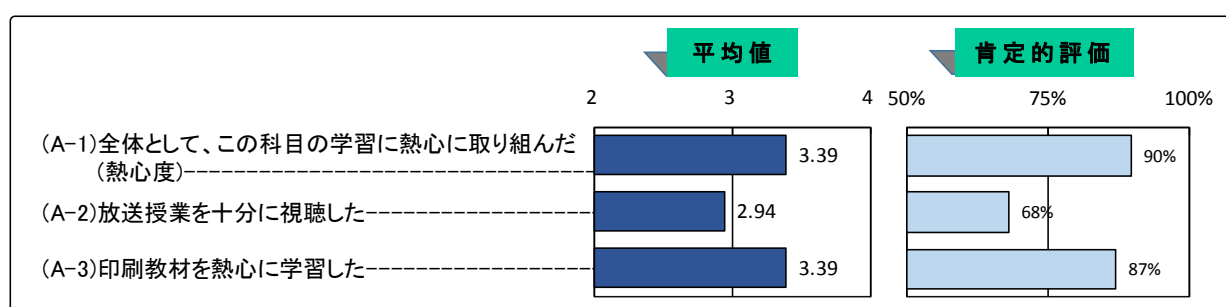
Ⅱ－2－2. 学習への取組み姿勢

ここからはそれぞれ評価項目ごとに調査結果をみていく。

学習への取組み姿勢（図2-5-2）では、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」と(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」の肯定的評価は90%前後でそれぞれの熱心度は高かった。

一方、(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は68%で前述の2項目に比べると極端に低かった。

図2-5-2 【大学院】回答者全体の取組み姿勢

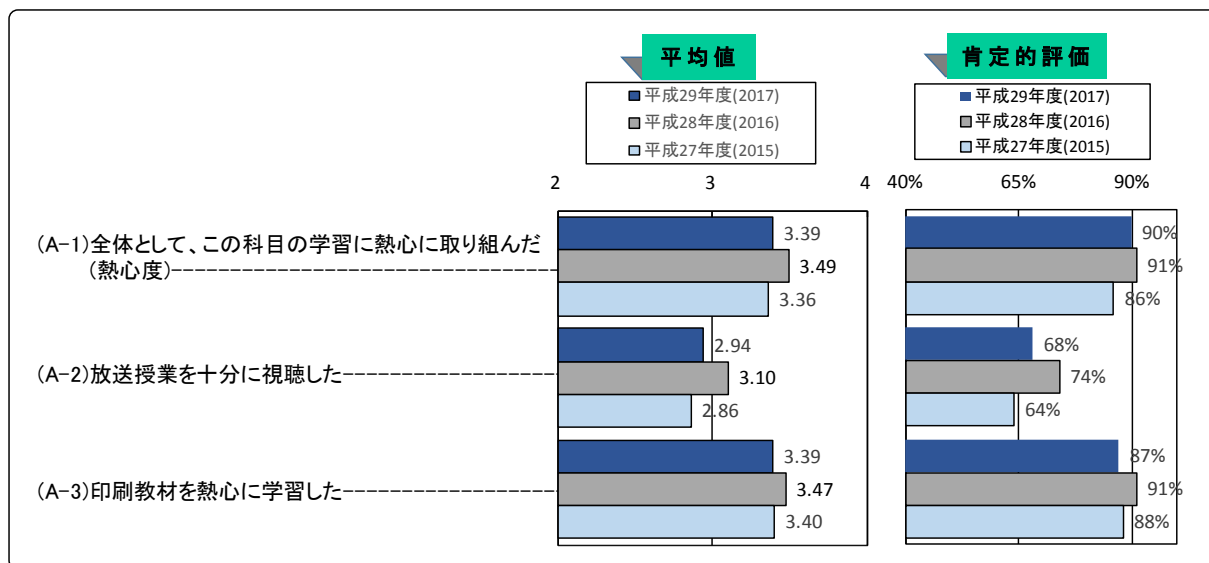


学習への取組み姿勢を時系列で見ると（図2-53）（A-1）「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」については、2016年度は2015年度から5ポイントアップで90%代に上昇し、それを2017年度も維持できていた。

ただ、（A-2）「放送授業を十分に視聴した」については、2017年度は2016年度に比べ6ポイントの減少で70%を割り込んだ。

（A-3）「印刷教材を熱心に学習した」も2016年度に比べ4ポイント減少した。

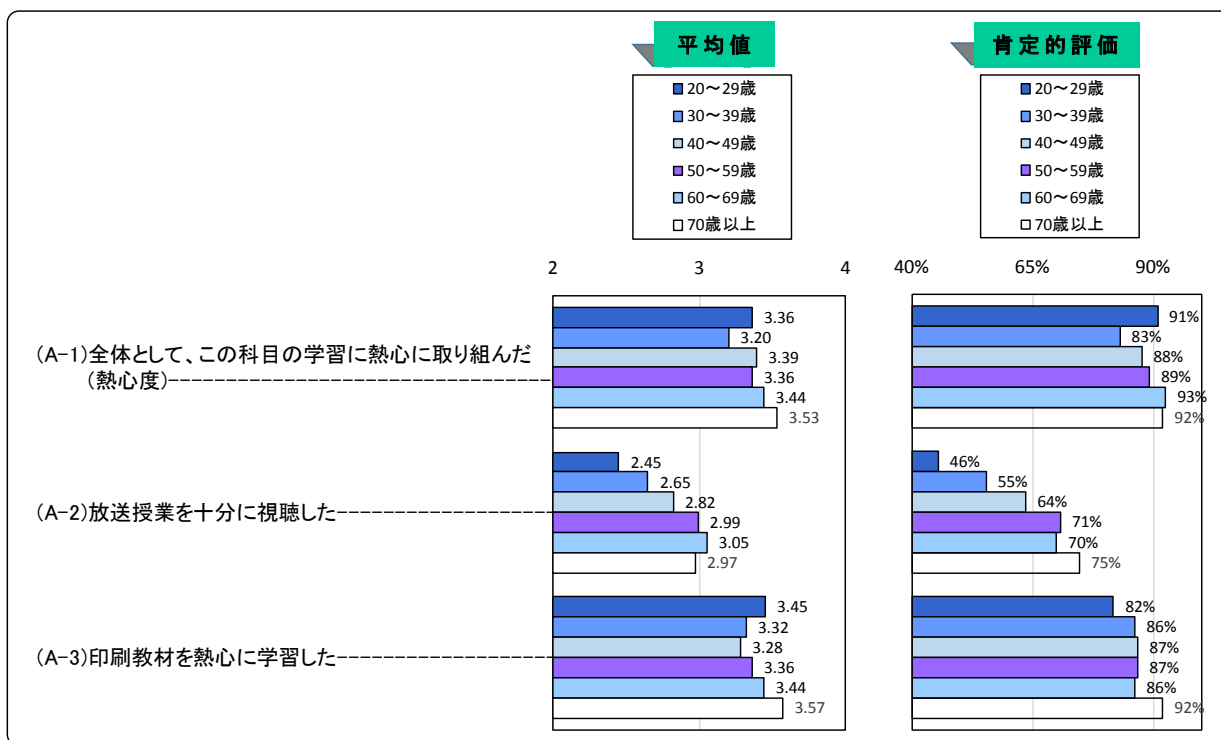
図2-53 【大学院】回答者全体の取組姿勢（時系列）



年齢階層別では（図2-54）（A-1）「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」と（A-2）「放送授業を十分に視聴した」は概ね年代が上がるほど評価も高くなる傾向がみられ「A-2」の上昇度は大きい。

（A-3）「印刷教材を熱心に学習した」は年代に関係なく評価が高く、特に70歳以上で92%に達していた。

図2-54 【大学院】年齢階層別の取組姿勢

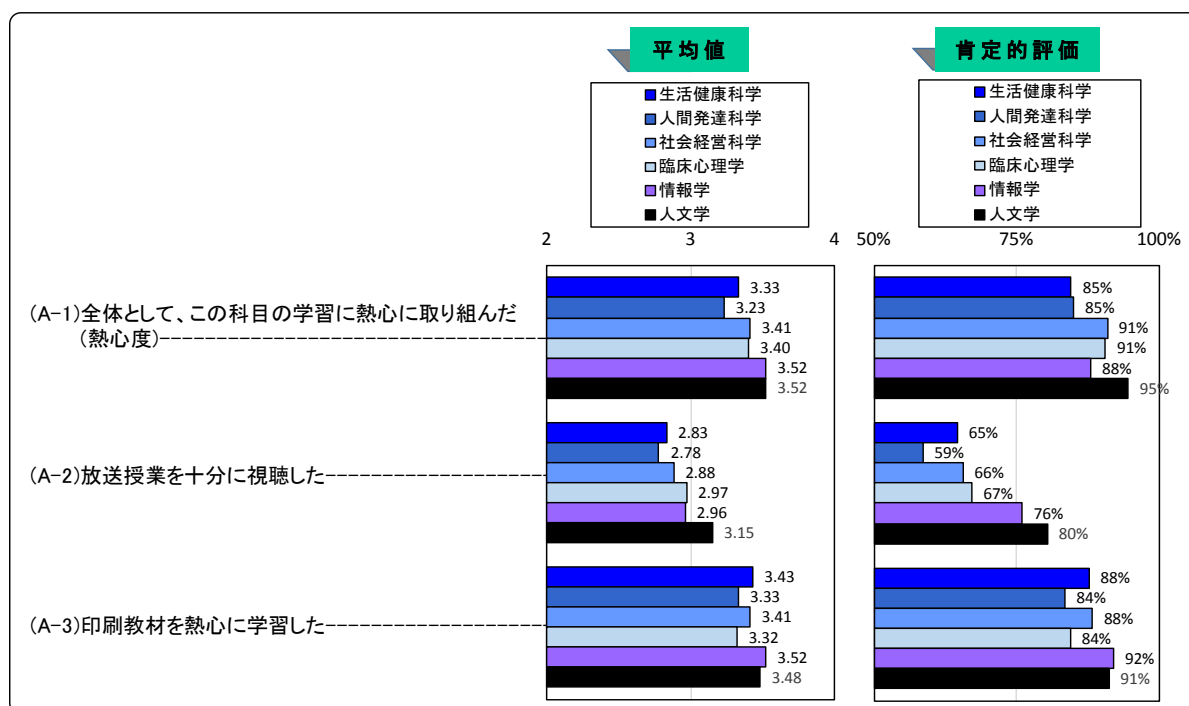


所属プログラム別では（図2-55）（A-1）「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」は全てのプログラムで85%以上と高率で特に「人文学」で95%と高かった。

反対に（A-2）「放送授業を十分に視聴した」については他の2項目に比べ様に低く最も高かったのは「人文学」の80%であった。

（A-3）「印刷教材を熱心に学習した」は前述の「A-1の熱心度」同様、全てのプログラムで評価が高く「情報学」と「人文学」では9割に達していた。

図2-55 【大学院】所属プログラム別の取組姿勢

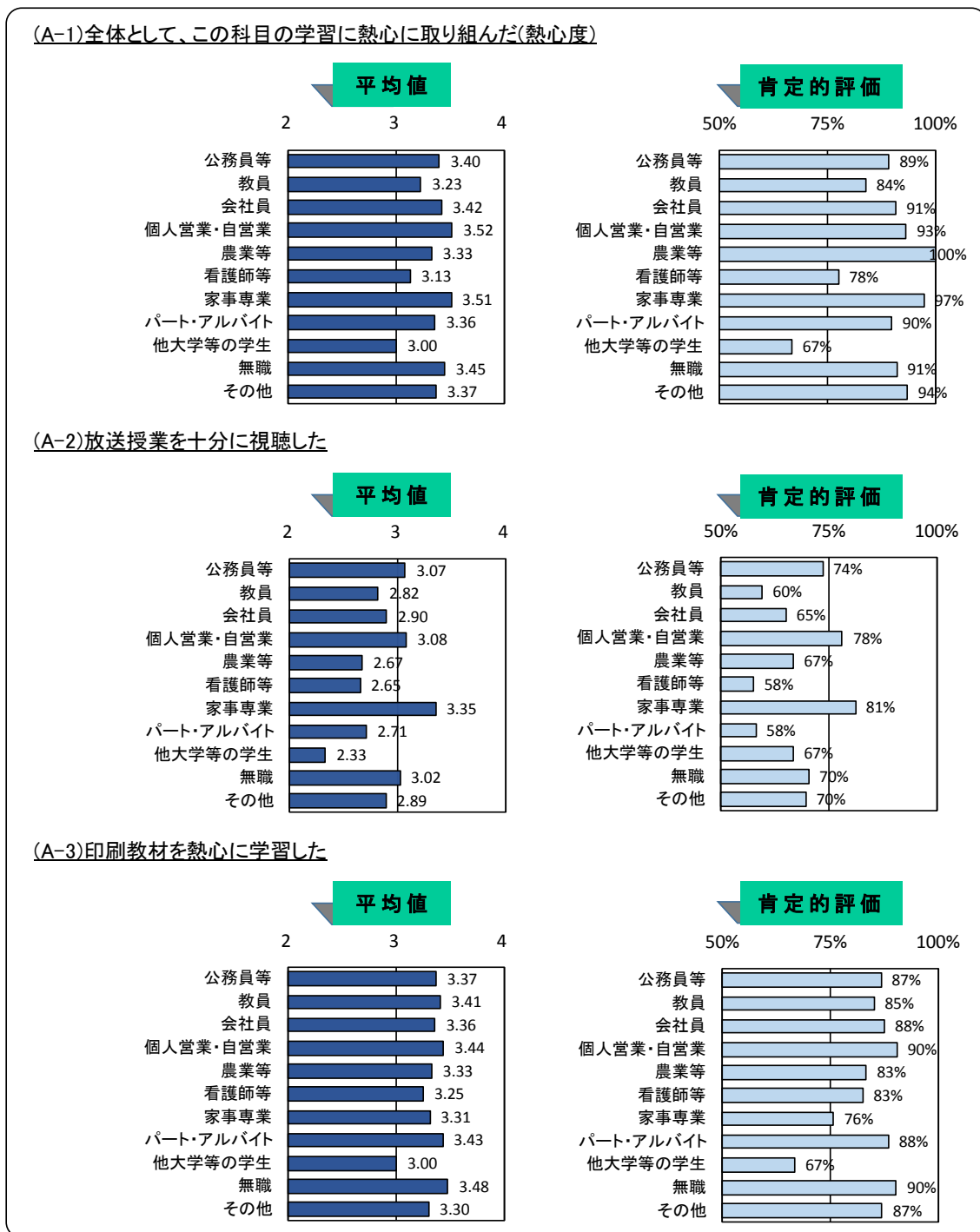


職業別では（図2-56）（A-1）「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」では「看護師等」と「教員」は他の職業と比べ値が低かった。それ以外の職業は90%前後と高率で、特に「家事専業」は97%に達していた。

（A-2）「放送授業を十分に視聴した」は、総じて低い値で「看護師等」と「パート・アルバイト」は6割を切っていた。

（A-3）「印刷教材を熱心に学習した」は「家事専業」以外は80%台から90%で高い水準であった。

図2-56【大学院】職業別の取組姿勢



単位認定のための学習方法（図2-57）は、全体では「放送教材と印刷教材の両方の学習で臨んだ」が60%を占め、「ほとんど印刷教材の学習だけで臨んだ」が30%で、「ほとんど放送教材の学習だけで臨んだ」は5%と極めて少ない。

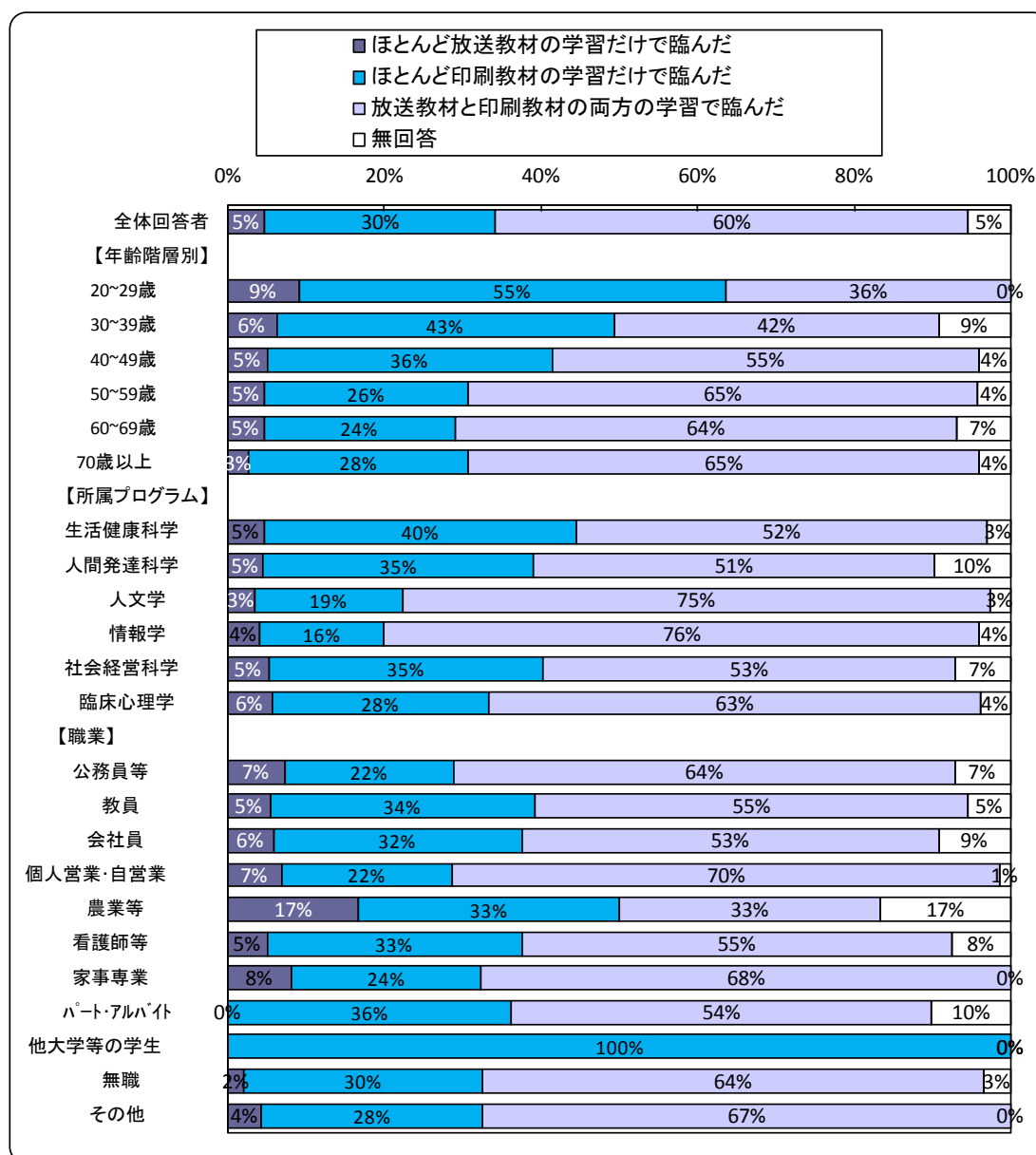
年齢階層別では、年代が低いほど「印刷教材の学習だけ」の比率が高く、30歳代で「印刷教材の学習だけ」と「放送教材と印刷教材の両方」が同水準で、40歳代以降は「放送教材と印刷教材の両方」が55%から65%で推移していた。

所属プログラム別では、全体との対比で「放送教材と印刷教材の両方」は「人文学」「情報学」で高く、「生活健康科学」「人間発達科学」「社会経営科学」で低かった。

「臨床心理学」は全体と同傾向であった。

職業別では全体と比べ「放送教材と印刷教材の両方」が多かったのは「個人営業・自営業」「家事専業」「その他」で67%～70%に及んでいた。

図2-57 【大学院】 単位認定のための学習方法



Ⅱ－２－３．大学院の授業評価

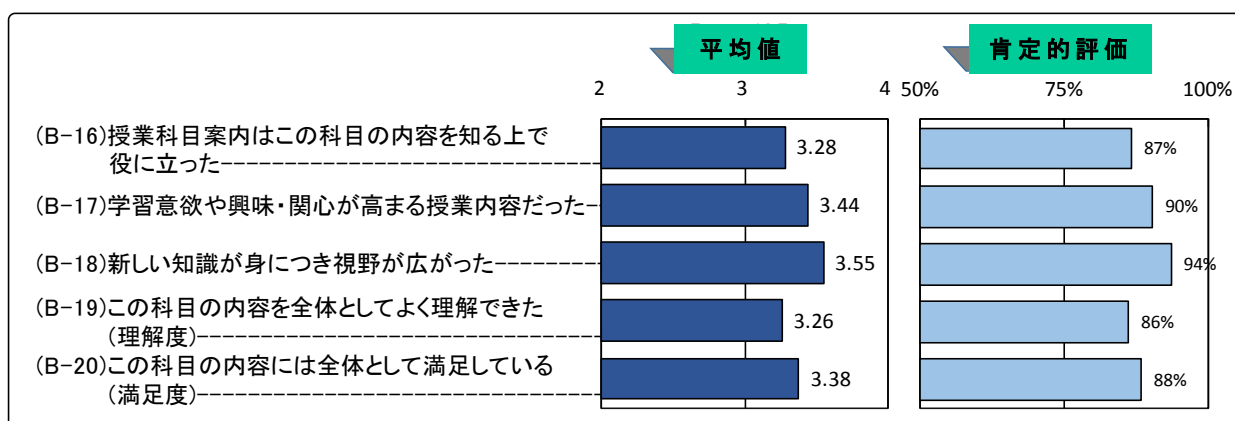
(1) 全体評価

ここからは大学院の授業評価について、評価項目ごとにみていくこととする。

全体評価では（図 2－5 8）いずれの項目も高い評価で、特に（B-18）「新しい知識が身につく視野が広がった」は 94%に達していた。

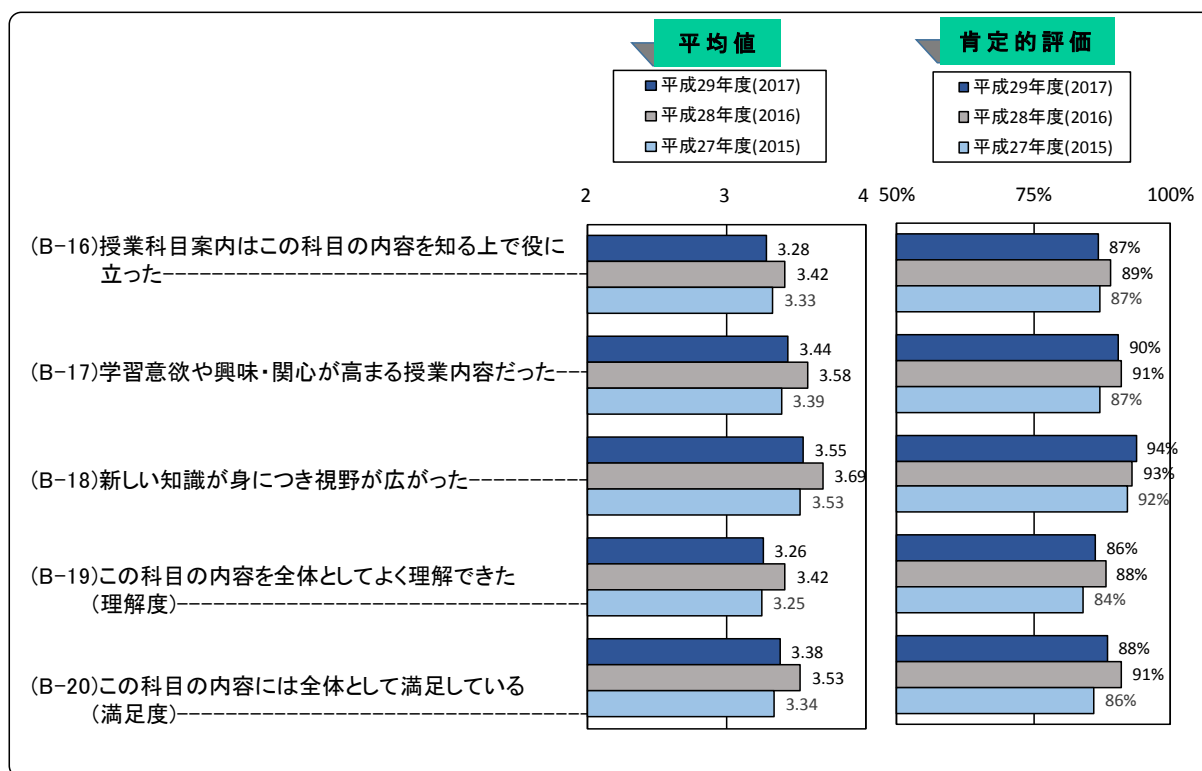
それ以外では（B-17）「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」も 90%の支持率であった。

図 2－5 8 【大学院】回答者全体の全体評価



全体評価を時系列で見ると（図2-59）この三年間ほとんど変わりがなく同水準であったが、増減で言うと（B-18）「新しい知識が身につく視野が広がった」以外は微減傾向となっている。

図2-59 【大学院】回答者全体の全体評価（時系列）

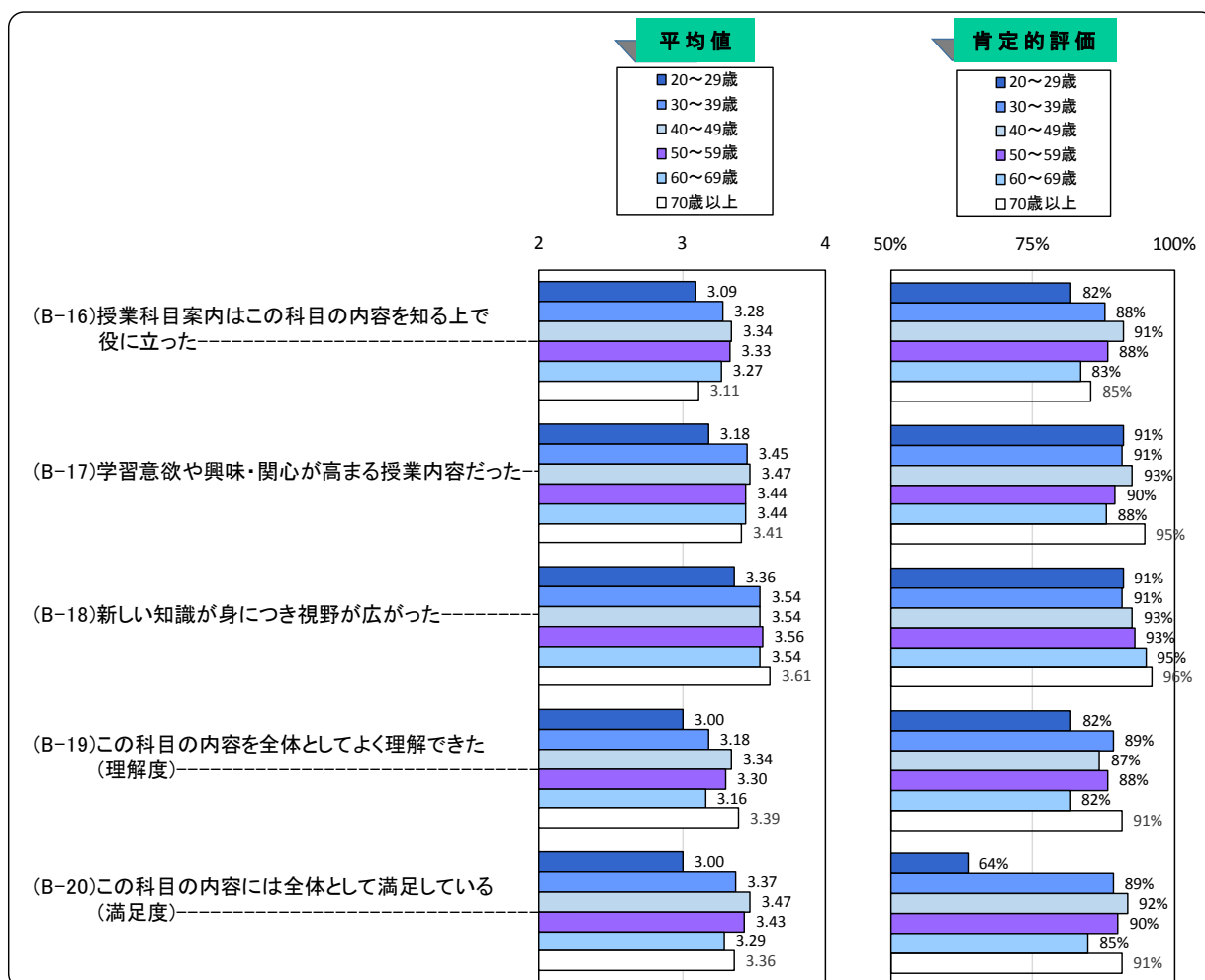


年齢階層別では（図2-60）、標本数の少ない20歳代を除けば、全ての項目で最も低い値が（B-19）「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」における50歳代の82%で、この事から全体的に評価が高いことがわかる。

中でも（B-18）「新しい知識が身につく視野が広がった」は全年代から90%台の高い支持率を得ていた。

70歳以上は評価が高く（B-16）「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」以外の4項目で最上位であった。

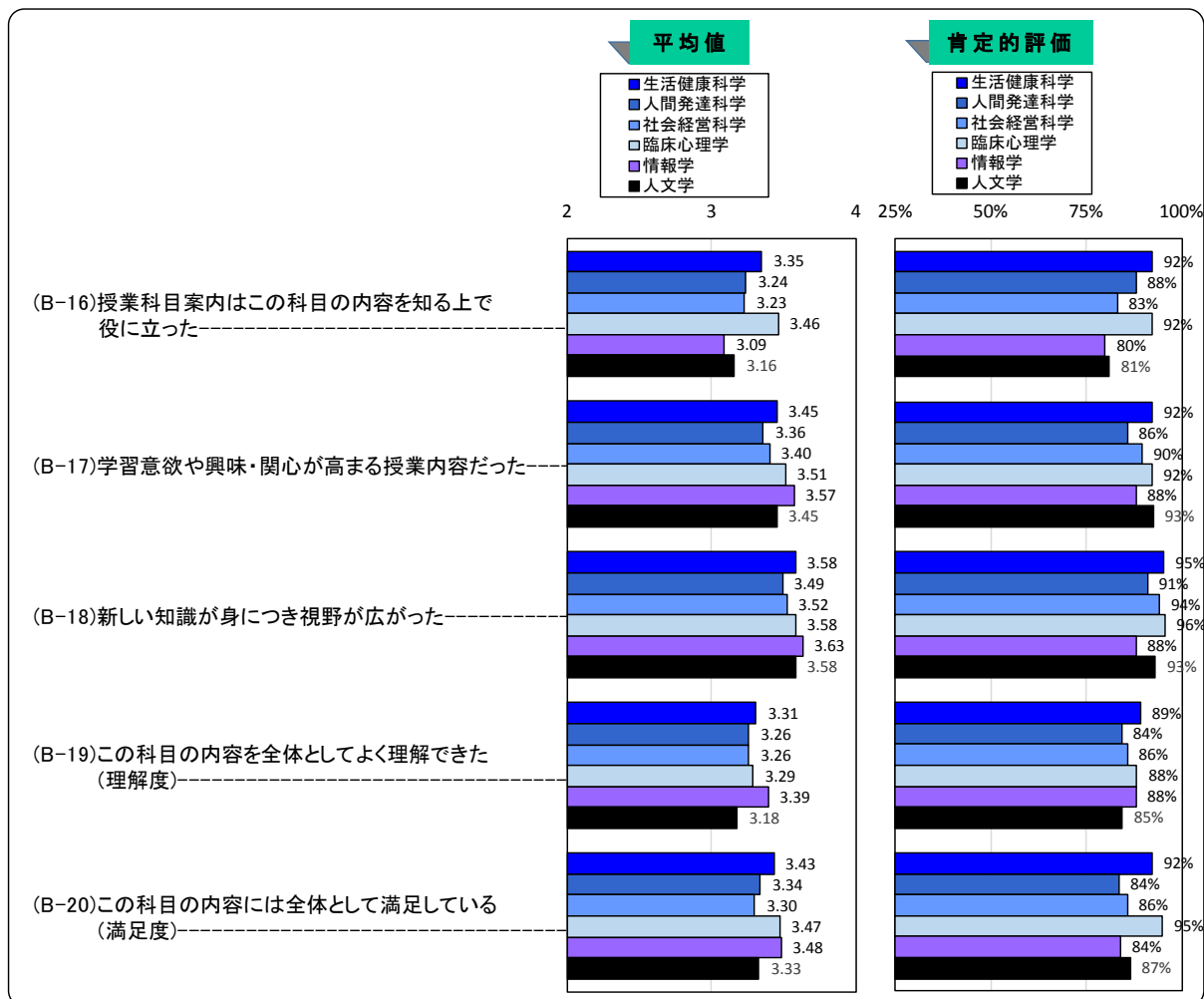
図2-60【大学院】年齢階層別の全体評価



所属プログラム別に全体評価をみると（図2-61）、「生活健康科学」と「臨床心理学」の評価が高く、全項目で上位1位と2位を占めていた。

(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」については「情報学」の支持率も同率2位と高かった。

図2-61 【大学院】所属プログラム別の全体評価

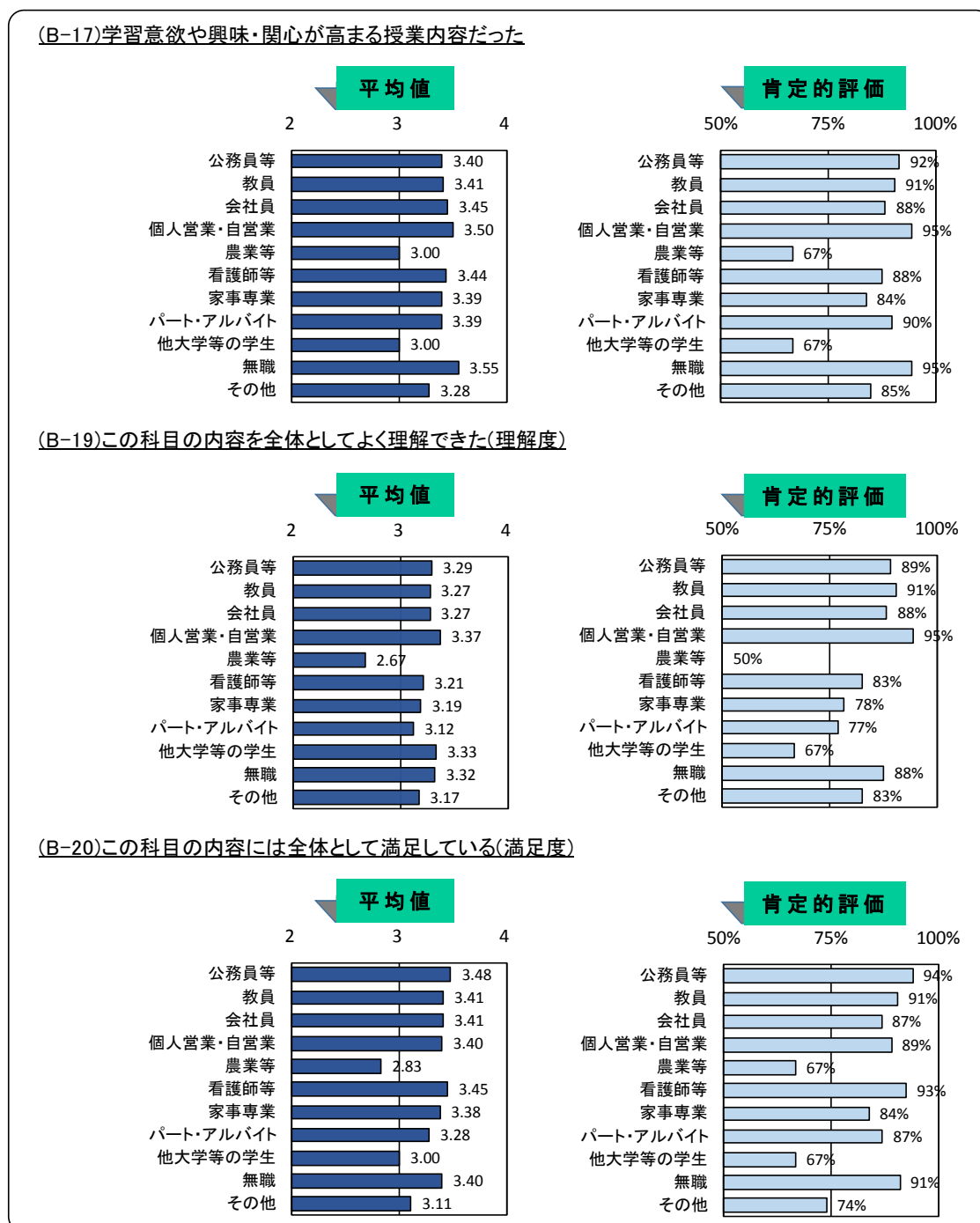


職業別では（図2-62）、(B-17)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」はいずれの職業でも高く、特に「個人営業・自営業」と「無職」が95%と高かった。

(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」は「教員」と「個人営業・自営業」が高く、反対に「家事専業」と「パート・アルバイト」で低かった。

(B-20)「この科目の内容には全体として満足している（満足度）」は「公務員等」と「看護師等」が高く、「その他」で低かった。

図2-62【大学院】職業別の全体評価

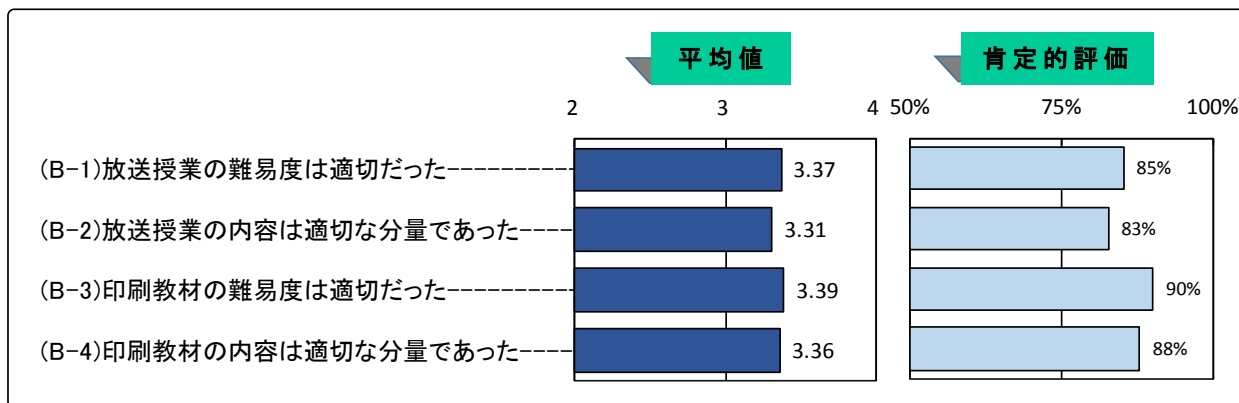


(2) 授業の難易度・分量

次に授業の難易度・分量について評価項目ごとにみていく。

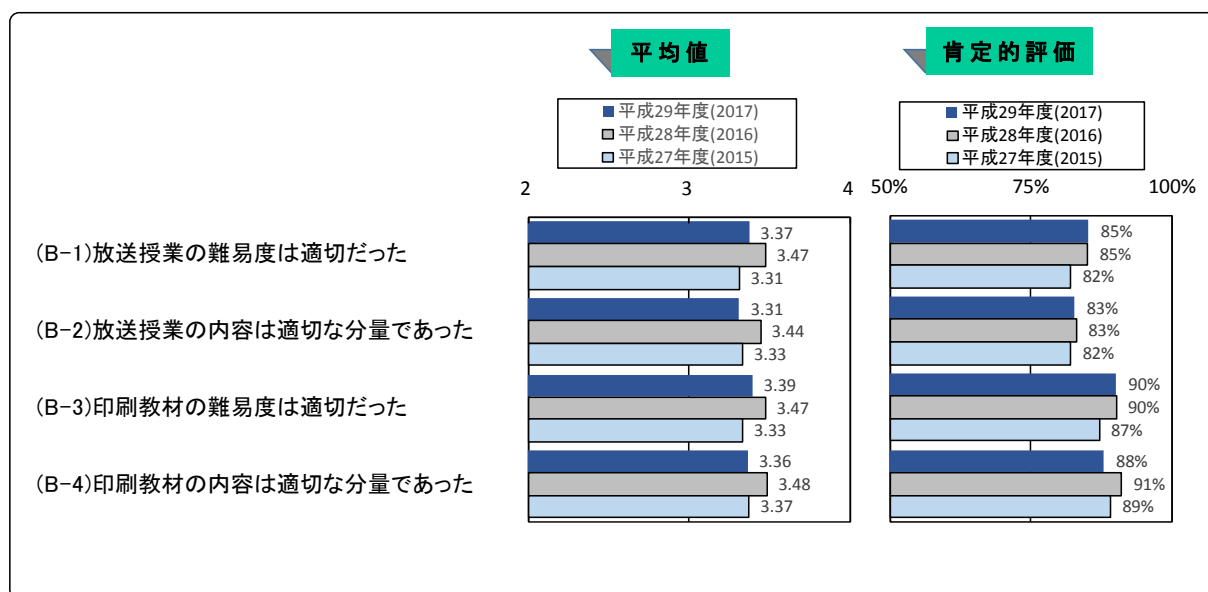
授業の難易度・分量の評価は（図2-63）いずれも高い評価となっている。ただ、『放送授業』の支持率（B-1,2）より『印刷教材』（B-3,4）の支持率の方が高かった。

図2-63 【大学院】回答者全体の授業難易度・分量の評価



開設年度で比較すると（図2-64）、2016年度との比較で（B-4）「印刷教材の内容は適切な分量であった」は2017年度が微減であったが、それ以外は全く変わらなかった。

図2-64 【大学院】回答者全体の授業難易度・分量の評価（開設年度比較）



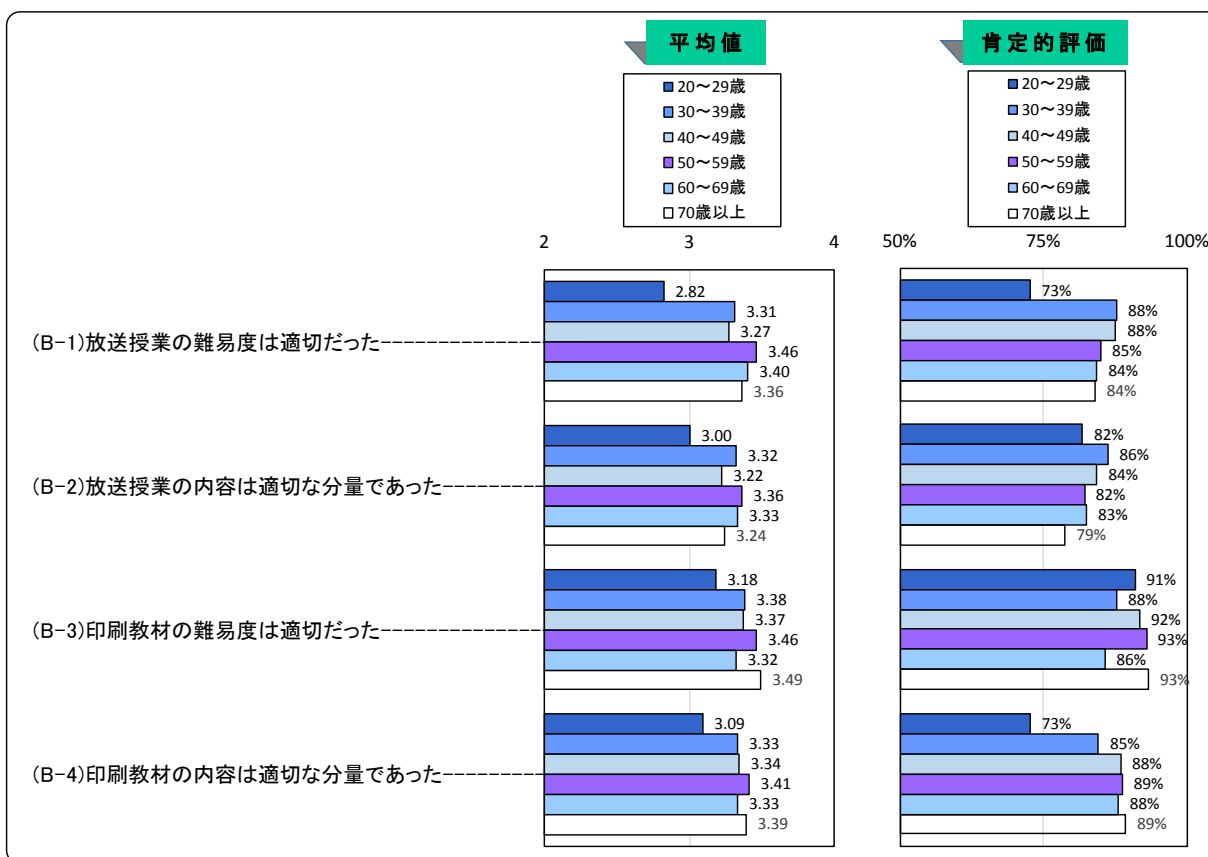
年齢階層別に授業の難易度・分量をみると（図 2 - 6 5）（B-1）「放送授業の難易度は適切だった」は 30 歳代、40 歳代で評価が高かった。

同様に（B-2）「放送授業の内容は適切な分量であった」は 30 歳代をピークに年齢の上昇と共に評価は下降傾向で、70 歳以上で 79%となっている。

（B-3）「印刷教材の難易度は適切だった」では 30 歳代と 60 歳代で支持率が低かった。

（B-4）「印刷教材の内容は適切な分量であった」は年代間に大きな差はなく一様に高い評価であった。

図 2 - 6 5 【大学院】年齢階層別の授業難易度・分量の評価

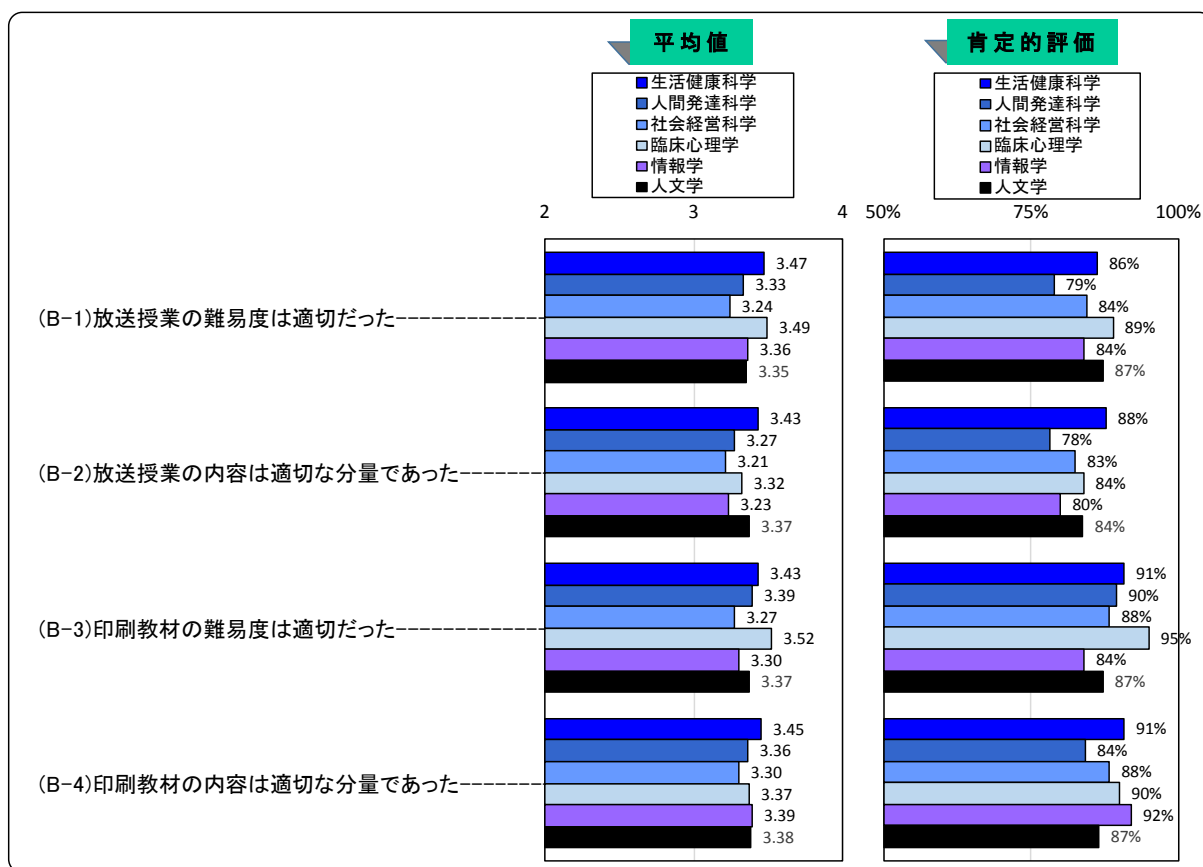


所属プログラム別に授業の難易度・分量をみると（図2-66）最も高い評価をしたのは、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」と(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」では「臨床心理学」、(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」では「生活健康科学」であった。

(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」は「情報学」であった。

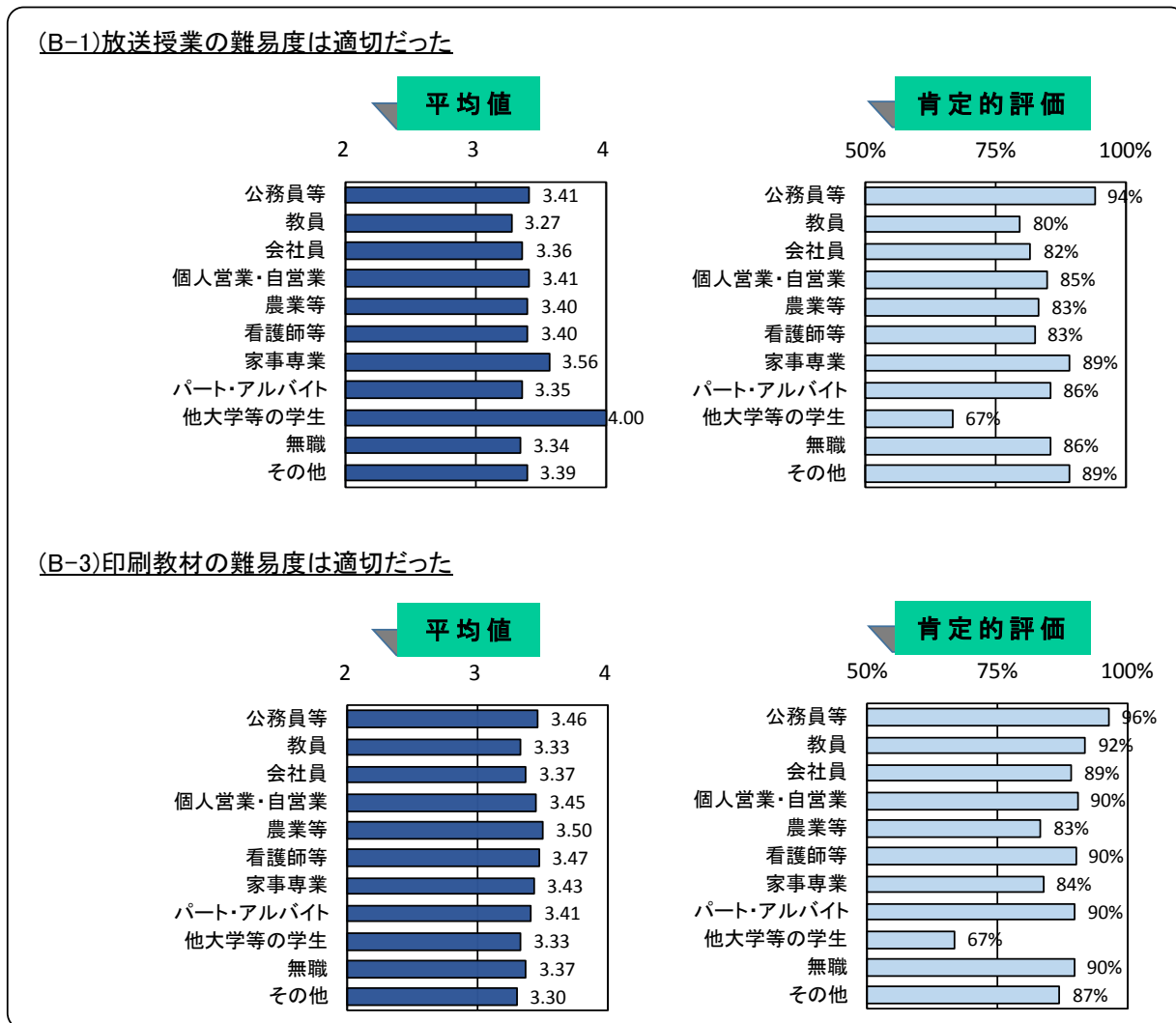
反対に(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」以外の3項目で「人間発達科学」の評価が最も低く、(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」で最も低かったのは「情報学」であった。

図2-66 【大学院】所属プログラム別の授業難易度・分量の評価



職業別に授業の難易度をみると（図2-67）、放送授業については「公務員等」と「家事専業」「その他」が高く、印刷教材では「公務員等」と「教員」が高かった。それ以外の職業についても両項目に対して80%以上の支持率であった。

図2-67【大学院】職業別の授業難易度の評価



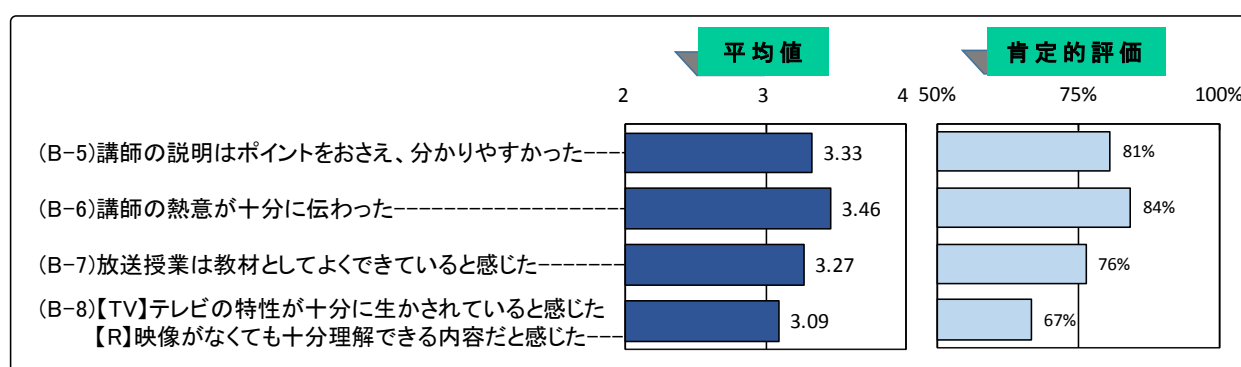
(3) 放送授業

ここからは放送授業について評価項目ごとにみていく。

放送授業に関する評価項目をみると（図2-68）(B-5) (B-6)の講師に対する評価はそれぞれ81%、84%と高く、放送授業の自体に対する評価の(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」は76%と前2者に比べると低かった。

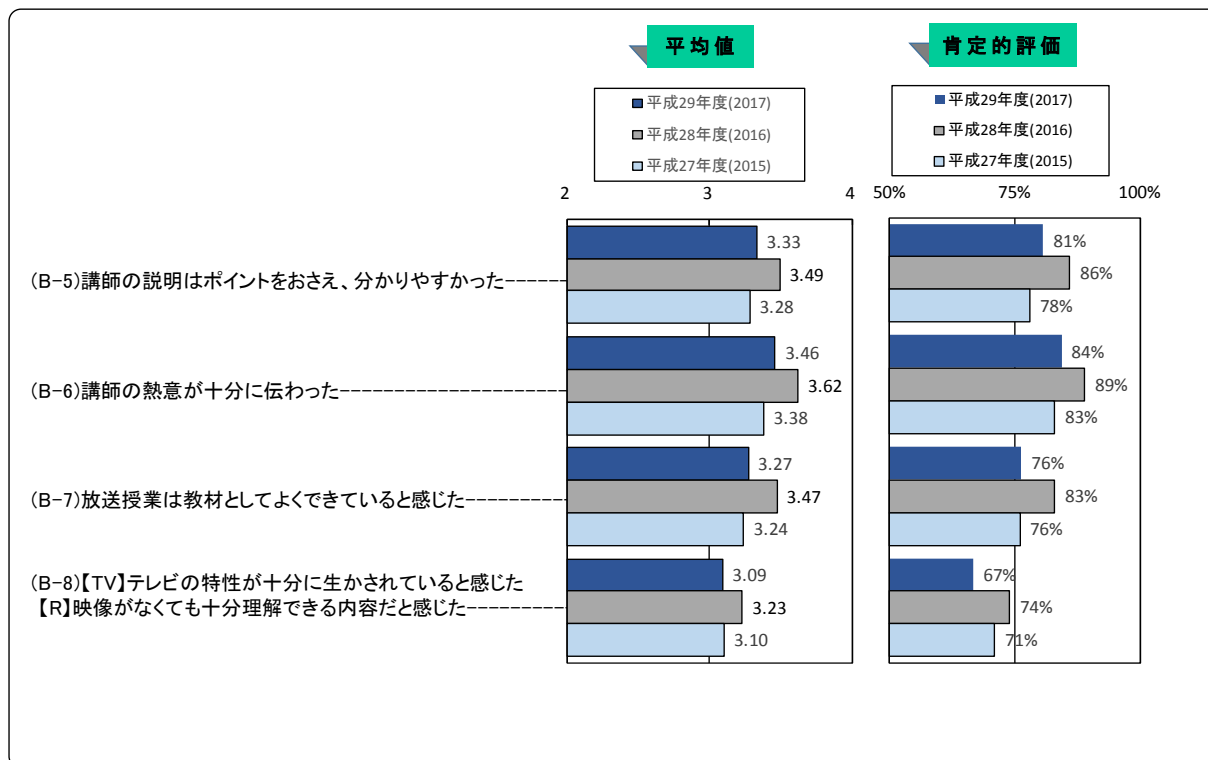
(B-8)「テレビの特性が十分に生かされていると感じた／(ラジオ)映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」は67%にとどまっている。

図2-68 【大学院】回答者全体の放送授業の評価



放送授業の評価を時系列で見ると（図2-69）2017年度は全ての項目で2016年度より評価が低くなっていた。

図2-69 【大学院】回答者全体の放送授業の評価（時系列）

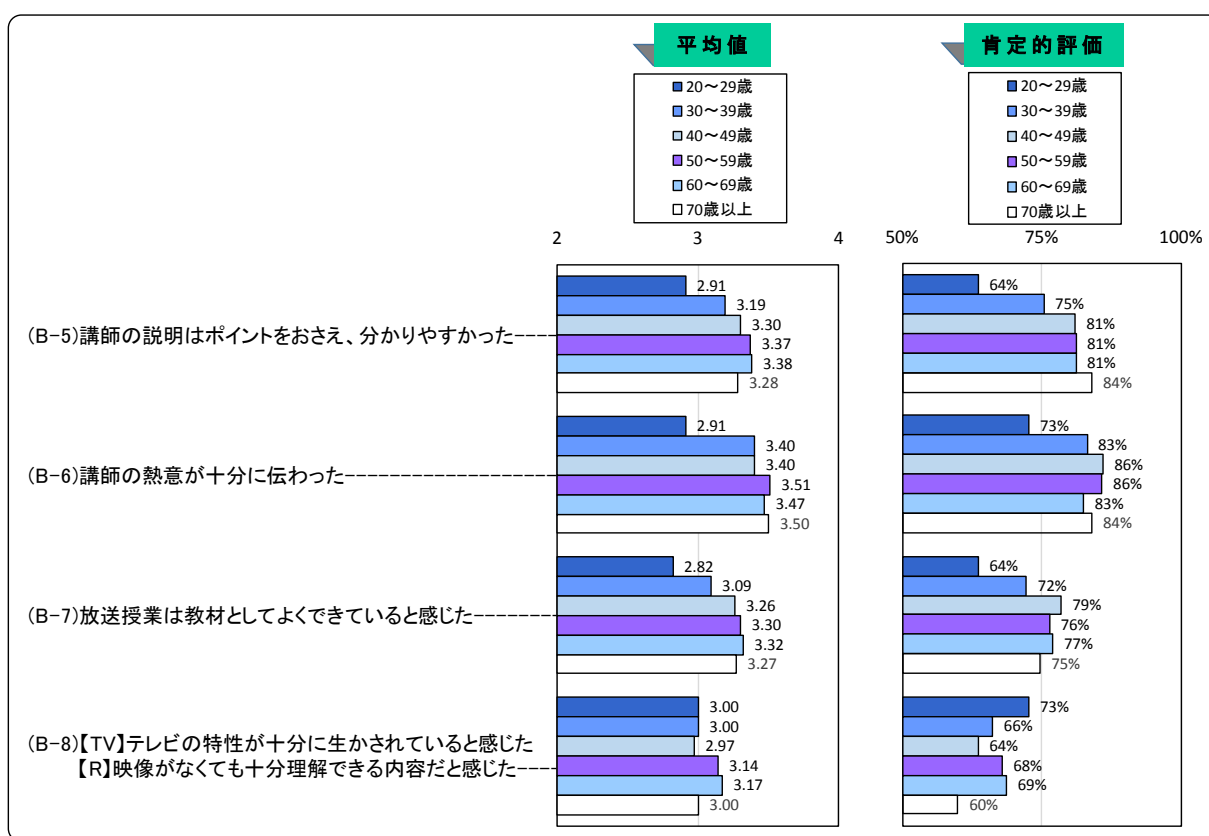


年齢階層別では(図2-70)(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」については30歳代が80%を割り込んでいたが、それ以上の年代では80%以上の支持率であった。

(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」では更に支持率は高く83%~86%に及んだ。放送授業、自体の評価である(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」は最も高い評価でも40歳代の79%にとどまった。

(B-8)「テレビの特性が十分に生かされていると感じた／(ラジオ)映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」は20歳代を除くと全ての年代で60%台と低率であった。

図2-70【大学院】年齢階層別の放送授業の評価

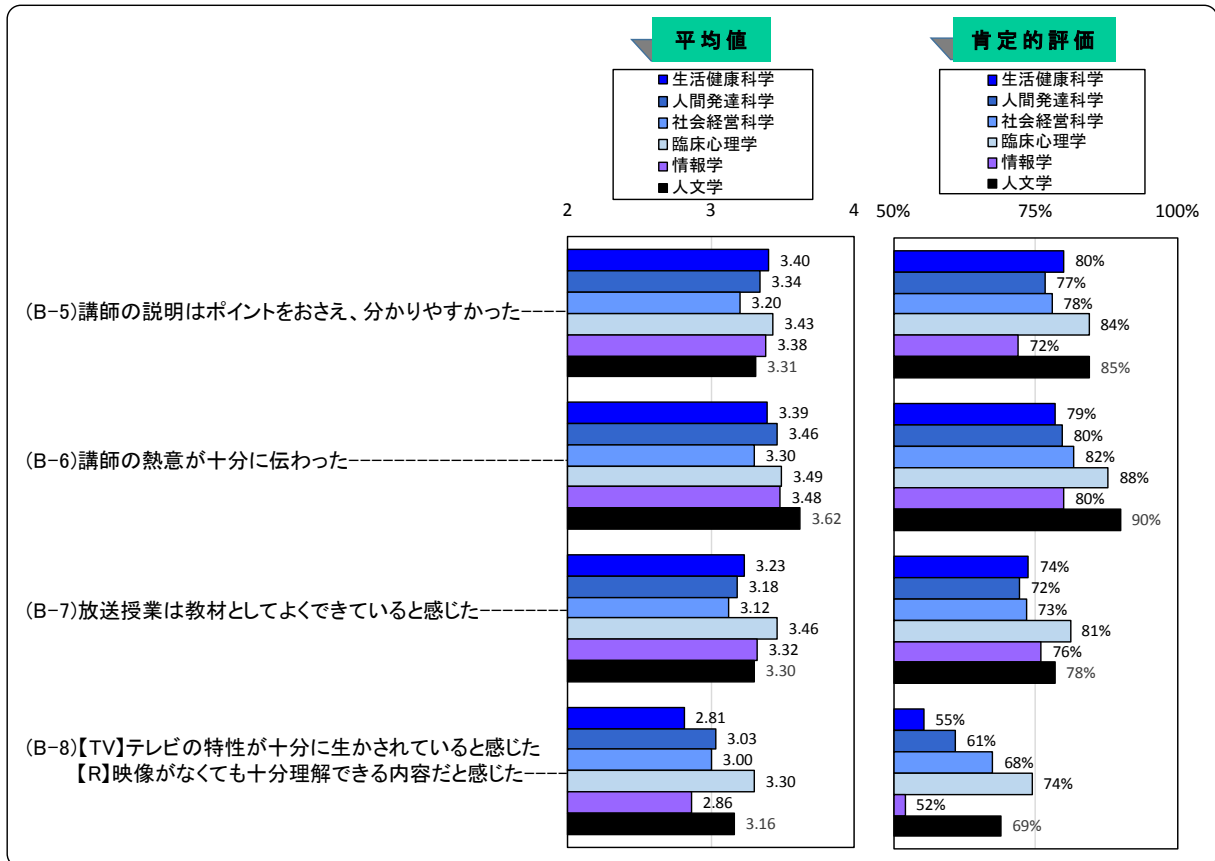


所属プログラム別では（図2-71）放送授業の全ての項目で「臨床心理学」と「人文学」が上位2位までを占めていた。

反対に低かったのは「情報学」の（B-8）「テレビの特性が十分に活かされていると感じた／（ラジオ）映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」であった。

（B-6）「講師の熱意が十分に伝わった」と（B-7）「放送授業は教材としてよくできていると感じた」については3位以降でプログラム間にそれほど差はなかった。

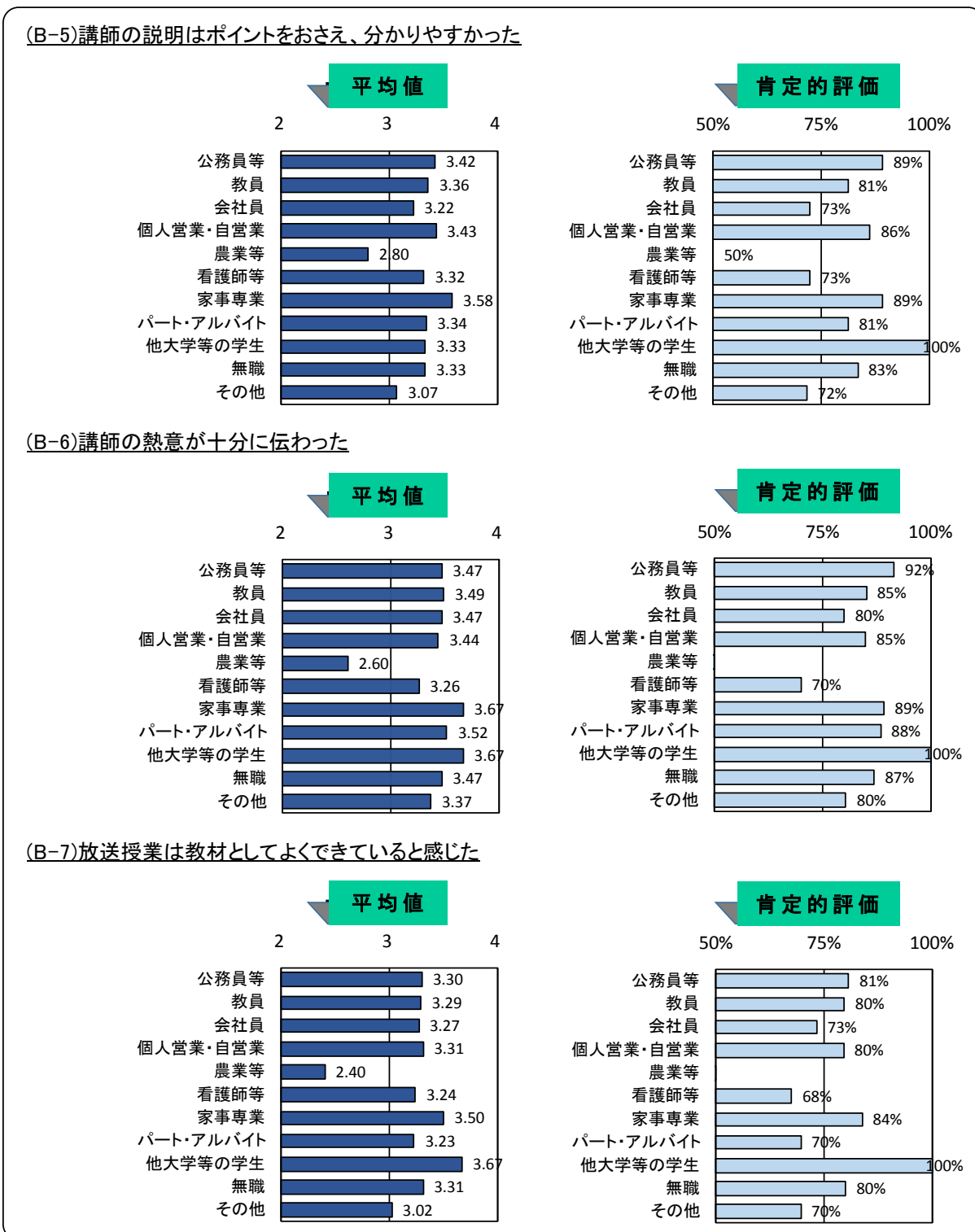
図2-71 【大学院】所属プログラム別の放送授業の評価



職業別では（図2-72）全ての項目で「公務員等」と「家事専業」が上位2位を占めていた。

反対に支持率が低かったのは（B-5）「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」では「その他」「会社員」「看護師等」で、残りの2項目については「看護師等」が最も低かった。

図2-72【大学院】職業別の放送授業の評価



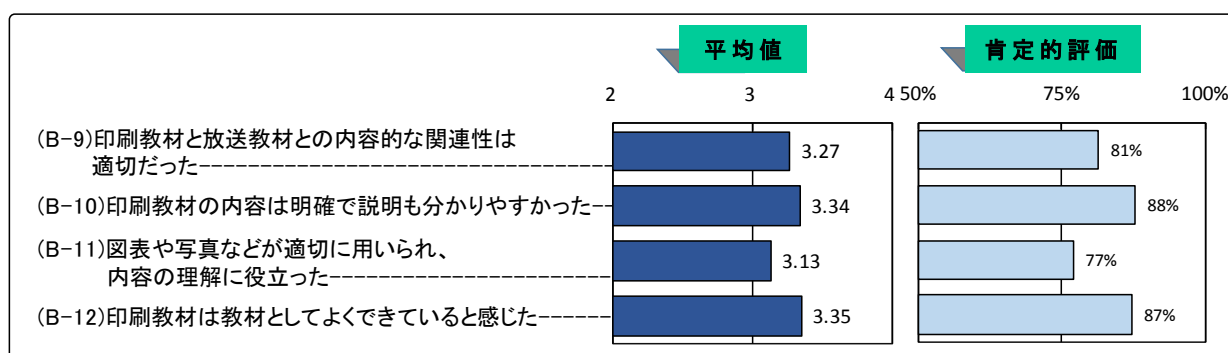
(4) 印刷教材

ここからは印刷教材について、評価項目ごとにみていく。

印刷教材の評価項目では(図2-73)印刷教材に対する直接的な評価である(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」(88%)と(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」(87%)と高かった。

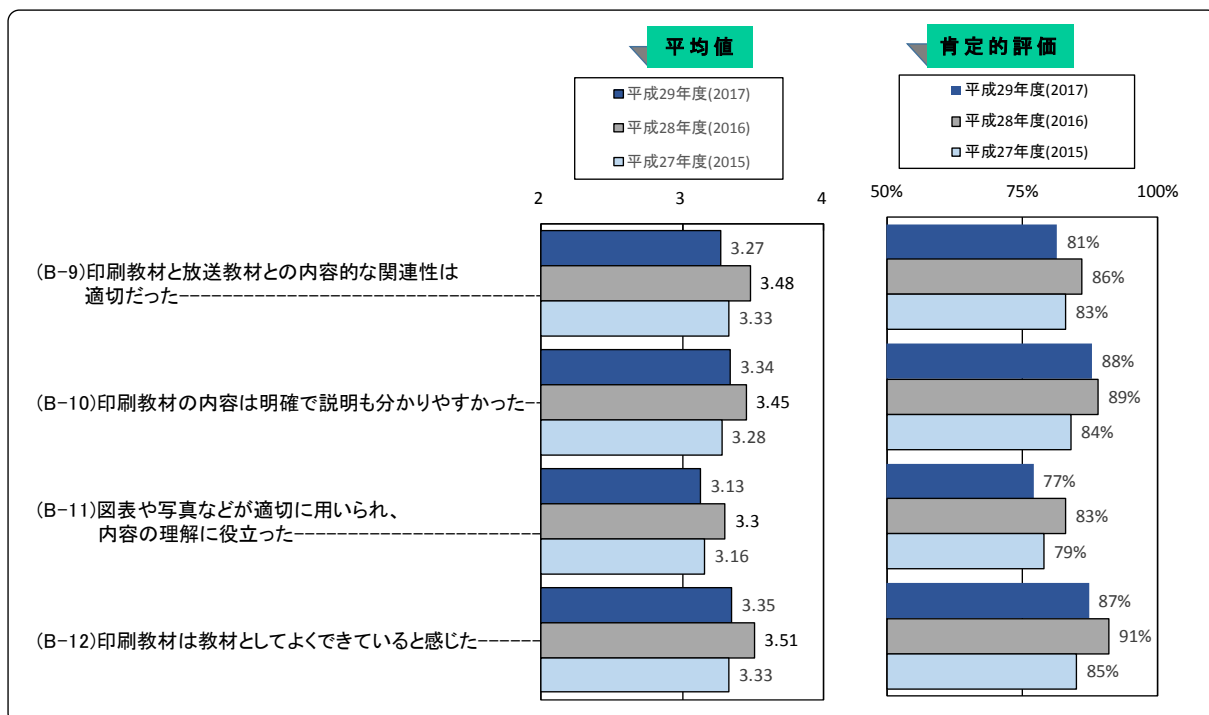
(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役に立った」については項目間の比較では低い支持率で、77%にとどまっていた。

図2-73 【大学院】回答者全体の印刷教材の評価



印刷教材の評価を時系列で見ると（図2-74）2017年度は（B-9）「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」、（B-11）「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役に立った」、（B-12）「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」の3項目については、2016年度から4～6ポイントの減少がみられたが、（B-10）「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」は、ほとんど変化はなかった。

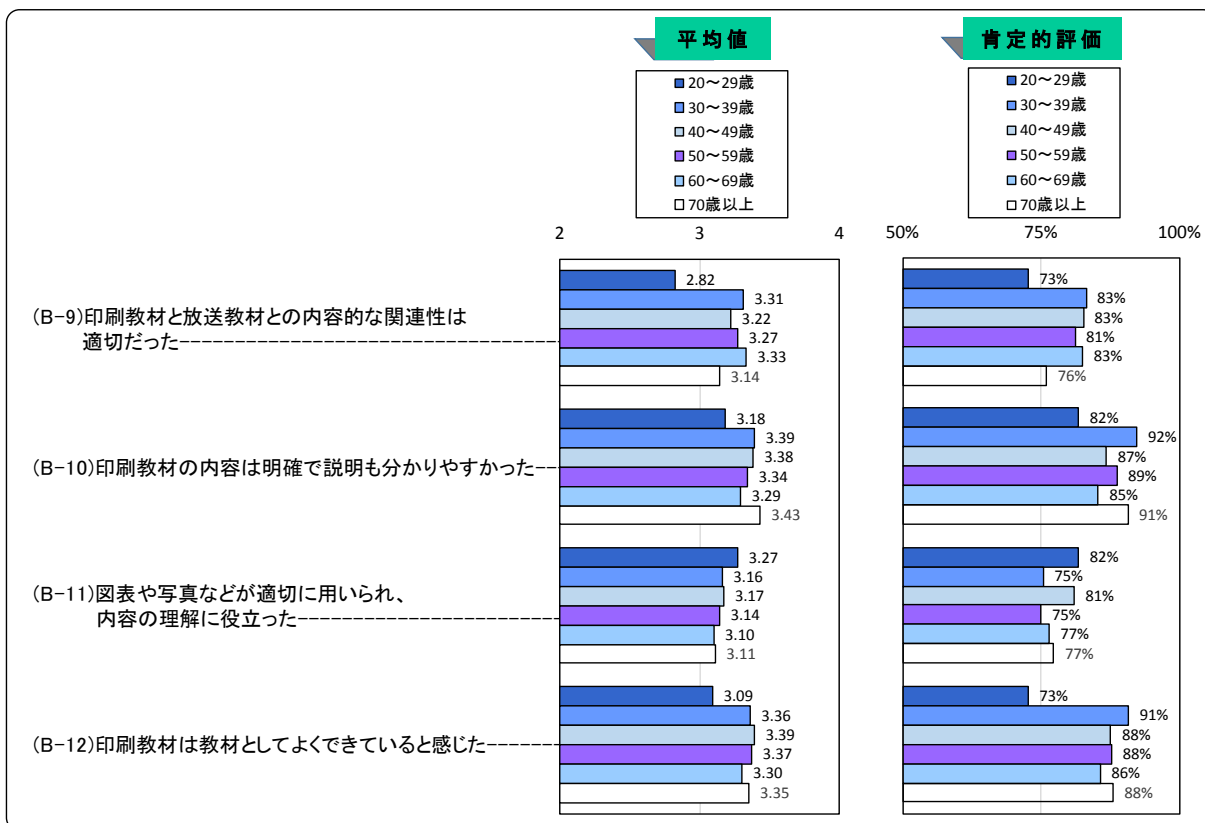
図2-74 【大学院】回答者全体の印刷教材の評価（時系列）



年齢階層別の評価（図2-75）では、30歳代が（B-9）「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」、（B-10）「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」、（B-12）「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」で最も高かった。

（B-11）「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役に立った」は20歳台以外では40歳代で高かった。

図2-75 【大学院】年齢階層別の印刷教材の評価

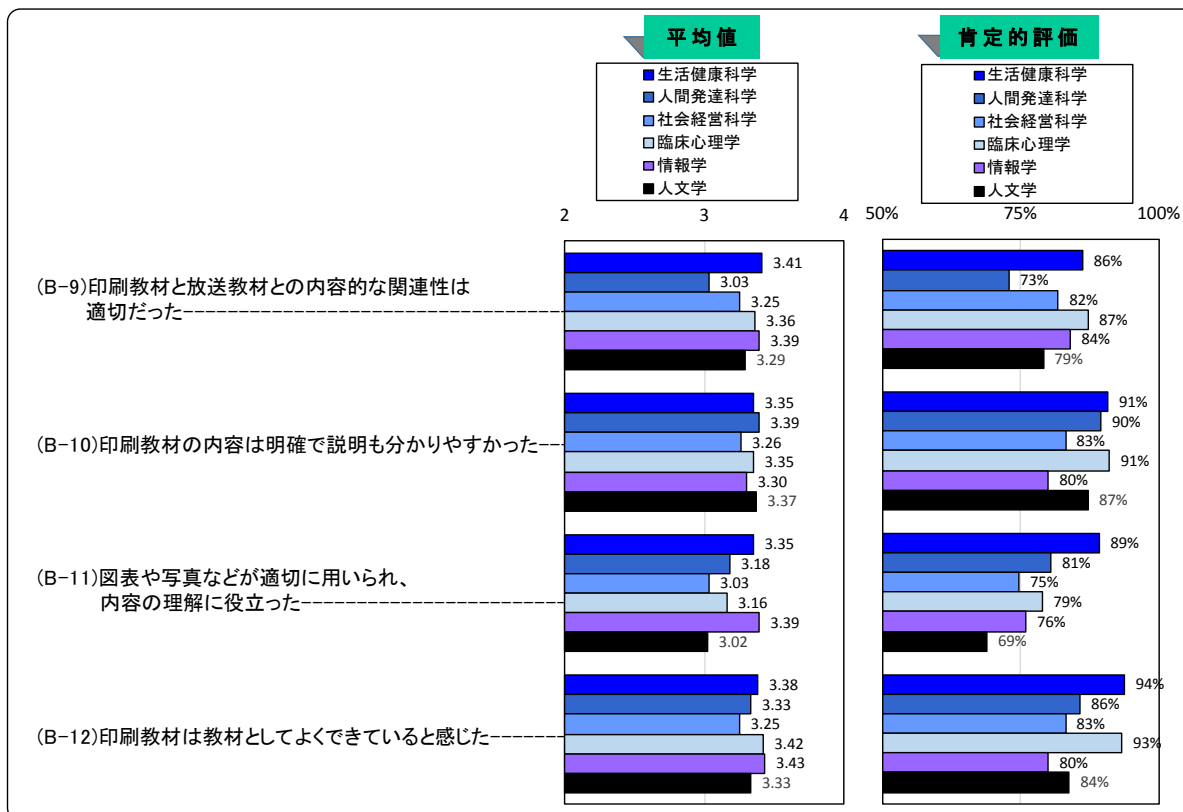


所属プログラム別の評価をみると（図2-76）「生活健康科学」は全項目で高い評価を得ており、「臨床心理学」も評価が高かった。

（B-10）「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」については「人間発達科学」も高かった。

（B-11）「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役に立った」については高い評価をした「生活健康科学」とそれ以外のプログラムとの差が大きい。

図2-76 【大学院】所属プログラム別の印刷教材の評価

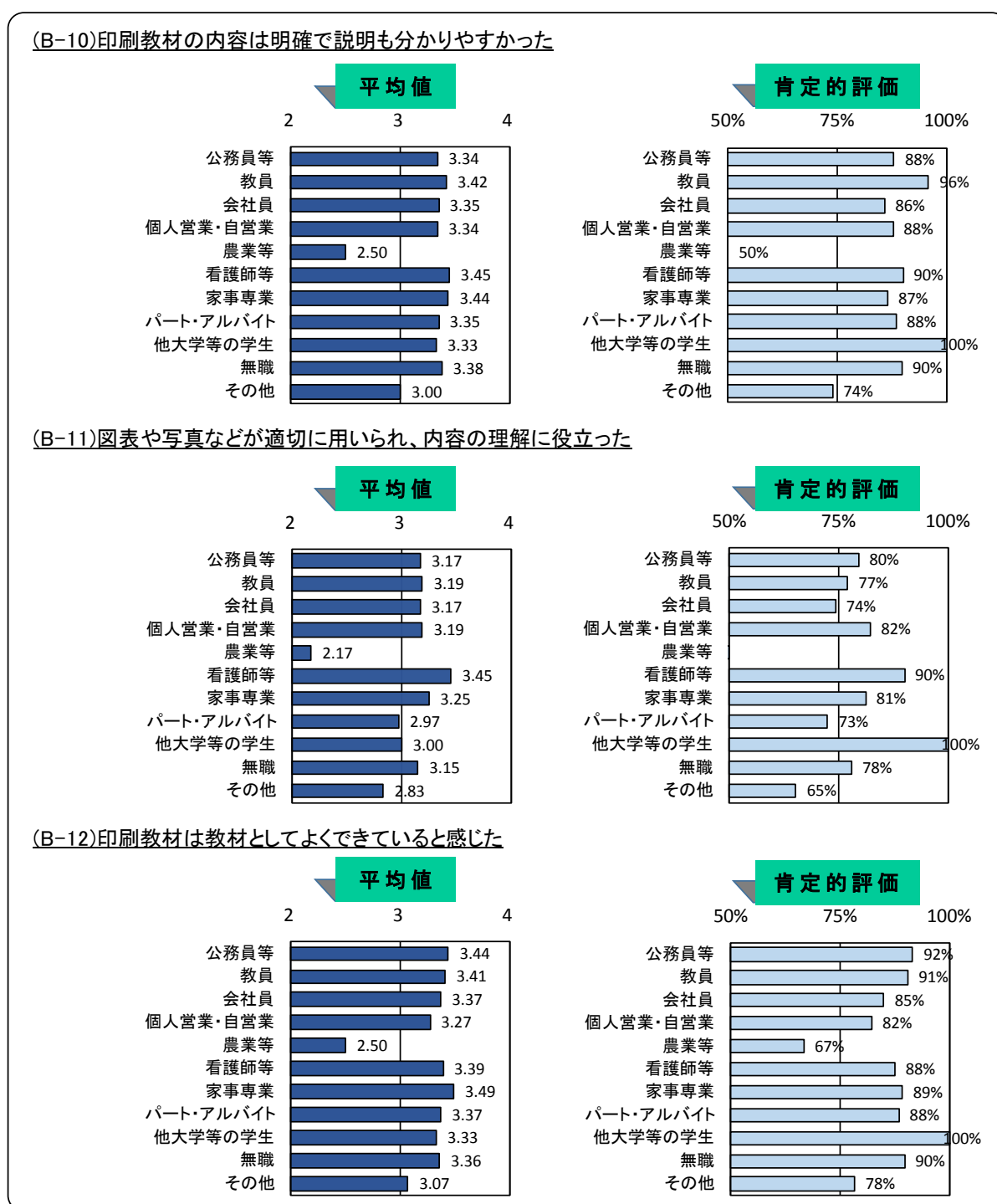


職業別(図2-77)にみると(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」については「その他」以外から高い評価を得ており、特に「教員」は96%と際立っていた。

(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」では「看護師等」の評価が90%と目立っていた。

(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」は「その他」が78%と他の職業と比べ低率だが、それ以外では90%前後の評価が多く(B-10)同様、全般的に高い評価を得ていた。

図2-77【大学院】職業別の印刷教材の評価



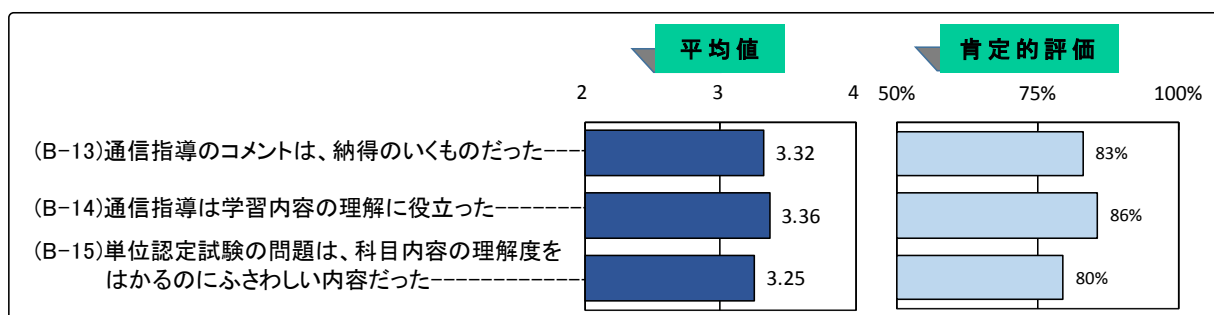
(5) 通信指導・単位認定試験

最後に通信指導・単位認定試験の評価について項目ごとにみていくことにする。

通信指導については（図2-78）(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」が肯定的評価83%、(B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」が86%と高評価であった。

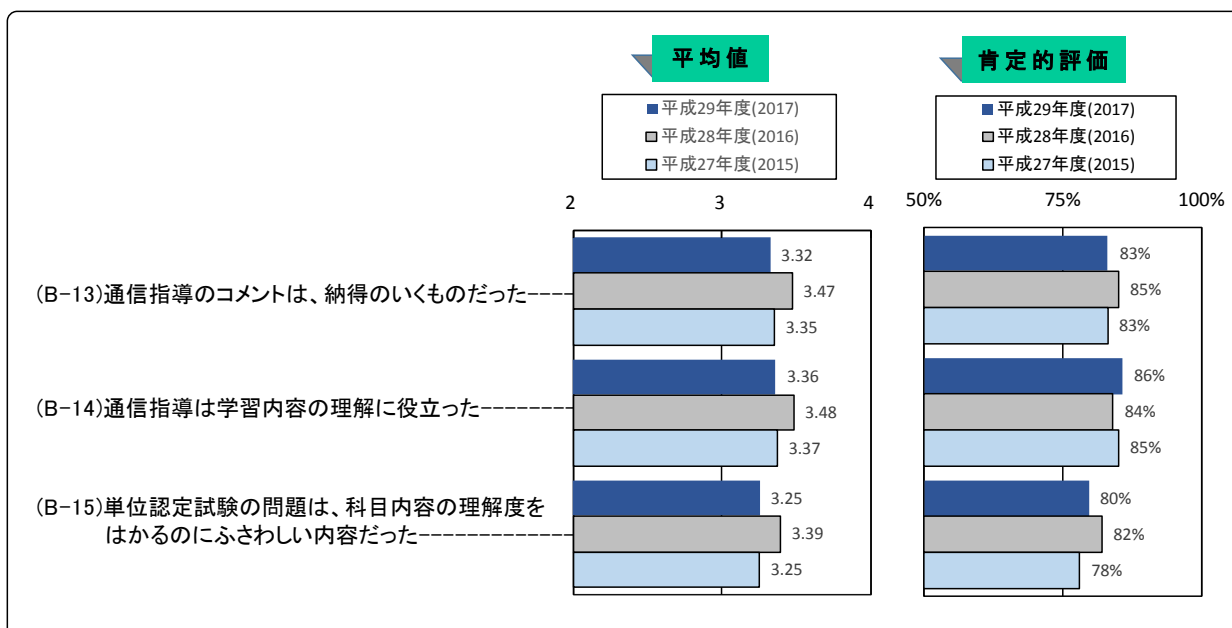
単位認定試験についても(B-15)「単位認定試験の問題は科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」が80%と評価が高かった。

図2-78【大学院】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価



通信指導・単位認定試験の評価を時系列でみると（図2-79）2016年度との比較で(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」と(B-15)「単位認定試験の問題は科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」は微減、(B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」は微増であった。

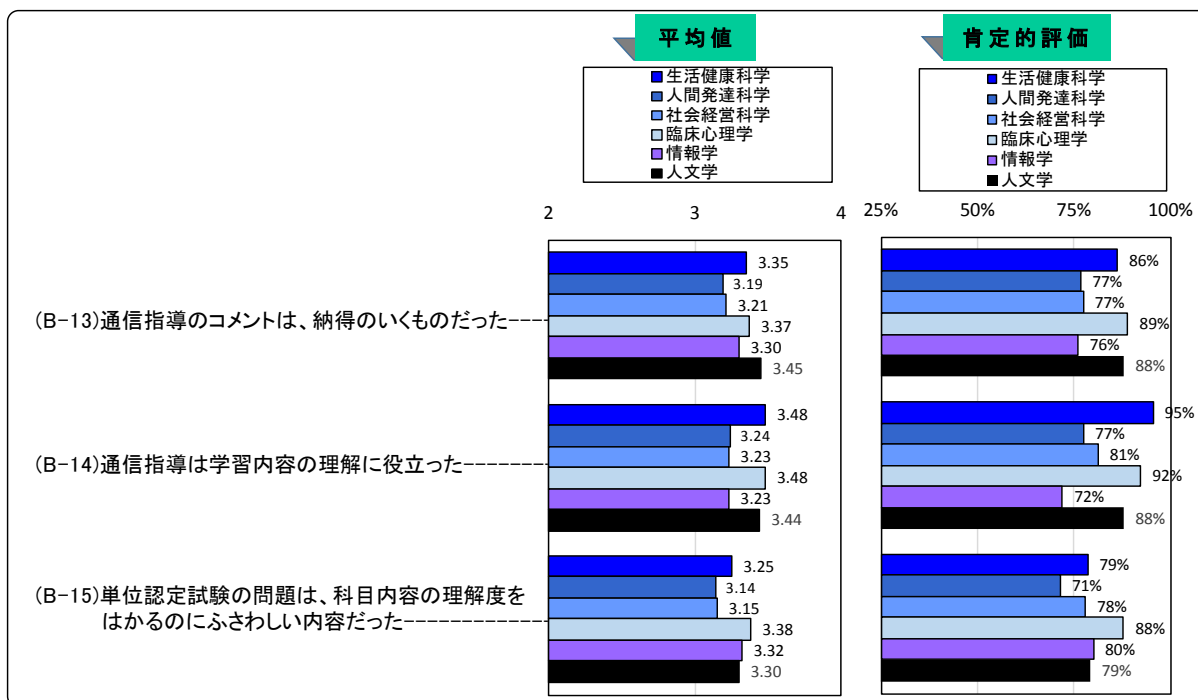
図2-79【大学院】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価（時系列）



所属プログラム別では（図 2-80）（B-13）「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」と（B-14）「通信指導は学習内容の理解に役立った」は「生活健康科学」「臨床心理学」「人文学」の上位3プログラムとそれ以外で、評価の差が7～13ポイントと大きく2極化がみられた。

（B-15）「単位認定試験の問題は科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」は「臨床心理学」が最も高かった。

図 2-80 【大学院】所属プログラム別の通信指導・単位認定試験の評価



Ⅱ－２－４．大学院の重回帰分析

大学院でも学部同様、重回帰分析で〈全体評価〉の全体の満足度 B-(20) を目的変数とし、それ以外の各項目を説明変数として分析を試みる。

最終的には「全体の満足度」に寄与する項目を明らかにすると共に、その影響力の強さを
 知ること目的とする。

項目名	変数	対象
目的変数	y	全体の満足度 B-(20)
説明変数	x_1, x_2, \dots	各項目 A①～③、B(1)～(19) : 全 22 問
係数	a_1, a_2, \dots	重回帰分析によって得られる偏回帰係数

重回帰式 $y = a_0 + a_1x_1 + a_2x_2 + \dots + a_{22}x_{22}$ (説明変数が全 22 問の場合)

説明変数が多すぎると全体の満足度を表すために適した重回帰式を得られないことが経験的に分かっているため、学部同様、重回帰分析の中で、目的変数との相関関係が強い説明変数を自動的に選択する「変数減少法」を用いて解析を行うことにする。

使用するデータは調査票の表面の I. の A と B、全設問を全て回答した 530 人のローデータを使用する。

■大学院の重回帰分析

決定係数は目的変数のばらつきのうち、これらの説明変数で説明できる割合を表し、1 に近いほど当はまりがよいとされ、当該重回帰式の決定係数は 0.718 であった。

大学院も変数減少法で分析を試みたが、全体評価と A-②「放送授業を十分に視聴した」、A-③「印刷教材を熱心に学習した」及び(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」の単相関係数の符号は+であったが、得られた 3 者の標準偏回帰係数は-となり、またそれぞれの単相関係数が 0.200、0.293、0.384 で他の項目の中で最下位に位置していたため、この 3 項目を除外して分析を行った。

◆分析精度

重相関係数 R	0.847
決定係数	0.718
自由度修正済み決定係数	0.711
説明変数の数	12
ダーヴィンワトソン比	1.946

ダーヴィンワトソン比とは、残差同士の系列相関（自己相関）を示す指標で 0～4 までの値を示し、1 以下や 3 以上だと残差（誤差）に規則性があり、解析自体あるいはデータ自体に問題があり、「2」近辺の値ならよいとされ、その値は 1.946 となった。

今回の重回帰分析では分散分析表が示すとおり、有意水準 0.01 の判定で、かなりの精度で式の当てはまりの良さが確認できた。

(有意水準とは危険率と同義で 0.01 の場合、判定を誤る確率が 1%ある事を表している。)

◆分散分析表

変動	偏差平方和	自由度	不偏分散	分散比	p 値	判定
全体変動	261.0	529				
回帰による変動	187.4	12	15.6	109.7	0.000	[**]
回帰からの残差変動	73.6	517	0.142			

標準偏回帰係数とは偏回帰係数間の相互比較を可能にするためのものである。各説明変数の目的変数に対する影響力の度合い(寄与率)がこれによって分かる。

下表は「B-20. 全体評価」の説明変数として「標準偏回帰係数」の高い順に並べたものである。

最も高かったのは B-19 の理解度で標準偏回帰係数が 0.247、次いで B-18 の 0.201、他に B-17 (0.173)、B-4 (0.138)、B-15 (0.113) と続いた。

判定結果で有意となったのは B-13 の「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」までの 9 項目である。

(表最下段の定数項とは説明しきれない残りの部分である。)

標準偏回帰係数の四則演算が許されるなら、B-16 までの合計が 1.261 で、上位 5 項目の B-19 から B-15 の合計が 0.872 となり、この 5 項目の全体の満足度への寄与率は 69%となる。

全体評価(肯定的評価:88%)を上げるためには B-19 の理解度(同 86%)を上げる事が最も効果的で、同時に B-17 「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容」(同 90%)と B-4 「印刷教材の内容は適切な分量であった」(同 88%)の向上に努めることで全体評価が上昇するものと考えられる。

ただ、大学院は「全体評価(88%)」を含め、「B-17(90%)」「B-4(88%)」の肯定的評価が高いため、何らかの方法を用いて「B-17」と「B-4」の評価を高めるのは容易ではないと思われる。

(※「B-18 新しい知識が身につく視野が広がった」と「B-15 単位認定試験の問題は、科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」については漠然としていて、特に個人的な評価に依るところが大きく、施策として具体的な方法を見つけにくいいため、割愛した。)

表 2-4 【大学院】重回帰分析結果

目的変数	標準偏回帰係数	説明変数	判定
B-20.全体評価	0.247	B-19 この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)	[**]
	0.201	B-18 新しい知識が身につく視野が広がった	[**]
	0.173	B-17 学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった	[**]
	0.138	B-4 印刷教材の内容は適切な分量であった	[**]
	0.113	B-15 単位認定試験の問題は、科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった	[**]
	0.102	B-10 印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった	[**]
	0.098	B-5 講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった	[*]
	0.071	B-7 放送授業は教材としてよくできていると感じた	[*]
	0.063	B-13 通信指導のコメントは、納得のいくものだった	[*]
	0.055	B-16 授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った	[]
	-0.047	A-1 全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ	[]
-0.069	B-6 講師の熱意が十分に伝わった	[]	
定数項			[**]

大学院の重回帰分析の最後に施策を進めていく上で、役に立つと思われる、B-19 の理解度と相関の高い項目を上位 12 位までを挙げることにする。

ただ、2017 年度は下記の理由により偏相関係数を採用する。

※ X, Y の 2 つの関係に他の変数が影響を持っているときにその効果を差し引かないと X, Y の関係の強さを正しく評価できない。この場合、単相関係数ではなく偏相関係数を使う。

表 2 - 5 【大学院】 B-19 の理解度と相関の高い上位 12 項目

順位	項目名	B-19との 偏相関係数	判定
1	A- (3)印刷教材を熱心に学習した	0.208	[**]
2	B- (3) 印刷教材の難易度は適切だった	0.187	[**]
3	B-(10)印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった	0.133	[**]
4	A- (1)全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ	0.079	[]
5	B-(16) 授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った	0.048	[]
6	B-(11)図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った	0.043	[]
7	B- (5) 講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった	0.040	[]
8	B- (8)TVの特性が十分に生かされていると感じた／ 映像がなくても十分理解できる内容だと感じた	0.035	[]
9	B- (6)「講師の熱意が十分に伝わった」	0.031	[]
10	B-(18) 新しい知識が身につく視野が広がった	0.023	[]
11	A- (2)放送授業を十分に視聴した	0.020	[]
12	B- (2) 放送授業の内容は適切な分量であった	0.007	[]
参考	B-(20) 全体評価	0.336	[**]

凡例	有意水準
[**]	0.01
[*]	0.05

Ⅲ. 自由記述のまとめ

Ⅲ－１．学部

【学部】「基盤科目」科目の傾向

よかった点

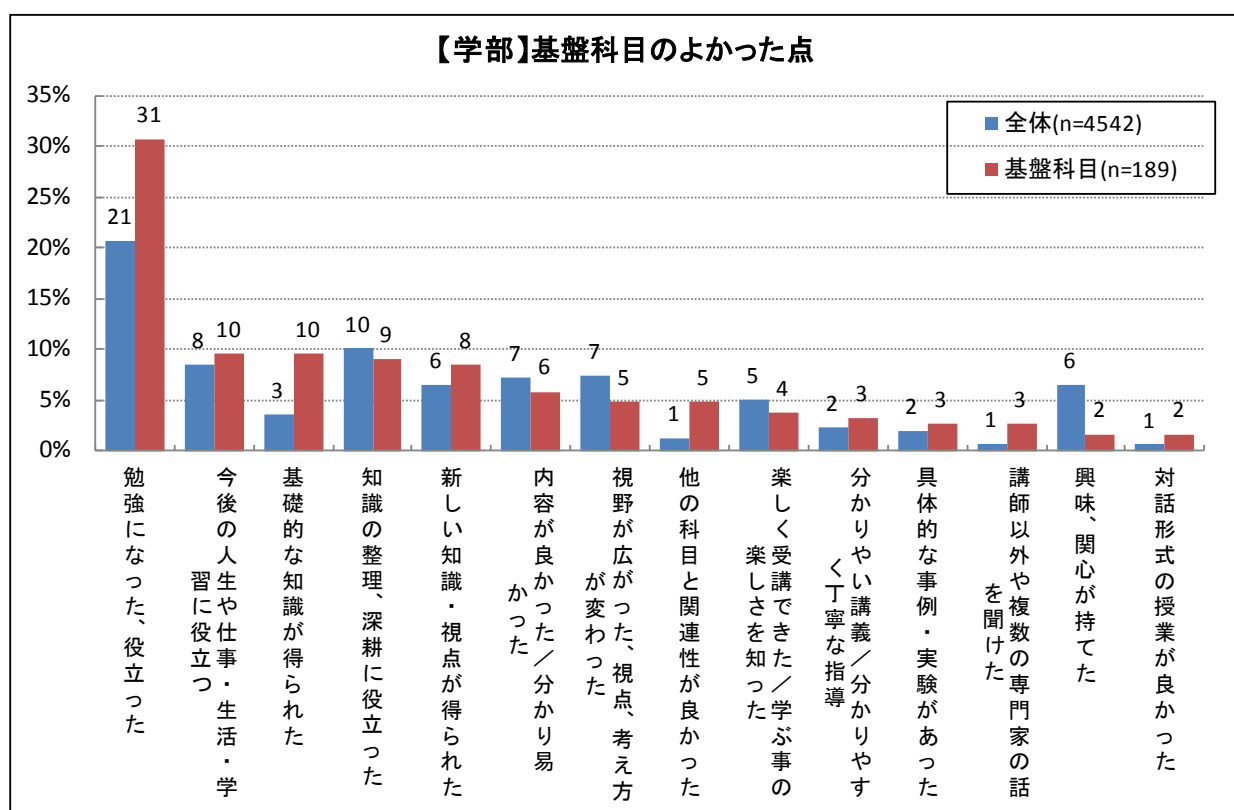
自由記述の統計表から学部の基盤科目で 2%以上の回答があった項目とその項目の全体の比率をグラフ化した。(大学院を含む他の科目も同じ扱いをした。)

よかった点では「勉強になった、役立った」が 31%と最も多く、全体を 10 ポイント上回わり満足度の高さが伺える。

その他、全体を大きく上回ったのは「基礎的な知識が得られた」で、反対に「興味、関心が持てた」は全体より 4 ポイント減であった。

個別の事例や具体的な事に対する評価は少なく、履修の結果得られた総合的なベネフィットに対する評価の方が多く挙げられていた。

図 2－8 1 【学部】よかった点



【学部】「基盤科目」科目の傾向

気になった点

「難しい/高度すぎる」と「もっと専門性を持たせて」という相反する意見が同程度みられた。

「もっと専門性を」については全体の比率が 1%である事から基盤科目特有の意見だと思われる。

図 2 - 8 2 【学部】気になった点

